

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第126集

深谷市

うち すな だ やなぎまち  
ウツギ内・砂田・柳町

一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





上武道路全景





ウツギ内・砂田・柳町遺跡全景





砂田遺跡全景



柳町遺跡全景





ウツギ内遺跡全景





砂田遺跡第1号井戸跡出土遺物





柳町遺跡第107号住居跡出土遺物



柳町遺跡第57号住居跡出土遺物



# 序

坂東太郎の名で親しまれ、悠久の時をその滔々たる流れに誇る大河、それが利根川であります。奔流は関東平野の中央部に横たわり、ほぼ埼玉県と群馬県の境をなしております。埼玉県側には広大な沖積低地が作り上げられているため、早くから稲や野菜の生産が盛んに行なわれてまいりました。

一方、近年では都市化が急速に進み、住宅の建設や交通網の整備など、新たな開発が目立ってきております。熊谷市西別府から深谷市北東部を通り、利根川を渡って群馬県に達する上武道路の建設もその一例であります。

計画された路線内に所在する10箇所の遺跡については、関係各機関の間で協議が重ねられ、当事業団が記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

調査の対象となった遺跡は弥生時代から中世までにおよび、貴重な資料が数多く発見されました。その中心は古墳時代の集落跡で、隣合う柳町・城北・居立の3遺跡からは膨大な量の土器とともに、合わせて400軒以上もの住居跡が検出されております。このことは当時の社会や生活を考えるうえで、大いに注目される成果であります。

本書はこれらのうち、深谷市のウツギ内遺跡、砂田遺跡、柳町遺跡について、それぞれの調査成果をまとめたものであります。本報告書が今後の埋蔵文化財保護に関する啓蒙と普及、さらには調査研究のための資料として活用され、本県文化の振興に寄与するところがあれば幸いです。

末尾ながら、発掘調査および報告書の作成に際し、御指導と多大の御協力を賜った埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、建設省大宮国道工事事務所、同熊谷出張所、深谷市教育委員会、妻沼町教育委員会、熊谷市教育委員会、ならびに発掘と整理作業に携わられました皆様に対し、深く感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 荒井修二



# 例 言

1 本書は一般国道17号(上武道路)改築工事業にかかる、ウツギ内遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡のコード番号と所在地、および発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、以下に示すとおりである。

ウツギ内遺跡	60-256	深谷市大字蓮沼字ウツギ内644番地他。
	平成元年2月21日	委保 第5の2140号
	平成元年6月15日	委保 第5の541号
砂田遺跡	60-167	深谷市大字蓮沼字砂田521番地他。
	平成元年11月1日	委保 第5の1149号
柳町遺跡	60-171	深谷市大字蓮沼字柳町338番地他。
	平成元年6月15日	委保 第5の542号
	平成2年10月3日	委保 第5の733号

2 発掘調査は埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整を経て、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 現地における発掘作業は、昭和63年12月1日から平成2年8月2日まで、整理・報告書作成作業は、平成3年4月1日から平成5年3月31日まで、それぞれ実施した。

4 出土遺物の整理および挿図等の作成は剣持和夫が担当し、赤熊浩一の協力を得た。

5 本書で用いた遺構番号は、原則的には発掘作業時のものである。ただし、柳町遺跡の住居跡については整理に際して補正・改訂したため、既刊の調査年報等とは異なっている。

6 掲載した遺構写真は、剣持・木戸春夫・石坂俊郎・村田章人・大屋道則・福田 聖が、遺物写真は巻頭カラーを折原基久、他を剣持が撮影した。

7 各遺跡での基準点測量と航空写真測量は中央航業株式会社に、出土土器の胎土分析は(株)第四紀地質研究所の井上 巖氏に委託した。

8 本書の執筆はIの1を文化財保護課が、他を剣持が行なった。

9 本書の編集は資料部資料整理第二課の剣持が行なった。

10 本書にかかる資料は、平成5年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管している。

11 本書にかかる遺物の註記は、以下の略号で遺跡名を表している。

ウツギ内…UTGUT 砂田…SND 柳町…YNGMT

12 現地での調査から本書の刊行まで、下記の方々より御教示、御助力を賜った。

浅野晴樹 荒川 弘 金子正之 小池晋禄 澤出晃越 芹澤清八 竹澤 謙  
田代 隆 立石盛詞 徳江秀夫 中村誠二 初山孝行 藤田典夫 (敬称略)



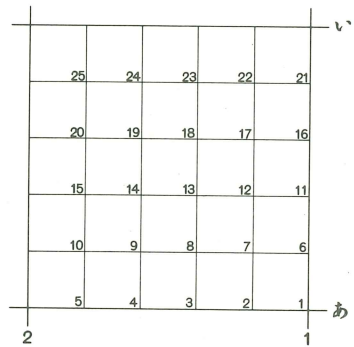
# 例 則

1 本書における挿図の指示は以下のとおりである。

- 遺構の表記記号はS Jが住居跡、S Bが掘立柱建物跡、S Kが土坑、S Eが井戸跡、S Dが溝跡、S Xが性格不明遺構である。
- XとYで示された数値は、国家標準直角座標第IX系に基づく各座標値を表し、矢印の方向はすべて座標北を示す。第IX系の座標原点は北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒で、原点座標値はX=0.000m、Y=0.000mである。(第1図参照)
- グリッドは30×30mで、砂田遺跡と柳町遺跡が共通している。名称は南東隅の杭名称を用い、南から北に50音順、東から西に算用数字で表示している。小グリッドはその中を6×6mに25分割したものである。(図参照)
- 住居跡の主軸としたものは、カマドの付設された壁と直交する軸線を表す。規模は主軸長×これに直交する軸長を示し、その長さにはカマド(壁より突出した部位)を含まない。また、主軸方向は座標北を起点に、東西へ偏する角度を記した。
- 土層図中のレベル数値は、すべて標高(単位m)を表す。
- 土層図の説明文中、Lは黄褐色ローム質粘性土の地山を、Gは暗灰色粘性土の地山を主体的とする覆土を表す。含有物は焼土をB、炭化物をC、鉄分をFe、マンガンをMnで表した。色調は『新版 標準土色帖』1990年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)による。出土土器の観察も同じである。
- 縮尺は次の率を原則とし、それ以外のは個別に示した。  
 遺構 住居跡 1/60 掘立柱建物跡 1/80 土坑・井戸跡 1/40  
 遺物 土器 1/4 土製品・石製模造品・古銭 1/2 板石塔婆・石塔・石臼 1/8
- 遺物の断面は土師器を白抜きで、須恵器を塗りつぶして表現した。

2 土器観察表の記載は以下のとおりである。

- 法量はcmで口径×器高×底径を示し、反転や推定のものは( )を付した。
- 重量はgを単位としたが、ほぼ完存するもののみを計測した。
- 残存率はおおまかに目測したものである。
- 胎土は肉眼で観察された範囲での混有物を記し、Wは白色、W'は白色透明、Bは黒色、B'は黒色光沢、Rは赤色のもので、針は白色針状物質、片は結晶片岩である。「多」「少」は相対的な比較である。



グリッド呼称



# 目 次

序

例言

例則

## I 発掘調査の概要

- 1 調査に至るまでの経過…………… 1
- 2 発掘調査の組織…………… 2
- 3 調査の経過…………… 4

## II 遺跡群の立地と環境

- 1 地勢…………… 7
- 2 遺跡群の概要…………… 9
- 3 噴砂について……………13

## III ウツギ内遺跡の調査

- 1 遺跡の概要……………15
- 2 検出された遺構と遺物……………18

## IV 砂田遺跡の調査

- 1 遺跡の概要……………115
- 2 検出された遺構と遺物……………117

## V 柳町遺跡の調査

- 1 遺跡の概要……………161
- 2 検出された遺構と遺物……………163

## VI 柳町遺跡出土土器の胎土分析

- 1 分析の目的……………398
- 2 分析の結果……………399

## VII 結語

- 1 砂田・柳町遺跡の出土土器について……………404



# 挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形と遺跡群の位置	7	第42図	第140～149号土坑(1)	51
第2図	ウツギ内・砂田・柳町遺跡の位置	8	第43図	第140～149号土坑(2)	52
第3図	周辺の主な遺跡	10	第44図	第150・151号土坑	52
第4図	ウツギ内遺跡・砂田遺跡・ 柳町遺跡調査範囲	12	第45図	第153～156号土坑	53
<b>ウツギ内遺跡</b>			第46図	第157～160・164号土坑	54
第5図	ウツギ内遺跡全体図	16	第47図	第167号土坑	55
第6図	ウツギ内遺跡住居跡・土坑・溝分布図	17	第48図	第169・172号土坑	56
第7図	第1号住居跡	18	第49図	土坑出土遺物	57
第8図	第1号住居跡出土遺物	19	第50図	ウツギ内遺跡井戸跡分布図	61
第9図	第2号住居跡	20	第51図	第1号井戸跡	63
第10図	第2号住居跡出土遺物	21	第52図	第3～5号井戸跡(1)	64
第11図	第3号住居跡	21	第53図	第3～5号井戸跡(2)	65
第12図	第3号住居跡出土遺物	22	第54図	第6・12・13号井戸跡 第114・191・192号土坑(1)	67
第13図	第4・5号住居跡	23	第55図	第6・12・13号井戸跡 第114・191・192号土坑(2)	68
第14図	第4・5号住居跡出土遺物	25	第56図	第7号井戸跡	69
第15図	第6号住居跡	25	第57図	第8・9号井戸跡 第51～56号土坑(1)	70
第16図	第6号住居跡出土遺物	25	第58図	第8・9号井戸跡 第51～56号土坑(2)	71
第17図	第1～4号土坑	27	第59図	第10・11号井戸跡	72
第18図	第5～8号土坑	28	第60図	第14号井戸跡 第117・118号土坑	73
第19図	第9～11号土坑	29	第61図	第15号井戸跡(1) 第126～129号土坑	74
第20図	第12号土坑	30	第62図	第15号井戸跡(2) 第17号井戸跡	75
第21図	第13～16・69号土坑	31	第63図	第16・18号井戸跡	76
第22図	第17～21号土坑	32	第64図	第19～21号井戸跡 第89～93号土坑(1)	77
第23図	第23・24・34号土坑	33	第65図	第19～21号井戸跡 第89～93号土坑(2)	78
第24図	第25・26・30・31号土坑	34	第66図	第22・26号井戸跡 第77・78号土坑	79
第25図	第32・33・35～39・43・44号土坑(1)	35	第67図	第24・25号井戸跡	80
第26図	第32・33・35～39・43・44号土坑(2)	36	第68図	第27号井戸跡	81
第27図	第40～42号土坑	37	第69図	第28～31号井戸跡 第108号土坑 第22号溝	82
第28図	第45・47～49号土坑	38	第70図	第32・35号井戸跡 第27号溝	84
第29図	第50・57～60号土坑	39	第71図	第36～38号井戸跡	85
第30図	第61～64・70号土坑	40	第72図	第40号井戸跡	86
第31図	第67・68号土坑	41	第73図	第50・73号井戸跡	89
第32図	第71～73号土坑	42	第74図	第102・107号井戸跡	90
第33図	第66・74～76号土坑	43	第75図	第105・106号井戸跡 第30号溝	91
第34図	第79・94～97・193～195号土坑	44	第76図	井戸跡出土遺物(1)	92
第35図	第99～103号土坑	45	第77図	井戸跡出土遺物(2)板石塔婆	93
第36図	第98・107・110～113号土坑(1)	46			
第37図	第98・107・110～113号土坑(2)	47			
第38図	第80・81号土坑	47			
第39図	第104～106・130～132号土坑	48			
第40図	第119～125号土坑	49			
第41図	第133～139号土坑	50			



第78図	第11号井戸跡出土石臼	94	第121図	第1号掘立柱建物跡	149
第79図	第40号井戸跡出土石臼(1)	95	第122図	第1・3～5号井戸跡	151
第80図	第40号井戸跡出土石臼(2)	96	第123図	第6～8号井戸跡	153
第81図	第11・13～17・20～30号溝(1)	99	第124図	第1・6号井戸跡出土遺物	154
第82図	第11・13～17・20～30号溝(2)	100	第125図	第10～12号井戸跡	155
第83図	溝出土遺物(1)	103	第126図	第13・14・18号井戸跡	157
第84図	溝出土遺物(2)	104	第127図	第18号井戸跡出土遺物	158
第85図	第30号溝出土遺物(1)	106	第128図	第17号井戸跡 第8・9号土坑	159
第86図	第30号溝出土遺物(2)	107	<b>柳町遺跡</b>		
第87図	第30号溝出土遺物(3)	108	第129図	柳町遺跡全体図	162
第88図	第30号溝出土遺物(4)	109	第130図	第1号住居跡	163
第89図	河川跡出土遺物	112	第131図	第2号住居跡	164
第90図	グリッド出土遺物	113	第132図	第2号住居跡出土遺物	165
<b>砂田遺跡</b>			第133図	第3号住居跡・同遺物出土状態	166
第91図	砂田遺跡全体図	115	第134図	第3号住居跡出土遺物	167
第92図	第1号住居跡	118	第135図	第4号住居跡	168
第93図	第1号住居跡出土遺物	119	第136図	第5号住居跡	169
第94図	第2号住居跡	120	第137図	第5号住居跡出土遺物	170
第95図	第2号住居跡出土遺物	121	第138図	第6号住居跡	171
第96図	第3号住居跡	123	第139図	第6号住居跡出土遺物	172
第97図	第3号住居跡カマド	124	第140図	第7号住居跡出土遺物	172
第98図	第3号住居跡出土遺物(1)	125	第141図	第7号住居跡	173
第99図	第3号住居跡出土遺物(2)	126	第142図	第8号住居跡	174
第100図	第3号住居跡出土遺物(3)	127	第143図	第8号住居跡出土遺物	174
第101図	第3号住居跡出土遺物(4)	128	第144図	第9号住居跡(カマド)	175
第102図	第4号住居跡	129	第145図	第10号住居跡	176
第103図	第4号住居跡出土遺物	130	第146図	第9・10号住居跡出土遺物	177
第104図	第5号住居跡(1)	131	第147図	第11号住居跡	178
第105図	第5号住居跡(2)	132	第148図	第11号住居跡出土遺物(1)	179
第106図	第5号住居跡カマド・ 南壁遺物出土状態	133	第149図	第11号住居跡出土遺物(2)	180
第107図	第5号住居跡出土遺物(1)	135	第150図	第12・13号住居跡	182
第108図	第5号住居跡出土遺物(2)	136	第151図	第13号住居跡出土遺物	183
第109図	第5号住居跡出土遺物(3)	137	第152図	第14号住居跡	184
第110図	第6号住居跡	138	第153図	第14号住居跡出土遺物	185
第111図	第6号住居跡出土遺物	139	第154図	第15号住居跡	186
第112図	第7号住居跡(1)	140	第155図	第16号住居跡	187
第113図	第7号住居跡(2)	141	第156図	第17号住居跡	187
第114図	第7号住居跡カマド	142	第157図	第18号住居跡(1)	188
第115図	第7号住居跡出土遺物(1)	143	第158図	第18号住居跡(2)	189
第116図	第7号住居跡出土遺物(2)	144	第159図	第18号住居跡出土遺物(1)	190
第117図	第7号住居跡出土遺物(3)	145	第160図	第18号住居跡出土遺物(2)	191
第118図	第7号住居跡出土遺物(4)	146	第161図	第19号住居跡	192
第119図	第8号住居跡	147	第162図	第20・21号住居跡	193
第120図	第8号住居跡出土遺物	148	第163図	第20・21号住居跡出土遺物	194
			第164図	第22号住居跡	195



第165図	第22号住居跡出土遺物	196	第208図	第42号住居跡出土遺物	245
第166図	第23・24号住居跡	196	第209図	第43号住居跡出土遺物(1)	246
第167図	第23・24号住居跡出土遺物	197	第210図	第43号住居跡出土遺物(2)	247
第168図	第25・26号住居跡(1)	198	第211図	第44号住居跡	249
第169図	第25・26号住居跡(2)		第212図	第44号住居跡遺物出土状態	250
	第26号住居跡カマド	199	第213図	第44号住居跡出土遺物(1)	252
第170図	第25号住居跡出土遺物	200	第214図	第44号住居跡出土遺物(2)	253
第171図	第26号住居跡出土遺物	201	第215図	第44号住居跡出土遺物(3)	254
第172図	第27号住居跡	203	第216図	第45号住居跡	255
第173図	第28号住居跡(1)	204	第217図	第45号住居跡出土遺物	256
第174図	第28号住居跡(2)	205	第218図	第46号住居跡	257
第175図	第28号住居跡出土遺物(1)	206	第219図	第46号住居跡出土遺物	258
第176図	第28号住居跡出土遺物(2)	207	第220図	第47号住居跡	259
第177図	第28号住居跡出土遺物(3)	208	第221図	第47号住居跡出土遺物	260
第178図	第29号住居跡	210	第222図	第48・49号住居跡	260
第179図	第29号住居跡出土遺物	211	第223図	第48・49号住居跡出土遺物	261
第180図	第30号住居跡	212	第224図	第50号住居跡	262
第181図	第30号住居跡出土遺物	213	第225図	第50号住居跡出土遺物	263
第182図	第31号住居跡	214	第226図	第51号住居跡	265
第183図	第31号住居跡出土遺物	215	第227図	第51号住居跡出土遺物	266
第184図	第32号住居跡	216	第228図	第52号住居跡	266
第185図	第32・34号住居跡出土遺物	216	第229図	第52号住居跡出土遺物	267
第186図	第33～35号住居跡(1)	217	第230図	第53号住居跡・同遺物出土状態	268
第187図	第33～35号住居跡(2)		第231図	第53号住居跡出土遺物	269
	第33号住居跡カマド	218	第232図	第54号住居跡	271
第188図	第33号住居跡出土遺物(1)	219	第233図	第54号住居跡出土遺物	272
第189図	第33号住居跡出土遺物(2)	220	第234図	第55号住居跡	274
第190図	第35号住居跡出土遺物	222	第235図	第55号住居跡カマド	275
第191図	第36号住居跡	223	第236図	第55号住居跡出土遺物(1)	276
第192図	第36号住居跡出土遺物	224	第237図	第55号住居跡出土遺物(2)	277
第193図	第37号住居跡	225	第238図	第56号住居跡	279
第194図	第37号住居跡出土遺物(1)	226	第239図	第56号住居跡出土遺物(1)	280
第195図	第37号住居跡出土遺物(2)	227	第240図	第56号住居跡出土遺物(2)	281
第196図	第38号住居跡	229	第241図	第57号住居跡	283
第197図	第38号住居跡出土遺物(1)	230	第242図	第57号住居跡出土遺物(1)	284
第198図	第38号住居跡出土遺物(2)	231	第243図	第57号住居跡出土遺物(2)	285
第199図	第39号住居跡	233	第244図	第58・59号住居跡	287
第200図	第39号住居跡出土遺物	234	第245図	第58・59号住居跡出土遺物	288
第201図	第40号住居跡	236	第246図	第60号住居跡	289
第202図	第40号住居跡出土遺物	237	第247図	第61号住居跡	290
第203図	第41号住居跡・同遺物出土状態	238	第248図	第61号住居跡出土遺物	290
第204図	第41号住居跡出土遺物(1)	239	第249図	第62・63号住居跡	292
第205図	第41号住居跡出土遺物(2)	240	第250図	第64号住居跡	293
第206図	第42・43号住居跡	242	第251図	第65号住居跡	294
第207図	第42・43号住居跡遺物出土状態	244	第252図	第65号住居跡	295



	上：炭化物・焼土分布状態				
	下：遺物出土状態				
第253図	第65号住居跡出土遺物(1) ……………	296	第296図	第95～97号住居跡……………	339
第254図	第65号住居跡出土遺物(2) ……………	297	第297図	第95号住居跡出土遺物……………	341
第255図	第65号住居跡出土遺物(3) ……………	298	第298図	第98・99号住居跡……………	342
第256図	第66・67号住居跡……………	300	第299図	第100号住居跡……………	343
第257図	第66号住居跡出土遺物……………	301	第300図	第101～105号住居跡……………	344
第258図	第67号住居跡出土遺物(1) ……………	302	第301図	第101号住居跡……………	345
第259図	第67号住居跡出土遺物(2) ……………	303	第302図	第102号住居跡……………	346
第260図	第68～70号住居跡(1) ……………	304	第303図	第103号住居跡……………	347
第261図	第68～70号住居跡(2) ……………	305	第304図	第104号住居跡……………	348
第262図	第68号住居跡……………	306	第305図	第101・102・104号住居跡出土遺物 ……	350
第263図	第68号住居跡出土遺物……………	306	第306図	第105号住居跡……………	351
第264図	第69号住居跡出土遺物……………	307	第307図	第105号住居跡出土遺物……………	352
第265図	第70号住居跡出土遺物……………	309	第308図	第102～105号住居跡出土土錘……………	353
第266図	第71号住居跡……………	310	第309図	第106・107号住居跡(1)……………	354
第267図	第72・73号住居跡……………	311	第310図	第106・107号住居跡(2)……………	356
第268図	第74号住居跡……………	312	第311図	第106・107号住居跡(3)……………	357
第269図	第75号住居跡……………	313	第312図	第106号住居跡出土遺物……………	358
第270図	第71～75号住居跡出土遺物……………	314	第313図	第107号住居跡出土遺物(1)……………	359
第271図	第76号住居跡(カマド)……………	315	第314図	第107号住居跡出土遺物(2)……………	360
第272図	第77～80号住居跡(1)……………	316	第315図	第107号住居跡出土遺物(3)……………	361
第273図	第77～80号住居跡(2)……………	317	第316図	第107号住居跡出土遺物(4)……………	362
第274図	第77号住居跡出土遺物(1)……………	318	第317図	第108号住居跡……………	364
第275図	第77号住居跡出土遺物(2)……………	319	第318図	第108号住居跡出土遺物……………	364
第276図	第79号住居跡出土遺物……………	320	第319図	第109号住居跡……………	366
第277図	第80号住居跡出土遺物……………	321	第320図	第109号住居跡カマド……………	367
第278図	第81・82号住居跡……………	322	第321図	第109号住居跡出土遺物(1)……………	368
第279図	第83・84号住居跡……………	323	第322図	第109号住居跡出土遺物(2)……………	369
第280図	第83・84号住居跡出土遺物……………	324	第323図	第110号住居跡(1)……………	370
第281図	第85号住居跡……………	326	第324図	第110号住居跡(2)……………	371
第282図	第86号住居跡……………	326	第325図	第110号住居跡出土遺物(1)……………	372
第283図	第85・86号住居跡出土遺物……………	327	第326図	第110号住居跡出土遺物(2)……………	373
第284図	第87～89号住居跡出土遺物……………	327	第327図	第1号掘立柱建物跡……………	374
第285図	第87号住居跡……………	328	第328図	第2号掘立柱建物跡……………	375
第286図	第88号住居跡……………	329	第329図	第3号掘立柱建物跡……………	376
第287図	第89号住居跡……………	329	第330図	第4号掘立柱建物跡……………	377
第288図	第90号住居跡……………	330	第331図	第5号掘立柱建物跡(1)……………	378
第289図	第90号住居跡出土遺物(1)……………	332	第332図	第5号掘立柱建物跡(2)……………	379
第290図	第90号住居跡出土遺物(2)……………	333	第333図	第6号掘立柱建物跡……………	380
第291図	第91・92号住居跡……………	334	第334図	第7号掘立柱建物跡……………	380
第292図	第91号住居跡出土遺物……………	335	第335図	第3・5号掘立柱建物跡出土遺物……………	381
第293図	第92号住居跡出土遺物……………	336	第336図	第1～3号土坑……………	382
第294図	第93・94号住居跡……………	337	第337図	第4～7号土坑……………	383
第295図	第93号住居跡出土遺物……………	338	第338図	第8～11号土坑……………	384
			第339図	第12～15号土坑……………	385
			第340図	井戸跡出土遺物……………	386

第341図	第1・2号井戸跡	387
第342図	第4～6号井戸跡	388
第343図	第7・8号井戸跡	389
第344図	第9～11号井戸跡	390
第345図	第20号溝出土遺物	393
第346図	第1・7・17・18・22号溝出土遺物	394
第347図	第2・4号性格不明遺構	395
第348図	第2・4号性格不明遺構出土遺物	395

## 胎土分析・結語

第349図	石英(Qt)一斜長石(P1)相関図	402
第350図	砂田・柳町遺跡第I期の土器	404
第351図	砂田・柳町遺跡第II期の土器	407
第352図	砂田・柳町遺跡第III期の土器(1)	408
第353図	砂田・柳町遺跡第III期の土器(2)	409
第354図	砂田・柳町遺跡第IV期の土器	413

## 表 目 次

第1表	上武道路関連埋蔵文化財 発掘調査経過	4
第2表	ウツギ内遺跡出土土錘・石錘・土製品一覧	26
第3表	ウツギ内遺跡土坑一覧(1)	58
第4表	ウツギ内遺跡土坑一覧(2)	59
第5表	ウツギ内遺跡土坑一覧(3)	60
第6表	ウツギ内遺跡井戸跡一覧(1)	97
第7表	ウツギ内遺跡井戸跡一覧(2)	98
第8表	ウツギ内遺跡溝一覧(1)	111
第9表	ウツギ内遺跡溝一覧(2)	112
第10表	砂田遺跡出土土玉・土錘一覧	148

第11表	砂田遺跡土坑一覧	160
第12表	砂田遺跡井戸跡一覧	160
第13表	砂田遺跡溝一覧	160
第14表	柳町遺跡土坑一覧	381
第15表	柳町遺跡井戸跡一覧	391
第16表	柳町遺跡溝一覧	391
第17表	柳町遺跡出土滑石製・ 土製模造品一覧	396
第18表	柳町遺跡出土土錘一覧	396
第19表	柳町遺跡出土土玉一覧	397
第20表	胎土性状表	400

## 写 真 図

巻頭図版1	上武道路全景
巻頭図版2	ウツギ内・砂田・柳町遺跡全景
巻頭図版3	ウツギ内遺跡全景
巻頭図版4	砂田・柳町遺跡全景
巻頭図版5	砂田遺跡第1号井戸跡出土遺物 (古瀬戸 尊式花瓶)
巻頭図版6	柳町遺跡第57・107号住居跡出土遺物

図版1	ウツギ内遺跡全景航空写真
図版2	ウツギ内遺跡中央部航空写真
図版3	ウツギ内遺跡検出遺構(1)住居跡・井戸跡
図版4	ウツギ内遺跡検出遺構(2)井戸跡・溝
図版5	ウツギ内遺跡出土遺物(1) 第1・2号住居跡
図版6	ウツギ内遺跡出土遺物(2) 第3～6号住居跡
図版7	ウツギ内遺跡出土遺物(3)土坑・井戸跡
図版8	ウツギ内遺跡出土遺物(4)溝
図版9	ウツギ内遺跡出土遺物(5)第30号溝
図版10	ウツギ内遺跡出土遺物(6)第30号溝
図版11	ウツギ内遺跡出土遺物(7)第30号溝

## 版 目 次

図版12	ウツギ内遺跡出土遺物(8) 土坑・溝・河川跡
図版13	砂田遺跡全景航空写真
図版14	砂田遺跡検出遺構(1)第1～5号住居跡
図版15	砂田遺跡検出遺構(2) 第5～8号住居跡・第1号掘立柱建物跡
図版16	砂田遺跡出土遺物(1)第1号住居跡
図版17	砂田遺跡出土遺物(2)第2・3号住居跡
図版18	砂田遺跡出土遺物(3)第3号住居跡
図版19	砂田遺跡出土遺物(4)第3号住居跡
図版20	砂田遺跡出土遺物(5)第3号住居跡
図版21	砂田遺跡出土遺物(6)第4・5号住居跡
図版22	砂田遺跡出土遺物(7)第5号住居跡
図版23	砂田遺跡出土遺物(8)第6・7号住居跡
図版24	砂田遺跡出土遺物(9)第7号住居跡
図版25	砂田遺跡出土遺物(10)第7号住居跡
図版26	砂田遺跡出土遺物(11)第7号住居跡
図版27	砂田遺跡出土遺物(12)第8号住居跡 第1・18号井戸跡
図版28	砂田遺跡出土遺物(13)土錘・土玉・紡錘車
図版29	柳町遺跡全景航空写真



- 図版30 柳町遺跡南半部航空写真
- 図版31 柳町遺跡検出遺構(1)調査区全景  
第1~6号住居跡
- 図版32 柳町遺跡検出遺構(2)第7~15号住居跡
- 図版33 柳町遺跡検出遺構(3)第16~22号住居跡
- 図版34 柳町遺跡検出遺構(4)第23~28号住居跡
- 図版35 柳町遺跡検出遺構(5)第28~36号住居跡
- 図版36 柳町遺跡検出遺構(6)第37~43号住居跡
- 図版37 柳町遺跡検出遺構(7)第43~47号住居跡
- 図版38 柳町遺跡検出遺構(8)第48~54号住居跡
- 図版39 柳町遺跡検出遺構(9)第55~64号住居跡
- 図版40 柳町遺跡検出遺構(10)第65~85号住居跡
- 図版41 柳町遺跡検出遺構(11)第87~102号住居跡
- 図版42 柳町遺跡検出遺構(12)第101~109号住居跡
- 図版43 柳町遺跡検出遺構(13)第110号住居跡  
第1~7号掘立柱建物跡
- 図版44 柳町遺跡出土遺物(1)第3号住居跡
- 図版45 柳町遺跡出土遺物(2)  
第3・6・7号住居跡
- 図版46 柳町遺跡出土遺物(3)第8・11号住居跡
- 図版47 柳町遺跡出土遺物(4)  
第11・13・18号住居跡
- 図版48 柳町遺跡出土遺物(5)第18号住居跡
- 図版49 柳町遺跡出土遺物(6)  
第18・20・21・22号住居跡
- 図版50 柳町遺跡出土遺物(7)  
第24・25・26号住居跡
- 図版51 柳町遺跡出土遺物(8)第26・28号住居跡
- 図版52 柳町遺跡出土遺物(9)第28号住居跡
- 図版53 柳町遺跡出土遺物(10)  
第28・29・30号住居跡
- 図版54 柳町遺跡出土遺物(11)  
第31・32・33号住居跡
- 図版55 柳町遺跡出土遺物(12)第33・35号住居跡
- 図版56 柳町遺跡出土遺物(13)第37号住居跡
- 図版57 柳町遺跡出土遺物(14)第37・38号住居跡
- 図版58 柳町遺跡出土遺物(15)  
第38・39・41号住居跡
- 図版59 柳町遺跡出土遺物(16)第41・42号住居跡
- 図版60 柳町遺跡出土遺物(17)第43号住居跡
- 図版61 柳町遺跡出土遺物(18)第43・44号住居跡
- 図版62 柳町遺跡出土遺物(19)第44号住居跡
- 図版63 柳町遺跡出土遺物(20)  
第46・47・50・52・53号住居跡
- 図版64 柳町遺跡出土遺物(21)第54・55号住居跡
- 図版65 柳町遺跡出土遺物(22)第55・56号住居跡
- 図版66 柳町遺跡出土遺物(23)第56・57号住居跡
- 図版67 柳町遺跡出土遺物(24)第57号住居跡
- 図版68 柳町遺跡出土遺物(25)第57・58号住居跡
- 図版69 柳町遺跡出土遺物(26)第59・65号住居跡
- 図版70 柳町遺跡出土遺物(27)第66・67号住居跡
- 図版71 柳町遺跡出土遺物(28)  
第69・70・77号住居跡
- 図版72 柳町遺跡出土遺物(29)第77・80号住居跡
- 図版73 柳町遺跡出土遺物(30)  
第80・83・90号住居跡
- 図版74 柳町遺跡出土遺物(31)第91・93号住居跡
- 図版75 柳町遺跡出土遺物(32)  
第95・101・104・106号住居跡
- 図版76 柳町遺跡出土遺物(33)第105号住居跡
- 図版77 柳町遺跡出土遺物(34)第107号住居跡
- 図版78 柳町遺跡出土遺物(35)第107号住居跡
- 図版79 柳町遺跡出土遺物(36)第107号住居跡
- 図版80 柳町遺跡出土遺物(37)第107・109号住居跡
- 図版81 柳町遺跡出土遺物(38)第109号住居跡
- 図版82 柳町遺跡出土遺物(39)第110号住居跡  
第3号掘立柱建物跡 第20号溝
- 図版83 柳町遺跡出土遺物(40)  
石製・土製品 第55号住居跡土玉
- 図版84 柳町遺跡出土遺物(41)第65・他住居跡土玉
- 図版85 柳町遺跡出土遺物(42)土錘・紡錘車

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至るまでの経過

建設省では、首都圏における交通量の増大に対処するため、さまざまな施策を推し進めてきた。埼玉県内においても昭和30年代の後半から特に交通量の厳しい幹線道路を中心に、各種のバイパス建設が計画された。昭和40年代後半にはその大綱が示され、埋蔵文化財の取り扱いについての事前協議が開始された。

昭和46年には各種バイパスの建設計画に伴い、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から埼玉県教育局文化財保護室長（当時）あて、昭和46年11月25日付大国調146号をもって「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパス及び一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について（依頼）」があった。これを受けて文化財保護室では、埋蔵文化財包蔵地地図と照合した結果、各バイパス建設予定地内に周知の埋蔵文化財が所在することを確認し、その旨教文第854号をもって解答するとともに、今後は各事業計画に沿って順次対応していくこととした。

上武道路は、熊谷市西別府を起点とし、深谷市の北東部をかすめて利根川を渡り、群馬県伊勢崎市から前橋市に至る全長約40kmの道路である。このうち約5kmが埼玉県を通過するが、県内の事業予定地については埋蔵文化財の所在が不明確なので、改めて分布調査を実施する必要があった。そこで、昭和62年11月5日付大国調第155号をもって建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所長から県教育委員会教育長あて「一般国道17号（上武道路）改築工事の実施に伴う埋蔵文化財の所在について（照会）」があったのを受け、県内の事業予定地内全線にわたり詳細な分布調査を実施した。その結果、同改築予定地内に12箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されたので、昭和62年12月7日付教文第1091号をもって県教育委員会教育長から大宮国道工事事務所長あて次のとおり回答した。

- (1) 上記の埋蔵文化財については、工事着手に先立って発掘調査を実施すること。
- (2) 発掘調査の実施に際しては、第1次調査を実施して事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地の規模及び性格等について明確にした後、第2次調査を実施すること。
- (3) 第1次調査の実施については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と別途協議すること。
- (4) 第2次調査の実施については、別途当教育局文化財保護課と協議すること。

この回答に基づき、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が第1次調査を実施した結果、深谷市内に所在する10箇所の埋蔵文化財包蔵地について、第2次調査を実施することが必要となった。そこで県教育委員会教育長から大宮国道工事事務所長あて、昭和63年3月31日付教文第1596号で事業予定地内に所在する埋蔵文化財については、事前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知した。

これら10箇所の遺跡のうち、ウツギ内、居立、前、根絡の4遺跡が昭和63年度当初から発掘調査が開始された。



## 2 発掘調査の組織

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発 掘

昭和63年度

理 事 長 長 井 五 郎  
副 理 事 長 百 瀬 陽 二  
常 務 理 事 早 川 智 明  
兼 調 査 研 究 部 長

管 理 部

管 理 部 長 原 田 家 次  
管 理 課 長 関 野 栄 一  
主 事 江 田 和 美  
主 事 岡 野 美 智 子  
主 事 本 庄 朗 人  
主 事 斉 藤 勝 秀

調 査 研 究 部

調 査 研 究 部 副 部 長 塩 野 博  
調 査 第 一 課 長 坂 野 和 信  
主 任 調 査 員 利 根 川 章 彦  
主 任 調 査 員 劔 持 和 夫  
調 査 員 栗 島 義 明  
調 査 員 岩 瀬 讓  
調 査 員 木 戸 春 夫  
調 査 員 山 本 靖

平 成 元 年 度

理 事 長 荒 井 修 二  
副 理 事 長 百 瀬 陽 二  
常 務 理 事 古 市 芳 之  
兼 管 理 部 長

管 理 部

管 理 課 長 関 野 栄 一  
主 事 江 田 和 美  
主 事 岡 野 美 智 子  
主 事 本 庄 朗 人  
主 事 斉 藤 勝 秀

調 査 研 究 部

理 事 吉 川 國 男  
兼 調 査 研 究 部 長  
調 査 研 究 部 副 部 長 塩 野 博  
調 査 研 究 第 一 課 長 坂 野 和 信  
主 任 調 査 員 今 井 宏 夫  
主 任 調 査 員 劔 持 和 夫  
主 任 調 査 員 立 石 盛 詞  
調 査 員 宮 井 英 一  
調 査 員 栗 島 義 明  
調 査 員 木 戸 春 夫  
調 査 員 山 川 守 男  
調 査 員 村 田 章 人  
調 査 員 大 屋 道 則

平 成 2 年 度

理 事 長 荒 井 修 二  
副 理 事 長 早 川 智 明  
常 務 理 事 古 市 芳 之  
兼 管 理 部 長

管 理 部

庶 務 課 長 高 田 弘 義  
主 査 松 本 晋  
主 事 岡 野 美 智 子  
経 理 課 長 関 野 栄 一

主	任	江田和美
主	事	本庄朗人
主	事	斉藤勝秀
調		
査		
部		
理	事	吉川國男
兼	調	
調	査	
部	部	
長	長	塩野博
調	部	
副	副	坂野和信
部	部	
長	長	今井宏
調	課	
第	長	劍持和夫
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		
調		
査		
第		
一		
課		
長		



### 3 調査の経過

一般国道17号(上武道路)改築工事事業予定地内には、調査対象となる10箇所の遺跡が存在する。これらについては昭和63年4月1日より平成3年1月31日まで、おおよそ4箇年度にわたり現地調査を実施した。各遺跡の調査経過はそれぞれの報告書に委ねるが、全体の調査工程は第1表に示したとおりである。

このうち本書では、報告するウツギ内遺跡、砂田遺跡、柳町遺跡に関し、その調査経過の概要を年度毎に記すこととする。

**昭和63年度** 12月1日、重機によりウツギ内遺跡の表土除去を開始。調査区の南側より遺構確認作業に入る。井戸跡と思われる円形の落ち込み、長方形の土坑が濃密に分布することが判明。順次遺構の精査と測量を行なう。遺跡の地山は他遺跡に比して軟弱で、井戸跡は降雨時に壁や土層断面の崩落が頻発した。

**平成元年度** ウツギ内遺跡では引き続き遺構の精査を実施する。しかし、周囲の水田で耕作が始まると地下水位が上昇し、出水や崩落が一段と激しくなった。井戸跡は既に拡張して掘り下げることとしていたが、きわめて危険な状態となったため、以後はほとんど平面の確認に終始することとな

第1表 上武道路関連 埋蔵文化財発掘調査経過

	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	備考
ウツギ内 (担当)	~~~~~ 劔持・木戸	~~~~~ 木戸・村田		本報告書
砂田 (担当)		~~~~~ 劔持・大屋		
柳町 (担当)		~~~~~ 劔持・大屋	~~~~~ 劔持・石坂・福田	
城北 (担当)		~~~~~ 宮井・山川	~~~~~ 立石・山川・劔持 石坂・村田・福田	現在整理中 平成7年 刊行予定
居立 (担当)	~~~~~ 利根川・栗島・岩瀬	~~~~~ 立石・栗島		平成5年度 より整理 平成7年 刊行予定
前 (担当)	~~~~~ 利根川・栗島・岩瀬	~~~~~ 今井・立石		
清水上 (担当)		~~~~~ 木戸・村田	~~~~~ 村田・大屋	平成5年度 より整理 平成7年 刊行予定
根絡 (担当)	~~~~~ 劔持・木戸		~~~~~ 村田	
横間栗 (担当)			~~~~~ 今井・野中	
関下 (担当)			~~~~~ 今井・野中	

った。同時に、調査区北端に分布する住居跡の精査にも着手する。削平により遺存状態はかなり悪く、プランの確認もままならない状況であった。それでも6月下旬には航空写真測量を行ない、ウツギ内遺跡の調査を終了した。

本年度より調査員と補助員が増員されたことに伴い、柳町遺跡の調査をウツギ内遺跡と併行して4月より着手する。建設省の工事計画のため、とりあえず調査区北部2500㎡のみについて遺構確認を行なう。検出された古墳時代の住居跡や中世の井戸跡等は、後世の著しい削平を受けているほか、遺跡全面に走る地震の亀裂によって、いずれも遺存状態は悪いものであった。7月までに住居跡15軒他の調査を終え、航空写真測量ののち、砂田遺跡の調査へと移る。

砂田遺跡は出水期の調査となるため、水中ポンプなどの排水設備を充実させての実施であった。しかし、遺跡内はつねに滞水状態にあり、夏期などは連日、猛暑と水処理に悩まされた。こうしたなか、柳町遺跡からの住居跡の広がりを押さえ、10月中旬にはそれぞれの遺構の精査を終了。17日に航空写真測量を行ない、各遺構の図面類チェックをもって砂田遺跡の調査を完了する。

ただちに柳町遺跡の調査を再開。小規模な埋没河川をはさみ、ほぼ全体に住居跡が確認される。既に季節は収穫期に入っていたため、出水の心配はなくなっていた。ところが霜月の声を聞くや否や、県北地方特有の強い北西風が吹き荒れ、凍える体に土埃が襲いはじめた。この「赤城おろし」もようやくおさまろうかという年度末、精査中を含めて40軒分の調査を終える。

**平成2年度** 年度頭初より柳町遺跡の調査を継続実施する。調査区中央部分が対象となったが、遺構は削平の影響が少なく、遺物とともに遺存状態は良好であった。天候や遺跡の環境も問題なく、4月と5月に23軒、6月と7月に22軒の住居跡を調査できた。これに併行して、掘立柱建物跡や土坑等の精査も実施する。

2度目の航空写真測量を行なったところで田植えが始まり、埋没河川は完全に水没してしまった。このため一部を掘り下げたのみで、土層観察などを行なえないまま、柳町遺跡の調査を終了した。

**平成3年度** 上武道路関係の整理事業初年度。柳町遺跡の遺物復元と図面類の整理に着手するものの、7月は事務所移転のための準備におわれる。8月に新事務所が開設され、作業を再開する。遺物の復元と併行して、それらの実測と各遺跡の遺構図のトレースを行なう。

**平成4年度** 6月までに遺物実測を終了。4月～7月同実測図トレース。7月からは遺構図、8月からは遺物図の版組みを開始。8月より原稿執筆を進め、9月には遺物の写真撮影を行なう。12月までに図版の割付けと編集を終え、1月に入札。2月～3月の校正作業を経て、本書の刊行となる。





開通した上武道路(砂田遺跡～柳町遺跡部分)

## II 遺跡群の立地と環境

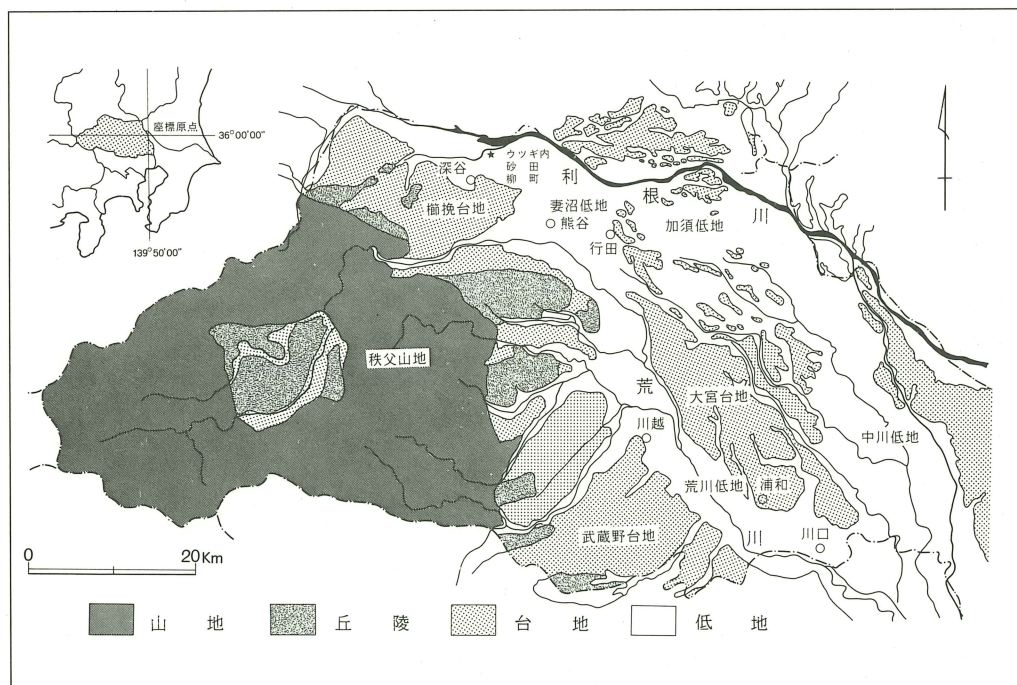
### 1 地勢

ウツギ内遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡は、およそ北緯 $36^{\circ}12'57''$ 、東経 $139^{\circ}19'38''$ 付近に位置し、JR高崎線深谷駅からは北東へ約4.8km、群馬県境までは約1.2kmである。3遺跡は上武道路の計画路線に沿い、北からウツギ内・砂田・柳町の順にほぼ連続している。路線にはこれより南へ、城北・居立・前・清水上・根絡・横間栗・関下の7遺跡が連なっている。ウツギ内遺跡から関下遺跡までの延長は約4.5km、調査面積は182,800 $\text{m}^2$ に達する。

遺跡群の所在する深谷市や熊谷市の北部、および妻沼町周辺には水田が広がり、県下有数の穀倉地帯を形成している。北方は群馬県との境を東流する利根川に臨み、その先には赤城山の雄姿が控えている。赤城山を起点に西へ目を転ずれば、榛名山・妙義山に加え浅間山を、また東は男体山に代表される日光の山稜を、それぞれ遙かに拝することができる。

気候的には表日本型で、冬は乾燥した晴天の日が続く。日中は「赤城おろし」、または「からっかぜ」という名の、強い北西の季節風が吹き荒れる。夏は気温・湿度ともかなり高く、不快指数は天井知らずとなる。

本遺跡群の立地する平坦な水田地帯は、利根川によって形成された、妻沼低地と呼ばれる沖積低地内に展開している。妻沼低地は比高差5m~10m程の崖線をもって、南の扇状地性ローム台地である櫛挽ヶ原(櫛挽)台地と接し、北辺は利根川の奔流に限られている。標高は30m前後で、低地内



第1図 埼玉県の地形と遺跡群の位置





第2図 ウツギ内・砂田・柳町遺跡の位置(明治17年測量迅速測図「妻沼村・深谷駅」)



には後背湿地や旧流路、自然堤防が複雑に入り組んでいる。とりわけ自然堤防の発達は顕著で、多くは旧流路に沿って細長い島状に形成されている。その表層は黄～灰褐色の粘質土となっている。調査でも遺跡群がこの自然堤防上に乗る、後背湿地や旧流路に面している様子がよく認められた。

この地形的特徴は地名によく表れており、蓮沼・<sup>はす</sup>男沼・妻沼・大沼・皿沼といった湖沼にちなんだもの、大塚島・矢島・内ヶ島・<sup>ちあらい</sup>血洗島・高島・出来島など、洪水時にも水没しない微高地を称したものが多く存在する。

上述のように、現在遺跡群周辺は大部分が水田として利用されている。ところが、明治17年に測量された参謀本部陸軍部測量局の第一軍管地方迅速測図には、逆に畑地の割合が高くなっている状況を見ることができる。この変化には地元の生んだ明治財界の重鎮、渋沢栄一(1840～1931)が大きく関わっている。渋沢は当時の国策であった欧米化と殖産興業を進めるべく、深谷市上敷免村に煉瓦工場を建設する。建設地の選定にあたっては、原料となる粘土が豊富に、しかも容易に入手できることが肝要であった。そこで着目されたのが、渋沢の出身地一帯に広がる自然堤防を利用した畑地である。工場建設に先立ち、近村住民との間には原土採掘後の水田化を条件に、無代で原土の提供を受ける約定を結んだ。採掘は明治21年9月より開始され、以後は急速に畑地が消えていった。ちなみに明治35年6月までの採掘高は、約86,846坪(約287,000㎡)にも及ぶ(日本煉瓦製造株式会社1990)。いま見られるような景観はこうして生まれたのである。砂田・柳町の両遺跡も遺構確認面までは水田耕作土のみで、遺構自体も深く削平されたものが多い。これが原土採掘によるものか否かは明らかではないが、明治30年から両遺跡の所在する旧蓮沼村でも採掘が始まっている。先の迅速測図では畑地とするされており、水田となったのはそれ以後のことである。これらを考え合わせれば、遺跡が採掘地となった可能性は高いといえよう。

余談であるが、この工場で生産された煉瓦は東京駅駅舎をはじめ、法務省・日本銀行本店・迎賓館赤坂離宮・東京国立博物館表慶館など、明治時代の代表的な建築物に使用されている。

昭和40年以降、煉瓦産業は退潮傾向を示すようになる。しかるに近年では、宅地造成や道路建設をはじめとする急速な都市化が進む一方、大規模な圃場整備なども実施され、相変わらず低地内の地形的特徴は覆い隠され続けている。

反面、こうした種々の開発計画が契機となり、地形の復元やそこに起居したであろう人々の足跡が、次第に明らかとなってきたことも否めない。本遺跡群の近隣に限ってみても、当事業団が実施した深谷バイパスとこれに連絡する県道関係、深谷市教育委員会や妻沼町教育委員会が行なった圃場整備関係、熊谷市教育委員会では公共施設建設関係、等々の調査により、縄文時代以降連続と遺跡の営まれてきたことが判明しつつある。

## 2 遺跡群の概要

妻沼低地周辺の歴史的環境については、『新屋敷東・本郷前東』(埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集 1992)において、田中広明が各時代を詳述している。このため、以下では本書に報告するウツギ内・砂田・柳町遺跡のほか、上武道路関係で調査を行なった各遺跡について、その概要を時代毎に瞥見しておくことにする。ただし、城北遺跡以南の7遺跡は整理途上であるため、遺跡の内容





- |              |            |            |           |            |
|--------------|------------|------------|-----------|------------|
| A. ウツギ内遺跡    | B. 砂田遺跡    | C. 柳町遺跡    | D. 城北遺跡   | E. 居立遺跡    |
| F. 前遺跡       | G. 清水上遺跡   | H. 根絡遺跡    | I. 横間栗遺跡  | J. 関下遺跡    |
| 1. 新開荒次郎館跡   | 2. 蓮沼氏館跡   | 3. 堀内遺跡    | 4. 荏原氏館跡  | 5. 高城城跡    |
| 6. 飯塚南遺跡     | 7. 原遺跡     | 8. 東川端遺跡   | 9. 明戸東遺跡  | 13. 上敷免北遺跡 |
| 14. 上敷免遺跡    | 12. 本郷前東遺跡 | 11. 新屋敷東遺跡 | 10. 新田裏遺跡 | 15. 血沼城跡   |
| 16. 幡羅太郎館跡   | 17. 斤鼻城跡   | 18. 木の本古墳群 | 19. 東方城跡  | 21. 西別府館跡  |
| 20. 湯殿神社祭祀遺跡 | 22. 別府氏館跡  | 23. 別府氏城跡  |           |            |

第3図 周辺の主な遺跡



や遺構の数等は調査年報(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989・1990・1991)によった。

**縄文時代** 多くの遺跡で後期の土器片が少量づつ出土しているが、遺構としては関下遺跡の落とし穴状土坑2基の検出にとどまる。周辺では明戸東遺跡(磯崎 1989)で住居跡9軒、原遺跡(同)で集石遺構2基と土坑群、新屋敷東遺跡(田中 1992)で住居跡8軒などの報告がある。いずれも後期から晩期のもので、妻沼低地への進出はこの時期に盛んとなったようである。

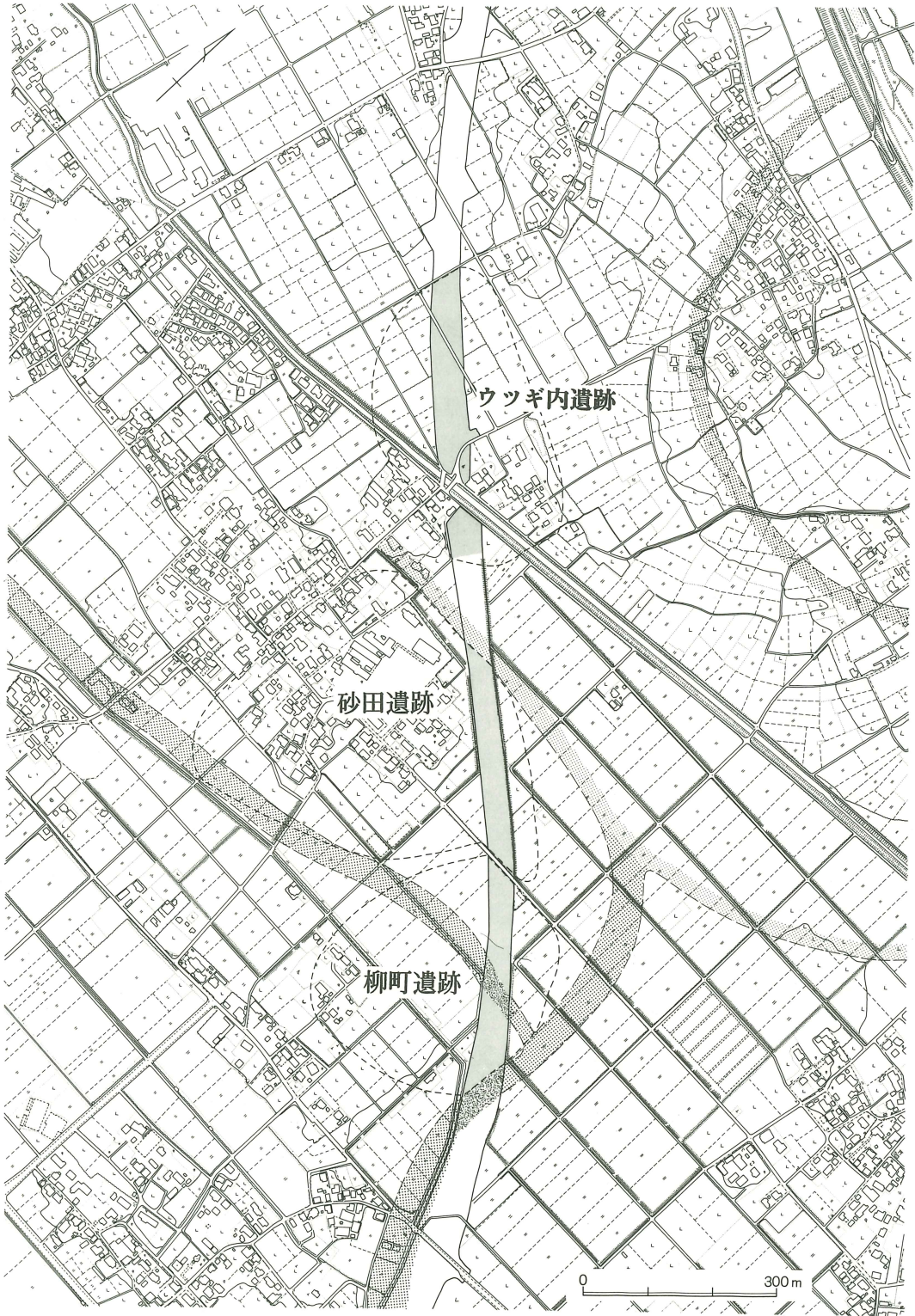
**弥生時代** 関下遺跡で甕・磨製石鏃・磨石等を伴う中期の住居跡1軒が検出されたほか、横間栗遺跡でも中・後期の土坑3基が調査されている。横間栗遺跡は熊谷市教育委員会によって、中期の再葬墓13基が検出され注目を集めた(金子 1988)。他に集落としては、これも再葬墓で有名な上敷免遺跡の中期の住居跡4軒(瀧瀬・山本 1993)、前出の明戸東遺跡の後期の住居跡16軒が挙げられる。特異なものとしては、上敷免遺跡から出土した遠賀川式の壺破片が挙げられよう。遺跡数から見れば、低地の開発は農耕社会になっても緩やかであったといえる。また、遺跡の位置も台地の近辺に限られ、低地前面への進出はなお慎重であったと思われる。

**古墳時代** 古墳時代に入ってもこの傾向は急激に変化するものではなく、五領期の住居跡は横間栗遺跡で1軒、根絡遺跡で10軒、清水上遺跡で7軒と南寄り(台地縁辺)の遺跡に集中する。しかし、生産跡として清水上遺跡で畑跡と考えられる畝状遺構が確認されたほか、東川端遺跡(瀧瀬 1990)や戸森松原遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987・1988)でも墓域としての周溝墓群が調査されており、着実に低地の開発は進行していたことが窺える。

これが和泉期、それも後半になると集落は爆発的な増加と拡大現象を示し始め、鬼高期には最高潮を迎える。そして、進出範囲もついに利根川河畔にまで達する。ウツギ内遺跡以外、すべての遺跡にこの時期の住居跡が見られ、分布密度も非常に濃い。特に、砂田遺跡から前遺跡の間は典型的で、一条の旧流路に沿って400軒以上が検出されている。旧流路は大きく蛇行しており、各遺跡はその突出部に形成されている。こうした状況は、東方約3kmの上敷免遺跡を中心とする部分にも認められ、単なる自然発展的な推移では捉えきれない面がある。詳細と位置付けはそれぞれの報告を待ちたいが、城北遺跡では157軒の住居跡と、これに伴う5箇所(5箇所)の祭祀跡も検出されている。さらに4軒の住居跡からは、大量の土器とともに人骨が9~10体分も発見されている。人骨は埋葬とは考えにくい点など、全国的にも極めて希有な例である。加えて、部分的な牛馬の骨や歯、漆塗の竪櫛、木製の農具や祭祀具等、有機質遺物の出土も豊富で、当時の社会や生活を研究する上で大いに注目される遺跡となっている。

**奈良・平安時代** ところが、奈良・平安時代になると遺跡数は減少し、集落の規模も小さくなる。上武道路関係では、前・居立・柳町・砂田・ウツギ内の5遺跡で住居跡や掘立柱建物跡が検出されているが、いずれも数軒から10軒前後にすぎない。条里制という国家による新たな開発体制が、集落の占地にも影響を及ぼしているのであろうか。根絡遺跡と清水上遺跡は、古くから別府条里遺構の推定されてきた地域内に所在するが、清水上遺跡では条里にかかわる可能性が高いと思われる溝が確認されている。溝には南北方向のものと東西方向のものがあり、東西方向の溝では約57mの間隔を測ることができている。溝の開鑿時期は明らかではないものの、その一部からは8世紀代の土器がまとめて出土している。





第4図 ウツギ内遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡調査範囲

中世 平安時代末以降になると、この地一帯も武蔵七党の活躍の舞台となる。これら武蔵武士たちはそれぞれに所領を獲得していき、周辺では蓮沼氏館・増田氏館・荏原氏館・堀内・高城城・東方城・西別府館・別府城といった城館を築いていく。本遺跡群でも、居立遺跡では増田氏館に關係すると思われる堀跡が調査されている。このほか、ウツギ内・砂田・柳町遺跡においても中世の遺構は数多く見られる。時期的には14世紀後半から15世紀が中心で、深谷バイパス関連の遺跡も同様である。あたかも南北朝動乱の終結を契機として、人々の姿が再び現れてくるかのようである。

### 3 噴砂について

本遺跡群をはじめ、周辺の遺跡ではそのほとんどに錯綜する噴砂が認められる。遺構の多くはこれによって著しい損傷を受けている。噴砂を伴う亀裂の走向は、水平・垂直方向ともに見られる。住居跡では壁や床がずれ、不規則な段差が生じている。柳町遺跡には最大幅85cmにも及ぶ亀裂が存在し、住居跡を大きく離断していた。

ここに言う噴砂とは、「大地震の地震動ともなって地下の砂層が液状化し、地盤の割れ目に沿って地表に噴出した砂(層)をさして」おり、「最近の大地震で…(中略)…多く認められ、建物の倒壊や港湾施設の破壊など大きな災害をひきおこしている。各地の地震被害調査報告書には必ずといっていいほど噴砂の記録がのせられており、気象庁震度V以上の強い地震動を受けた場合に形成される」(堀口 1986)現象のことである。

噴砂の確認された遺跡は、深谷市・妻沼町・熊谷市・行田市と広範にわたって分布している。その中心は噴砂の集中度や規模の大きさから、妻沼低地にあるとされている。

こうした状況は、かつて妻沼低地一帯が震度V(強震)以上の大地震にみまわれたであろうことを意味している。そこで問題となるのは、この大地震がいつ起きたのかという点である。

自然堆積層が厚く残っていた関下遺跡や居立遺跡の断面観察では、噴砂は埋没した古墳時代の住居跡を噴き抜け、10世紀代の遺物包含層で止まり、上は天仁元年(1108)に噴出した浅間山の軽石層に覆われていることが判明した。また遺構との関係で見ると、柳町遺跡の9世紀第II四半期に位置づけられる住居跡は、現存する覆土の上端まで噴砂に切られている。反対に上敷免遺跡では、噴砂を掘り込んで構築された10世紀後半の住居跡が検出されている。

以上の所見から推して、大地震の襲った時期は9世紀の後半から、10世紀の後半までの間ということになる。

一方、堀口万吉は遺跡での観察を進めるとともに、「強震以上のつよい地震動を受ければ、地震災害として大きくとりあげられて記録されるものと考えられる。」として、古記録に見られる弘仁9年(818)と元慶2年(878)の地震を候補にあげている(堀口 前掲)。

仮に、遺跡に刻まれた噴砂の起源が一回の地震にあるとするならば、考古学的に導きだされた年代観と合致するのは、元慶2年のものということになる。

群馬県においても多くの遺跡で地割れや噴砂が確認されており、同一の地震によるものと考えられている。ところが勢多郡新里村の砂田遺跡では、地震に伴う泥流が9世紀初頭の土器を直接覆っているため、弘仁9年の地震跡と捉えられている(関 1991)。



では、埼玉県と群馬県で認められた地震の痕跡は、それぞれ別のものに起因するのだろうか。あるいは、二つの古地震がともに表れているのだろうか。それとも、遺物の年代観に問題があるのだろうか。柳町遺跡では噴砂を切っているながらも、別の噴砂に切られるという中世の井戸跡も検出されている。新しい噴砂は1931年の西埼玉地震によるものとも考えられるため、遺跡に現れた噴砂の起源を即断、あるいは一回に限定することは危険かもしれない。いずれにせよ遺跡にみられる地震跡については、古記録や地質学的内容の検討、なによりも発掘調査での緻密な観察が必要となつてこよう。

#### 引用参考文献

- 磯崎 一 1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第85集
- 金子正之 1988「5.熊谷市横間栗遺跡の調査(第2次)」『第21回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 川口 潤 1988『本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第78集
- 埼玉県 1978『土地分類基本調査 高崎・深谷』
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987～1991『年報 7～11』
- 関 晴彦 1991「第2節 三ッ寺II遺跡の地震跡」『三ッ寺II遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第93集
- 田中広明 1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
- 日本煉瓦製造株式会社 1990『日本煉瓦100年史』
- 堀口万吉ほか 1985「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養部紀要(自然科学編)』第21巻
- 堀口万吉 1986「埼玉県北部でみられる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地震研究所

### III ウツギ内遺跡の調査

#### 1 遺跡の概要

ウツギ内遺跡は、利根川と小山川の合流部より約1.2km南東に位置する。調査区のほぼ中央部にあたる[かー7]グリッド杭は、北緯36°13'07.5363"、東経139°19'19.4454"を示す。標高は約31mを測り、北から南へわずかに傾斜している。調査前の地目は北半部が水田、南半部が畑地となっていた。調査面積は18,900㎡である。

遺跡の基盤は砂礫層で、この上に河川によって運ばれたと考えられる、茶褐色の堆積土が乗っている(第51図 第1号井戸跡土層断面図参照)。ウツギ内遺跡の北側は上武道路建設にかかる事前の遺跡確認調査が行なわれており、利根川まで砂礫層の続いていることが判明している。その厚さは数メートルにも及び、遺構・遺物はともに検出されていない。また、砂田遺跡以南の遺構確認面であった、ローム状の黄色粘質土層は存在しない。このことから、ローム状粘質土よりなる自然堤防は砂田遺跡の北端で終わり、以北は利根川ないしは小山川の旧流路になると考えられる。すなわち、ウツギ内遺跡は古墳時代以降に形成された<sup>はすぬま</sup>地表面に立地する、河畔部の遺跡であると言える。

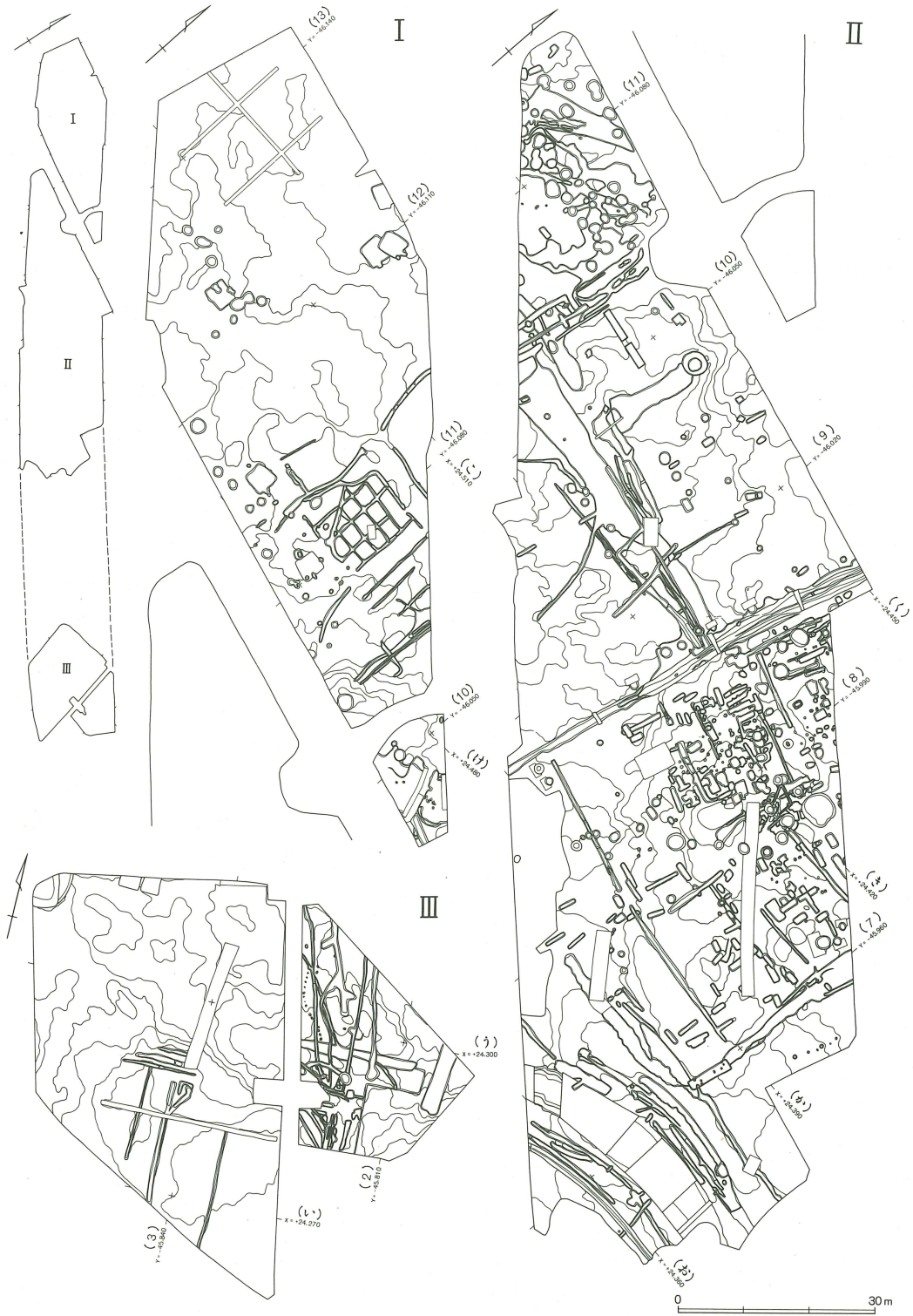
なお近辺には、かつて地名ともなった「蓮沼」という池沼が存在していた。この沼は利根川・小山川の流路変更によって取り残された、三日月湖の一種と思われる。江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』には、蓮沼村の乾(いぬい=北西)の方角にありと記されている。ところが明治時代の「迅速測図」では、すでに当該部分にそれらしき池沼は見当たらなくなっている(第2図)。風土記稿の記述から推して、本調査区には沼の一部がかかるのではないかと予想されたが、意に反して、調査ではそれらしき痕跡はなんら確認できなかった。

検出された遺構は平安時代の住居跡6軒、中世の土坑205基、井戸跡151基、溝95条、河川跡2条である。住居跡からは、土師器・須恵器・土錘が少量出土しているにすぎない。これに対して中世の遺構からは、内耳鍋・土釜・鉢・手焙り・かわらけ・常滑焼の甕などのほか、板石塔婆(板碑)・五輪塔・宝篋印塔といった仏教関係の遺物、石臼・棹秤用の分銅など多くの遺物が出土している。時期的には14~15世紀のものが主体である。

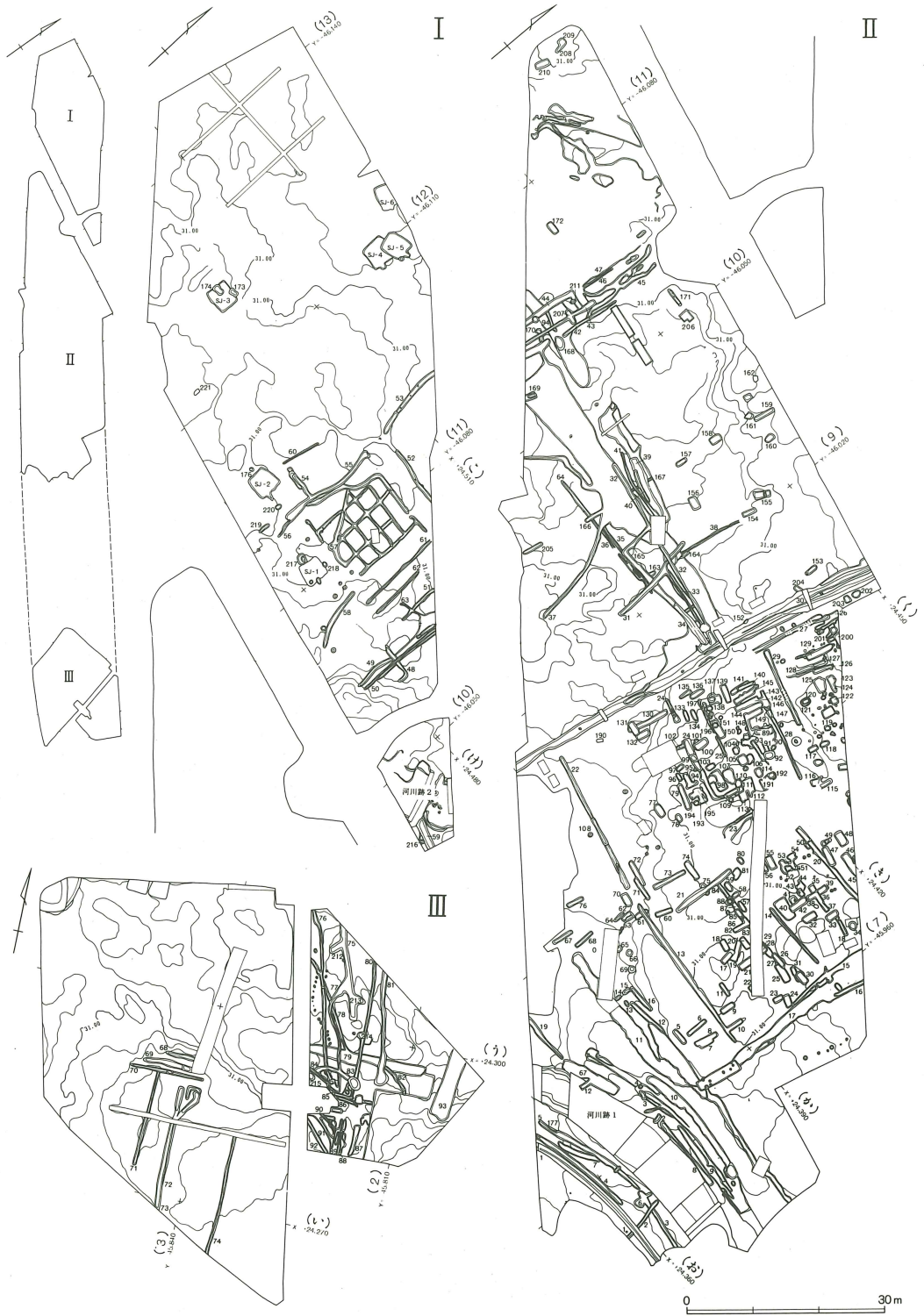
平安時代の住居跡は調査区の北辺にまとまっているが、砂地に掘り込まれているため、遺存状態は極めて悪い。しかし、ここに平安時代の集落が確認されたということは、すでに利根川の流れが北へ退いていたということの証左になろう。

中世の土坑と溝には方向の一致と区画性が看取される。井戸跡はこれと分布が異なり、中心は北半部にある。密度は異常に高く、重複も激しい。石組みは1基のみで、大半は素掘りであった。建物跡は明らかでないものの、出土遺物の内容を考え合わせれば、これらを集落にかかる遺構と捉えることは可能であろう。この場合、小山川との合流部にあたる利根川河畔という立地は重要である。なぜなら、利根川という国境をなす大幹線路の要衝に営まれたという事実が、当時の河川交通と無縁ではないと思われるからである。本遺跡の東方500mほどには、蓮沼氏(武蔵七党の猪俣に属する武士)の館跡も伝えられており、その関連性にも注意される。





第5図 ウツギ内遺跡全体図



第6図 ウツギ内遺跡住居跡・土坑・溝分布図

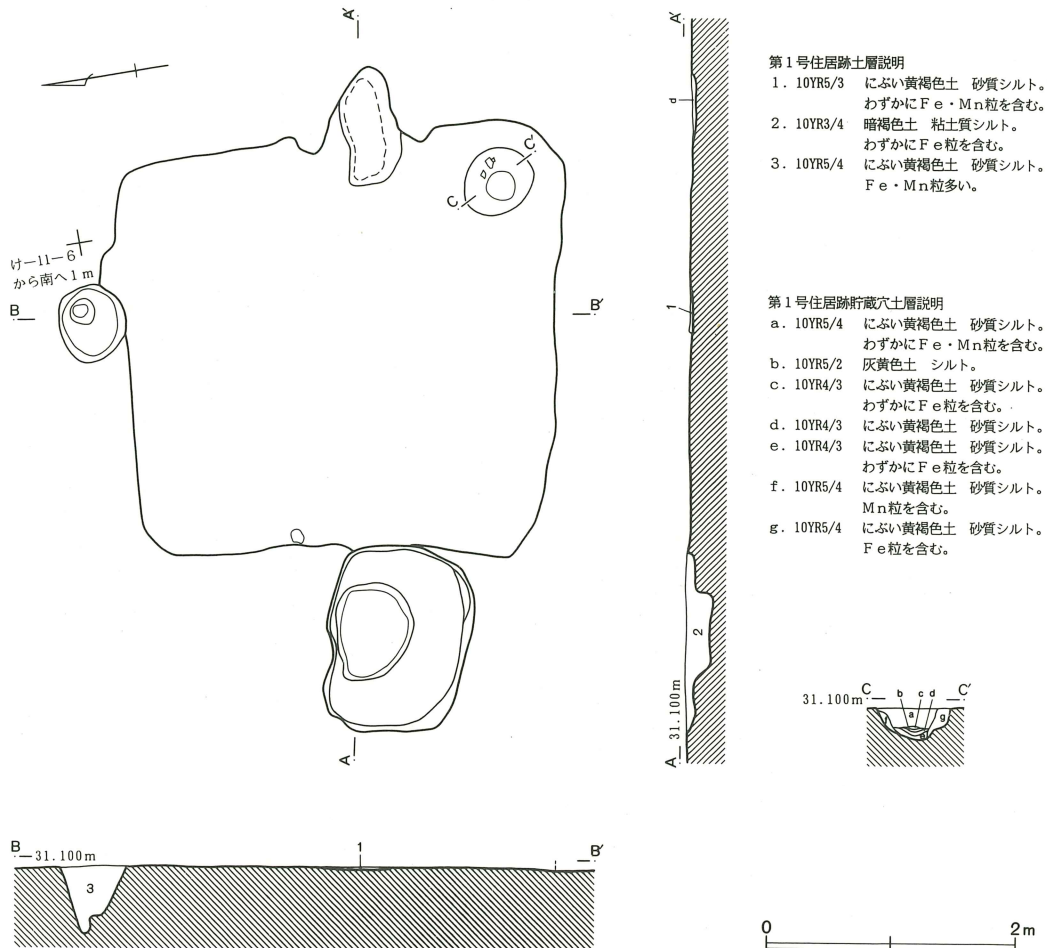


## 2 検出された遺構と遺物

### (1) 住居跡

検出された6軒の住居跡は、調査区北部を横断する道路の北側に分布する。住居跡群は、わずかではあるが周囲よりも高い位置にあり、これより四方へは緩く傾斜している。この道路を境に、遺構確認面以下は砂地となっており、上には水田耕作土一枚が乗るにすぎない。第2・3・6号住居跡には部分的に覆土が見られるものの、他の住居跡は壁が失われ、硬くしまった貼り床が直接確認されるような状態であった。ただし煉瓦用の粘土採掘など、人為的な削平が行なわれた様子は窺えず、むしろ自然の榮力による流失のように見受けられた。利根川の畔という立地を考えれば、氾濫・洪水という現象が想定できるのかもしれない。

以下に述べる住居跡の規模や平面形は、貼り床の範囲に拠るところが大きく、床面と壁溝の状況については不明なものが多い。遺物も総じて少量で、カマドや貯蔵穴を中心に出土している。



第7図 第1号住居跡

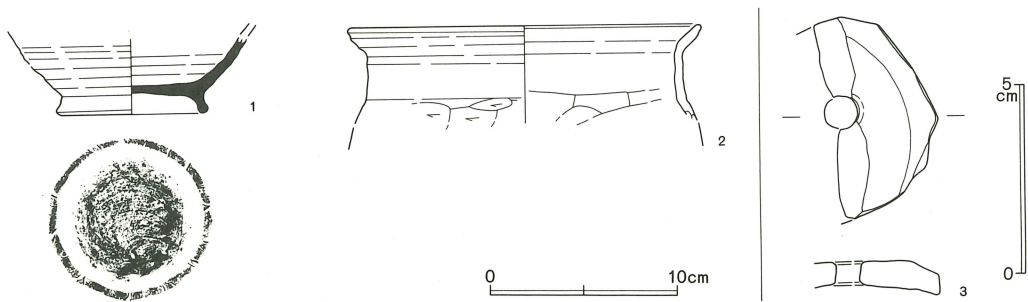
## 第1号住居跡(第7図)

け-11-1グリッドを中心に位置する。貼り床もほとんど失われ、掘り込みは明確としえない。残存する充填土からは、3.3m×3.4mの規模が測れる。全体的には北壁のやや短い台形状を呈し、四隅は丸みを有している。面積は約11.2㎡で、主軸方向はおよそN-103°-Eを指す。

カマドはほぼ東壁中央に付設され、削り出された袖がわずかに確認された。燃烧部は楕円形のくぼみとなっており、火床面は砂地で赤焼している。

貯蔵穴は南東隅部に設けられている。上面は58cm×50cmの楕円形で、深さは26cmを測る。壁および底面に土の貼られた形跡はなく、単に地山の砂層を掘り込んだものである。

遺物は少なく、坏の底部片を利用した紡錘車のほか、高台付碗と甕の破片が出土しているのみである。



第8図 第1号住居跡出土遺物

## 第1号住居跡出土遺物(第8図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	高台付碗	— ×(4.2)×高台7.9	口縁を欠く	粗W+W'+B'	灰色	底部は回転糸切り
2	甕	(19.0)×(5.2)×—	口縁片	W'多+B'	橙	
3	紡錘車	(5.4)×厚0.6×—	半切	W'+B'	にぶい黄橙	坏の底部片を利用

## 第2号住居跡(第9図)

け-11-3・8グリッドに位置する。西半部の床面は失われているが、東半部には覆土と貼り床が残る。西壁は流失のためか東壁よりも0.7m短く、平面は台形状となっている。軸長はいずれも3.6mで、面積は約12.1㎡を測る。主軸方向はN-93°-Eを指す。

残存する貼り床は砂質でしまりが良く、厚さ5cmほどに敷かれている。床面は西から東へ向かって傾斜しており、最も深いカマドの焚き口部までは確認面から約20cmである。貼り床の範囲はここまでで、燃烧部にまでは及んでいない。

カマドは東壁の南寄りに築かれている。燃烧部は大きく壁外に突出し、これより煙道が延びている。燃烧部中央は小ピット状に掘りくぼめられており、炭化物を多量に含む灰が堆積している。なお、袖はまったく検出されなかった。

貯蔵穴と柱穴については、貼り床除去後もそれらしき落ち込みは確認できなかった。壁溝も同様に、覆土残存部分を中心に精査を行なったが、床が壁まで平坦に貼られている状態であった。



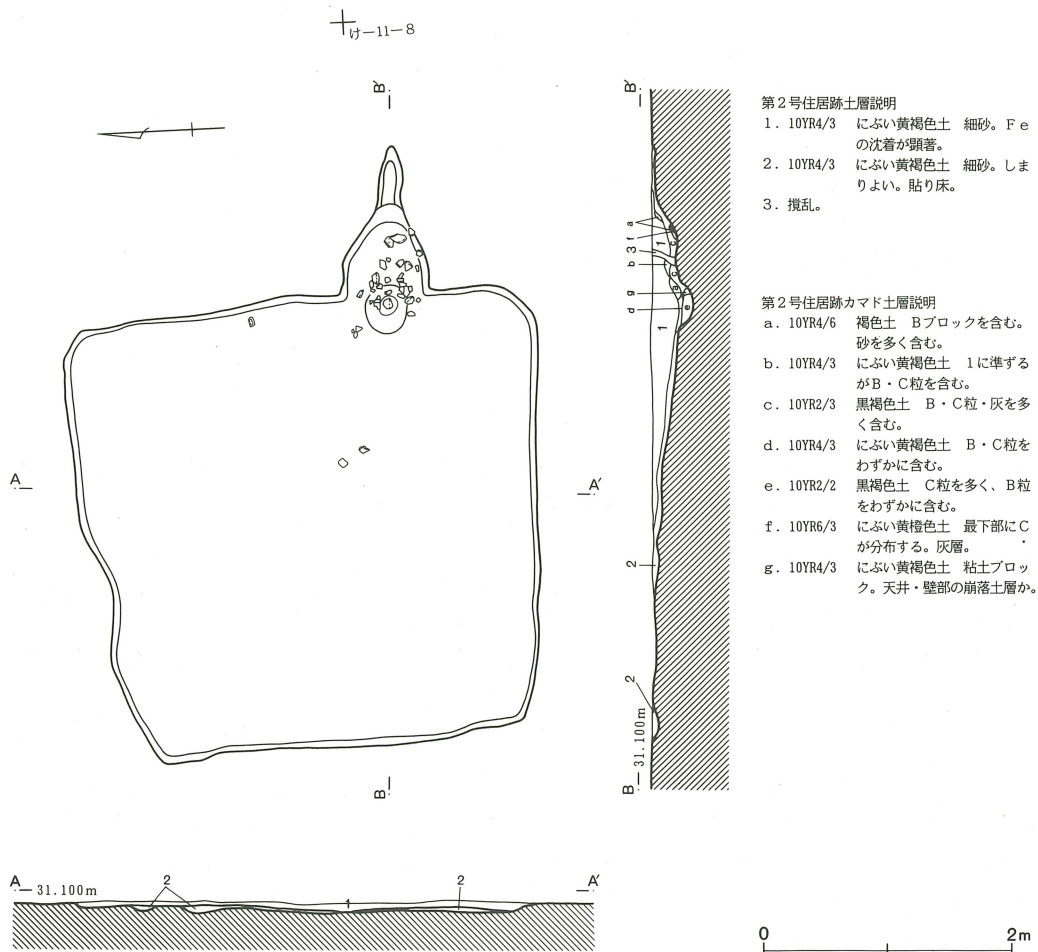
ウツギ内

遺物はカマド内から土師器の甕と坏が、覆土下位から床面直上にかけては土鍾がまとまって、それぞれ出土している。

### 第3号住居跡(第11図)

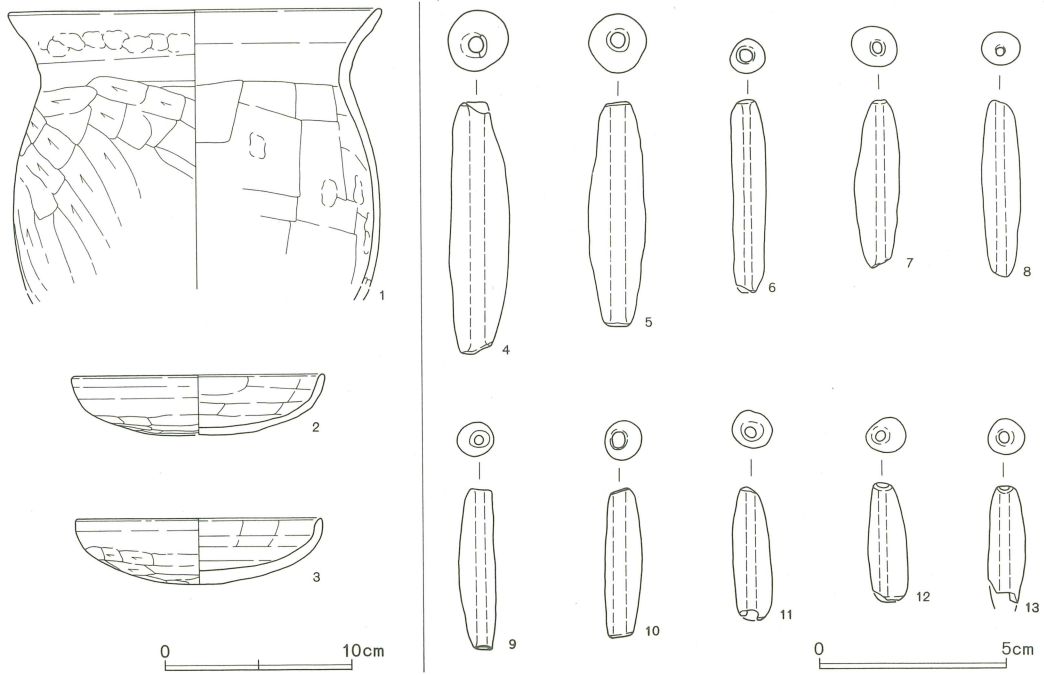
け-12-17グリッドを中心に位置し、中世の土坑と井戸跡に切られている。全体は長方形で、四隅はほぼ直角をなしている。規模は3.2m×3.8mを測り、面積は約12.2m<sup>2</sup>となる。主軸方向はおおよそN-5°-Eを示す。

床面は凹凸がやや強く、南から北へ向けてわずかながら傾斜している。確認面からの深さは7~8cm程度である。貼り床は部分的に施され、厚さも4cmと薄い。直接砂地となるところは特に踏みし

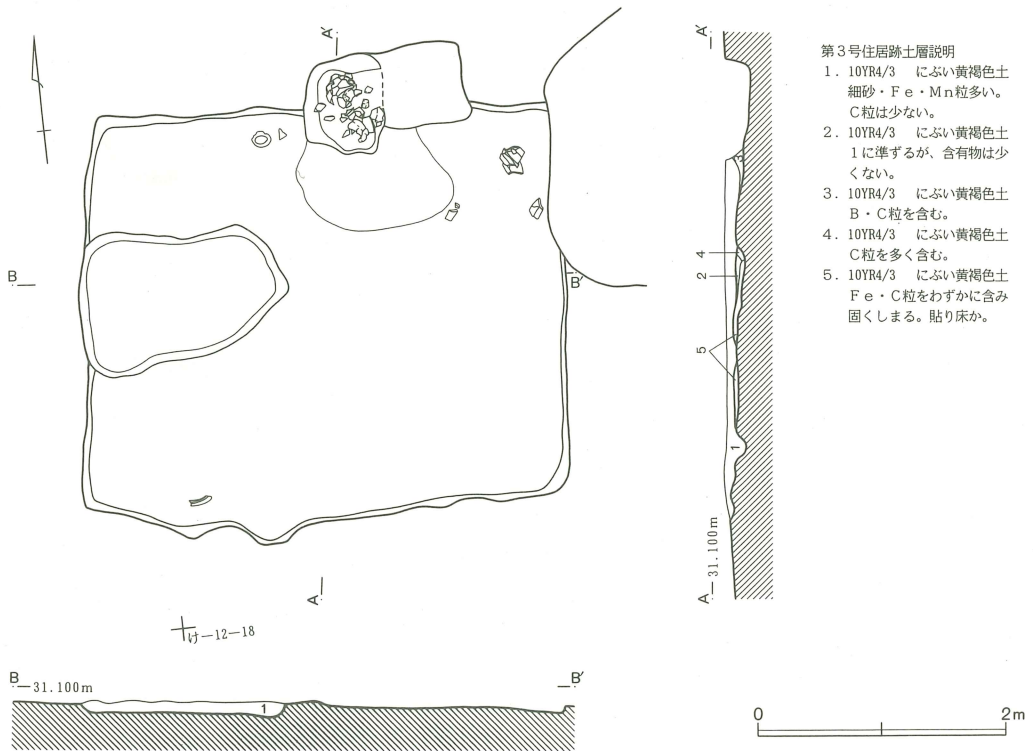


### 第2号住居跡出土遺物(第10図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	(20.0) × (15.3) × —	口縁~胴部片	W+W'+B'	赤褐	
2	坏	(13.6) × 3.2 × —	25%	W+W'	明赤褐	
3	"	13.0 × 3.5 × —	95%	W'+B'	にぶい赤褐	



第10図 第2号住居跡出土遺物



第11図 第3号住居跡



ウツギ内

められているわけではなく、砂層自体が持つ硬度のままのようである。

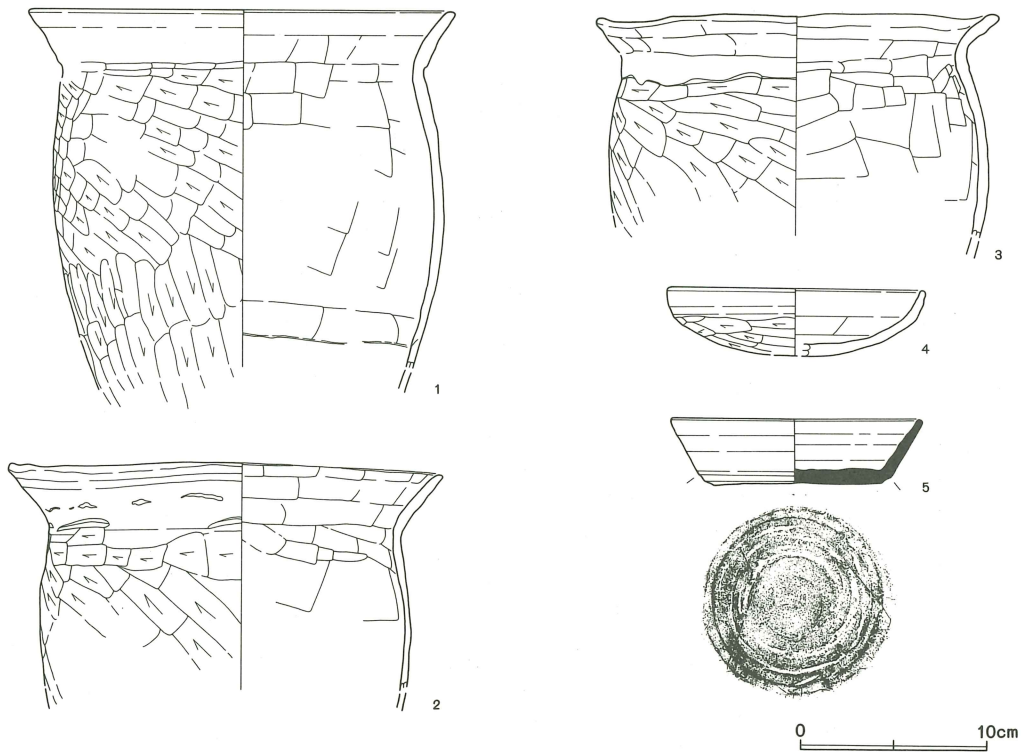
カマドは北壁中央に設けられており、炊き口部は足場状に一段窪んでいる。燃焼部は東側を切断されているが、さらに5 cm深く掘られている。楕円形の半分は壁外に突出し、急角度で立ち上がっている。

貯蔵穴・柱穴・壁溝は、ともに検出されなかった。

遺物はカマド内、およびその周囲の床上に集中し、土師器の甕と坏、ほぼ完形の須恵器坏が出土している。

第4号住居跡(第13図)

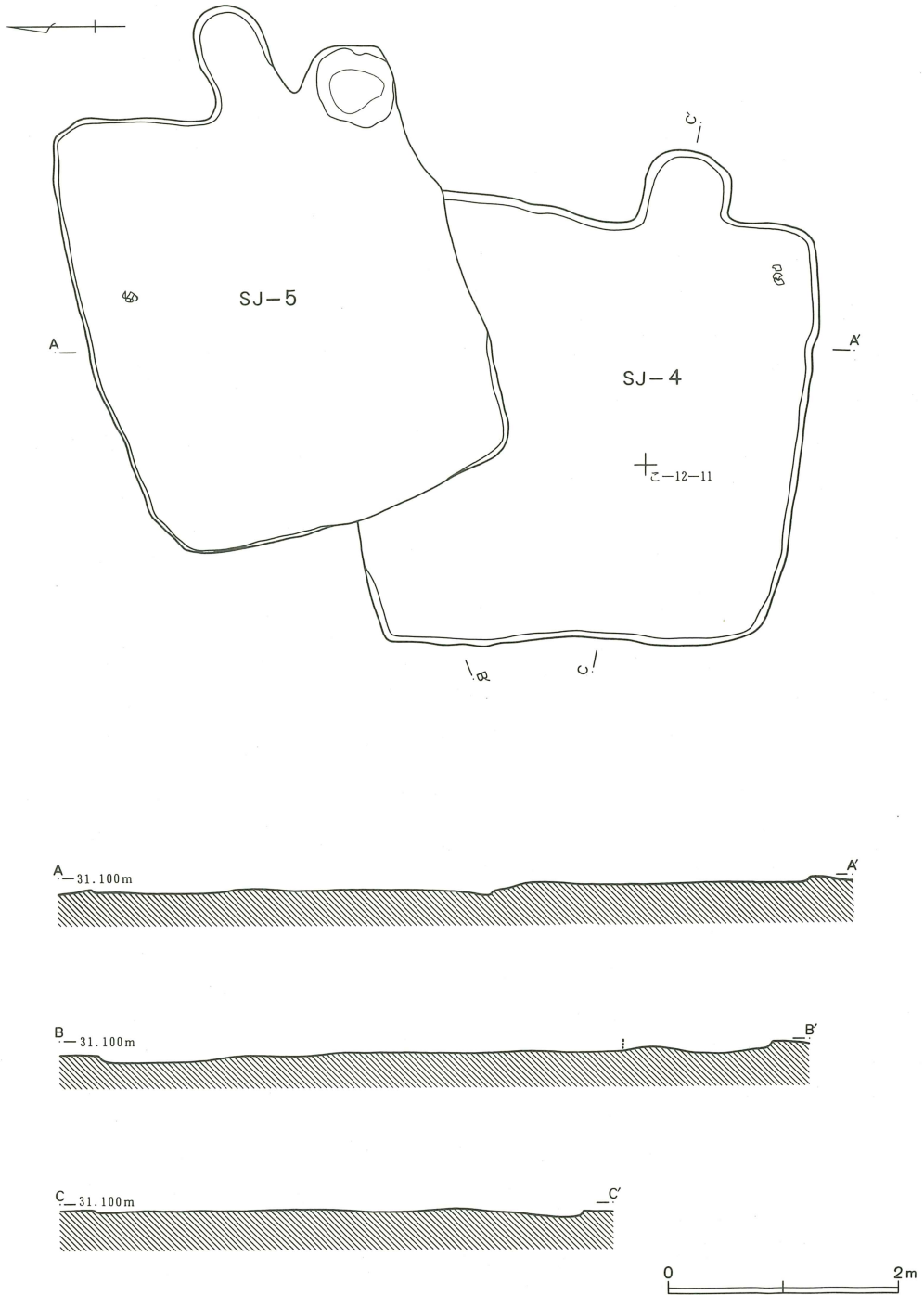
こー11-15グリッドを中心に位置する。第5号住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。掘り方はわずかに第5号住居跡が深いため、北東部の壁は検出されなかった。規模は3.7m×3.6m、平面形は西壁が短い台形状となる。面積は約13.3m<sup>2</sup>、主軸方向はN-98°-Eを指す。



第12図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物(第12図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	(23.0)×(20.4)×—	40%	W'+B'	明赤褐	
2	"	(24.0)×(12.5)×—	口縁片	粗(W+W'+B')	橙	
3	"	21.6×(12.1)×—	口縁 ~胴部	W'+B'	明赤褐	
4	坏	13.8×3.6×—	80%	粗(W+W'+B')	赤褐	
5	"	13.4×3.6×9.0	ほぼ完形	W'	紫灰	回転ヘラ削り、口縁歪む



第13図 第4・5号住居跡



ウツギ内

構確認時、第4・5号住居跡の部分には暗褐色土がぼんやりと分布しているにすぎず、輪郭は把握できなかった。この土は貼り床とは異なり、壁外にまで広がっていた。あるいは砂層上の堆積土が残存したものなのであろうか。これを5cmほど掘り下げると砂地になり、2軒の住居跡であることが確認できた。土層観察用のベルトを調査員の不注意で設定しなかったため、貼り床や暗褐色土との関係は不明である。ただし、暗褐色土除去中に床らしき面は現れず、他住居跡に見られた貼り床の土も検出されなかった。

カマドは東壁南寄りに設けられ、燃焼部は半円状に壁外へ出る。この部分では暗褐色土中に炭化物が多く含まれており、貼り床があったとしても、カマドには及んでいないと推測される。袖は確認できなかった。

貯蔵穴・柱穴・壁溝などの施設も検出されなかった。

遺物の出土はわずかで、いずれも小破片である。

#### 第5号住居跡(第13図)

こー11-15グリッドを中心に位置する。第4号住居跡と重複し、掘り方はその壁を切断する。全体は長方形を呈し、隅部は丸みを有している。東壁はカマドへ向かって湾曲しており、袖状となっている。住居跡の規模は3.8m×3.3mを測り、面積は約12.5㎡となる。主軸方向はおよそN-72°-Eを指す。

第4号住居跡同様、壁外まで暗褐色土が薄く乗るのみで、床面や貼り床については不明である。砂地面はやや凹凸があり、中央部から壁へ向けて緩傾斜している。

カマドは東壁中央からやや南へ寄り、舌状に突出している。燃焼部はいくぶん深くなっているものの、底面は平坦である。袖は明確ではないながらも、湾曲する東壁にそれらしき形状を窺うことができる。燃焼部内の土はやはり炭化物を多く含み、火床となる砂面は赤く焼けている。

貯蔵穴は直径70cmほどの円形で、住居の南東隅部、カマド右脇に備えられる。深さは約10cmと浅く、この中も暗褐色土がつまっていた。

柱穴・壁溝などは検出されなかった。

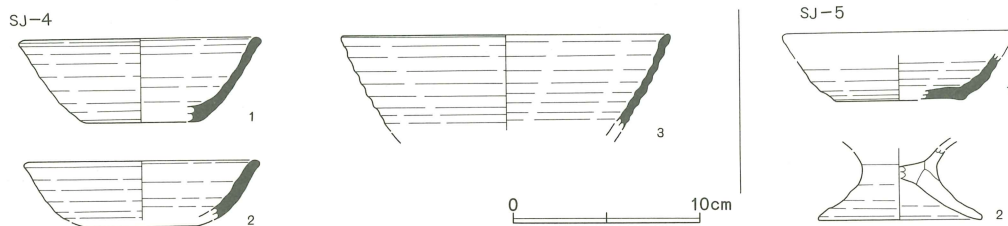
暗褐色土中からの出土遺物には、土師器の台付甕や須恵器の坏などがある。ただし、量は少なくいずれも小破片である。

#### 第4号住居跡出土遺物(第14図)

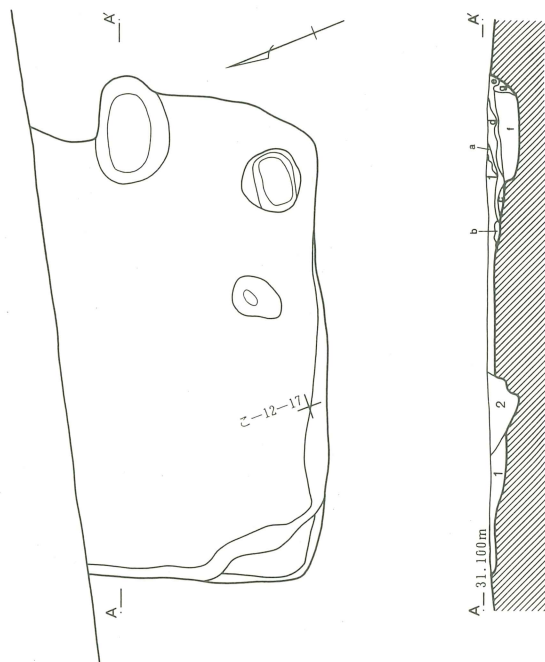
No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	坏(須恵)	(13.0)×(3.5)×(6.0)	20%	W'	灰黄	
2	“( ” )	(12.6)×(3.1)× —	20%	W+B'	褐	
3	“( ” )	(17.6)×(5.0)× —	15%	粗W'	灰	底部は回転糸切り

#### 第5号住居跡出土遺物(第14図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	坏(須恵)	— ×(2.3)×(7.0)	底部破片	W'	灰	
2	台付甕?	— ×(3.8)×台(8.8)	頸部	W+B'	赤褐	



第14図 第4・5号住居跡出土遺物



第15図 第6号住居跡

第6号住居跡土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 目の細かい砂粒、B・C粒をわずかに含む。
2. 攪乱。

第6号住居跡カマド土層説明

- a. 10YR4/6 褐色土 Bブロック+黄褐色砂ブロック。砂粒を多く含む。
- b. 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色砂質シルトブロックを含む。
- c. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 目の細かい砂粒、B・F e粒をわずかに含む。
- d. 10YR4/2 灰黄褐色土 B・C粒・灰をわずかに含む。粘土質のシルト。
- e. 10YR3/3 暗褐色土 bに近似するが、B粒をわずかに含む。
- f. 10YR4/4 褐色土 B・C・F e粒を多く含む。砂質のシルト。
- g. 10YR4/4 褐色土 B・C・F e粒をわずかに含む。砂質のシルト。

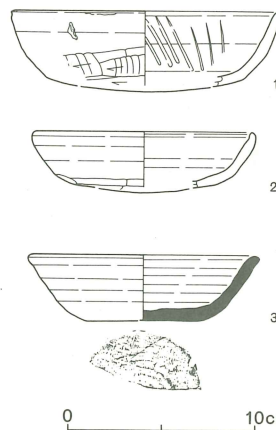


第6号住居跡(第15図)

こ-12-16グリッドを中心に位置する。北側は調査区外となっているため、全体の形状・規模は明らかではない。その上、東壁の遺存状態は極めて悪い。平面は方形、ないしは長方形になると思われる、主軸長3.5mが測れる。その方向はおよそN-17°-Eである。

カマドは東壁に設けられ、平面は楕円形を呈する。燃烧部は床面より20cmも深く、立ち上がりは急である。袖は検出されていないが、東壁の状態からは第5号住居跡のような形が想定できよう。

床面はまったくの砂地で、貼り床は存在しない。特別に硬くしまった様子もなく、砂層自体の硬度のままのようである。床は中央から壁に向かってわずかに傾斜し、南西隅部は一段高いテラス状に掘り残されている。



第16図 第6号住居跡出土遺物



ウツギ内

貯蔵穴は南東隅部に穿たれており、規模は直径50cm、深さ30cmほどである。その西側には径45cm×30cm、深さ15cmの楕円形をした小穴が存在する。

遺物はやはり少なく、土師器や須恵器の坏破片が出土しているのみである。

第6号住居跡出土遺物(第16図)

No.	器種	法 量	残存率	胎 土	色 調	備 考
1	坏(須恵)	(14.4)×(4.0)× —	破片	W'	赤褐	暗文
2	“( ”)	(12.0)×(3.0)× —	”	W'+B'	明赤褐	
3	“( ”)	(12.4)×3.6×(6.2)	40%	W+R	にふい赤褐	底部は手持ちへう削り

第2表 ウツギ内遺跡出土土錘・石錘・土製品一覧

遺構	図版No.	タテ (cm)	ヨコ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色 調	遺構	図版No.	タテ (cm)	ヨコ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色 調
SJ-2	第10図4	6.7	1.6	0.3	14.70	暗赤褐	SJ-2	第10図10	3.9	0.9	0.3	3.65	にふい黄橙
”	第”図5	5.9	1.5	0.3	10.65	黒褐	”	第”図11	3.4	1.0	0.2	3.84	にふい褐
”	第”図6	5.1	0.9	0.2	4.70	にふい橙	”	第”図12	3.1	0.9	0.2	3.16	”
”	第”図7	4.4	1.1	0.2	5.02	灰黄	”	第”図13	3.0	0.9	0.2	(2.73)	”
”	第”図8	4.7	1.0	0.2	4.59	にふい赤褐	SE-22	第76図12	3.7	3.6		59.60	にふい黄橙
”	第”図9	4.2	0.9	0.2	3.86	にふい橙	SD-39	第83図12	4.3	5.0		38.45	”

(2) 土坑(第17図～第48図)

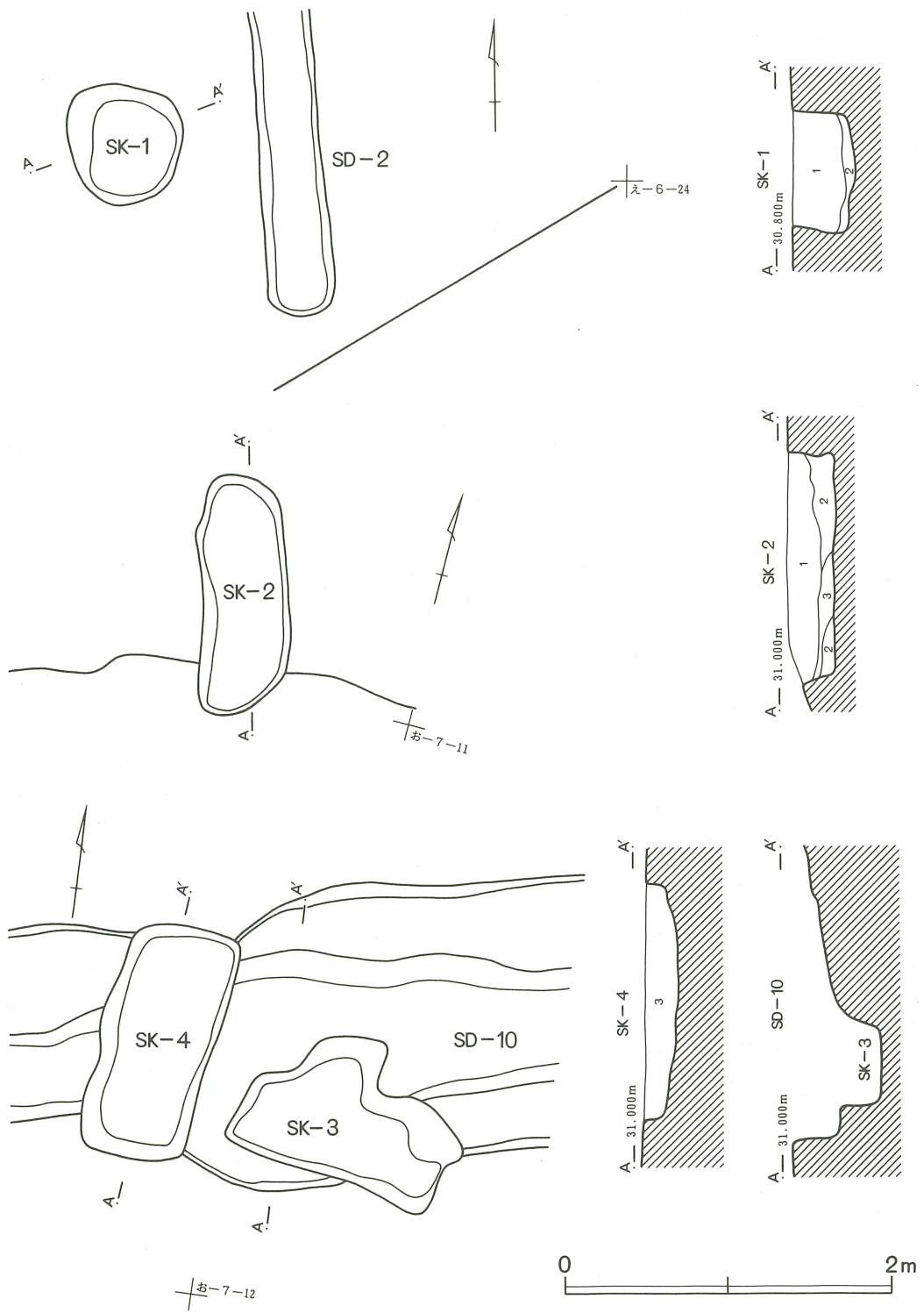
ウツギ内遺跡から検出された土坑は205基にも達する。その分布は調査区の中央部、第17号溝と第30号溝に画された範囲に大半が集中する。グリッドでは、[か・きー7・8]にあたる。この部分は調査区内でもわずかに高くなっており、ウツギ内遺跡における中心的位置をなしている。

平面形を大きく分ければ楕円形と長方形の二者となるが、量的には圧倒的に後者のほうが多い。さらに長方形の土坑には、幅と長さの比が1:2程度のもの(短長方形)と、1:4~5にもなるもの(長長方形)とがある。これも後者のほうが多く、一部では溝状に接続している。長方形土坑の断面はいずれも箱形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

規模的には長さ1.5m~2m程度のもが主体である。しかし中には第130号土坑のように、6mにも及ぶものが見られる。幅は短長方形で1m前後、長長方形では長さにかかわらず60cm~80cm程度である。深さは10cm前後と浅いものから、1m以上掘り込まれた深いものまでさまざまである。平均的には20cm~40cmほどであろうか。

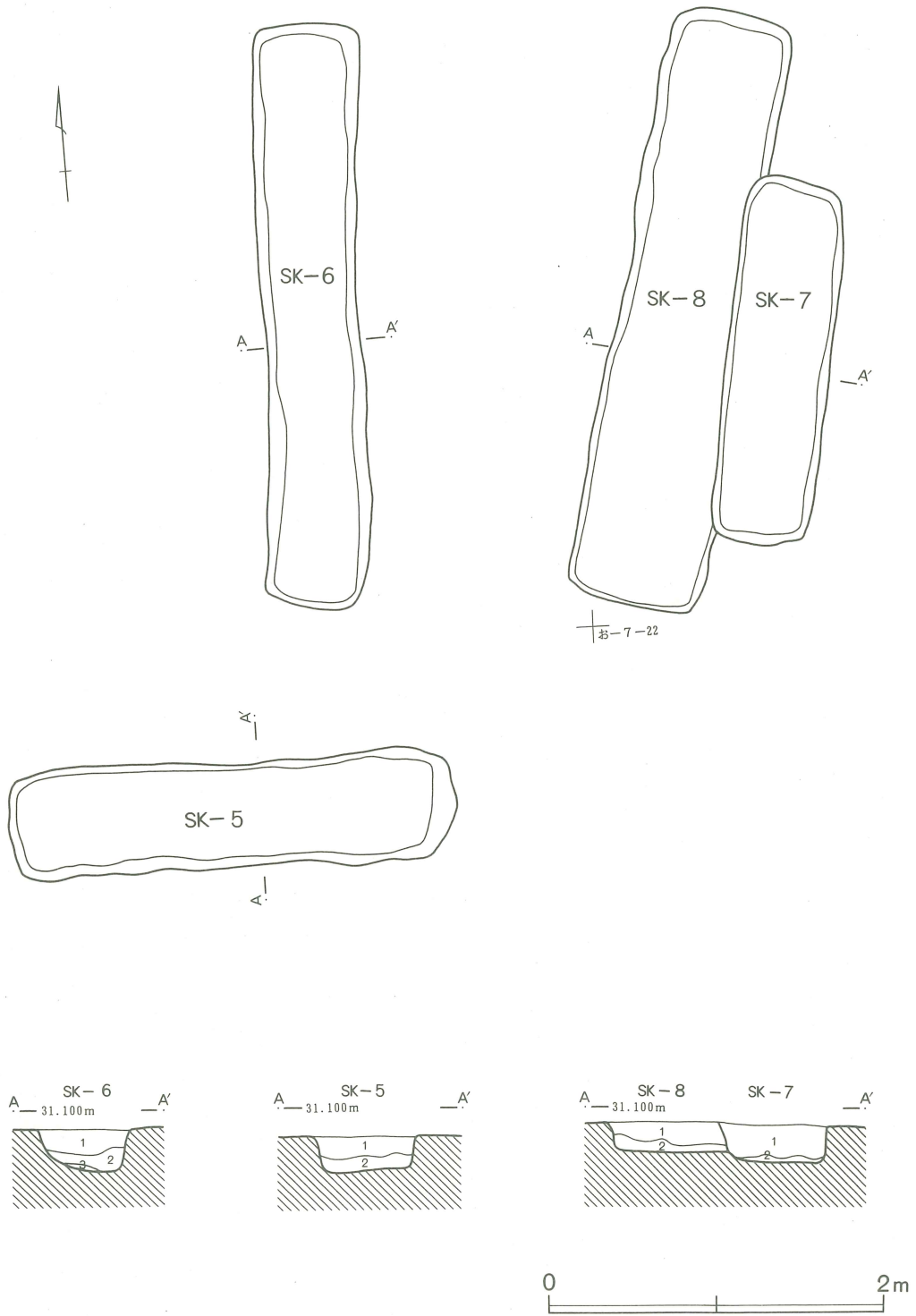
長軸を見た時の方向は、ほぼ東西を指すものと、これに直交して南北を指すものに大別できる。さらに両者は第17号溝に方向を合わせるものと、第30号溝に合わせるものとに分けることもできる。その場合の分布は、両溝の中央を境にして各々の溝側に寄っている。角度で言えば、第17号溝がおよそN-3°-E、第30号溝がおよそN-12°-Eである。

覆土の観察は調査時に統一し、以下の6層を用いて実施した。したがって、挿図中の土層番号はすべてに共通する。傾向としては、大半のものが1の暗褐色土単一である。これは人為的埋め戻しによるためと思われる。

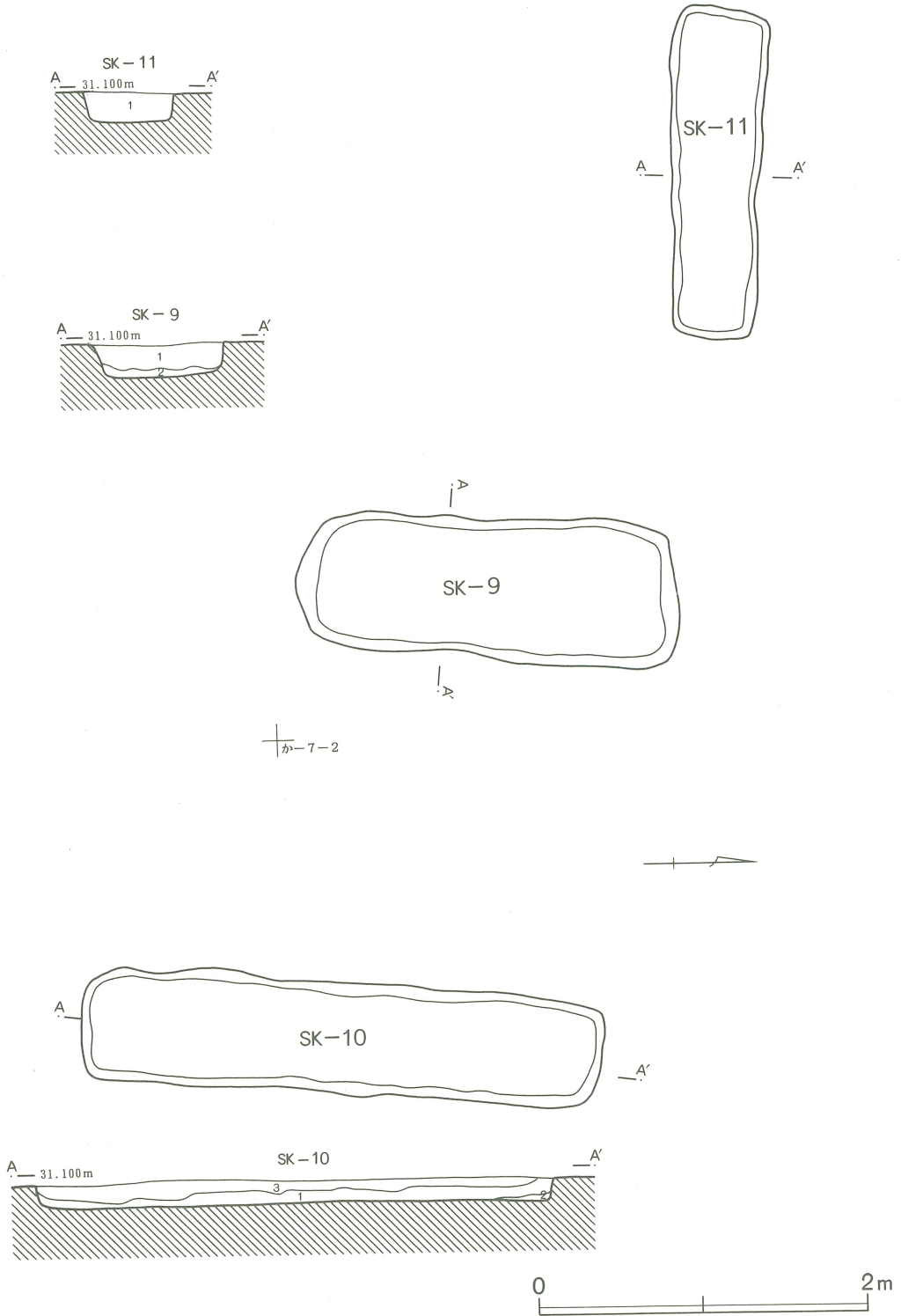


第17図 第1～4号土坑





第18図 第5～8号土坑



第19図 第9～11号土坑

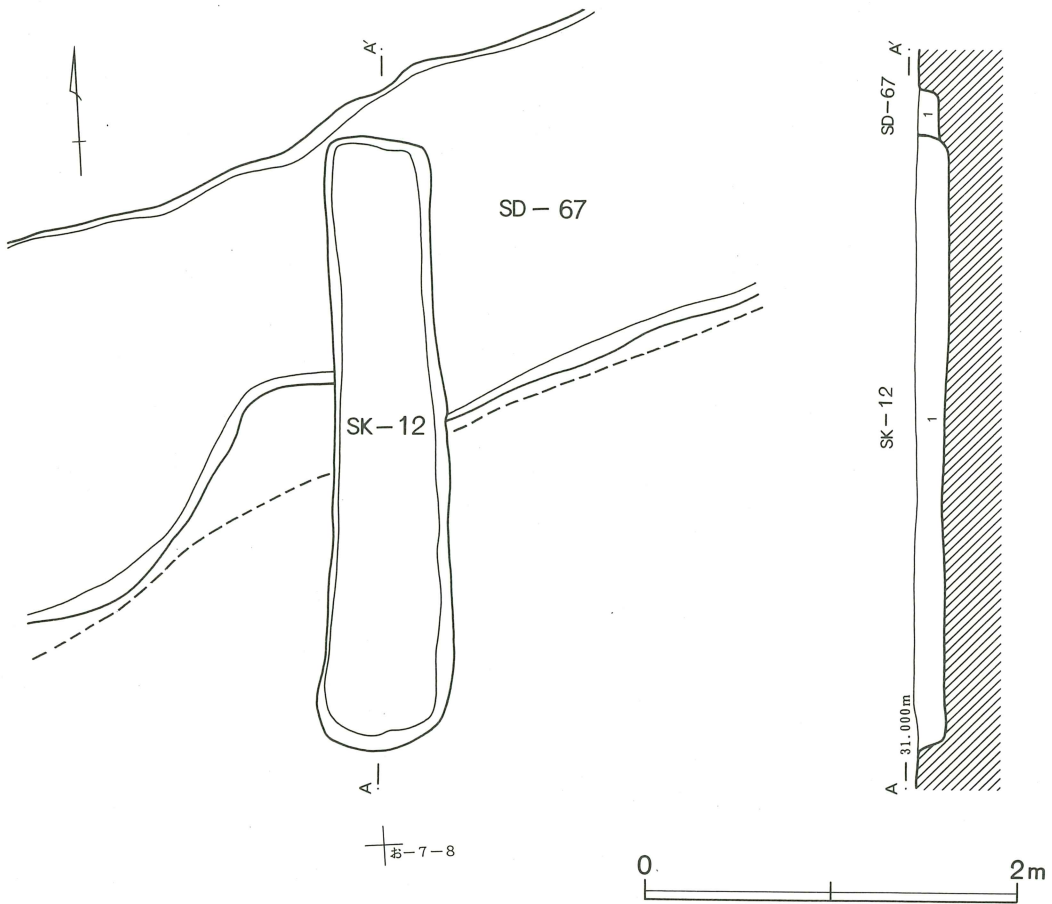


ウツギ内

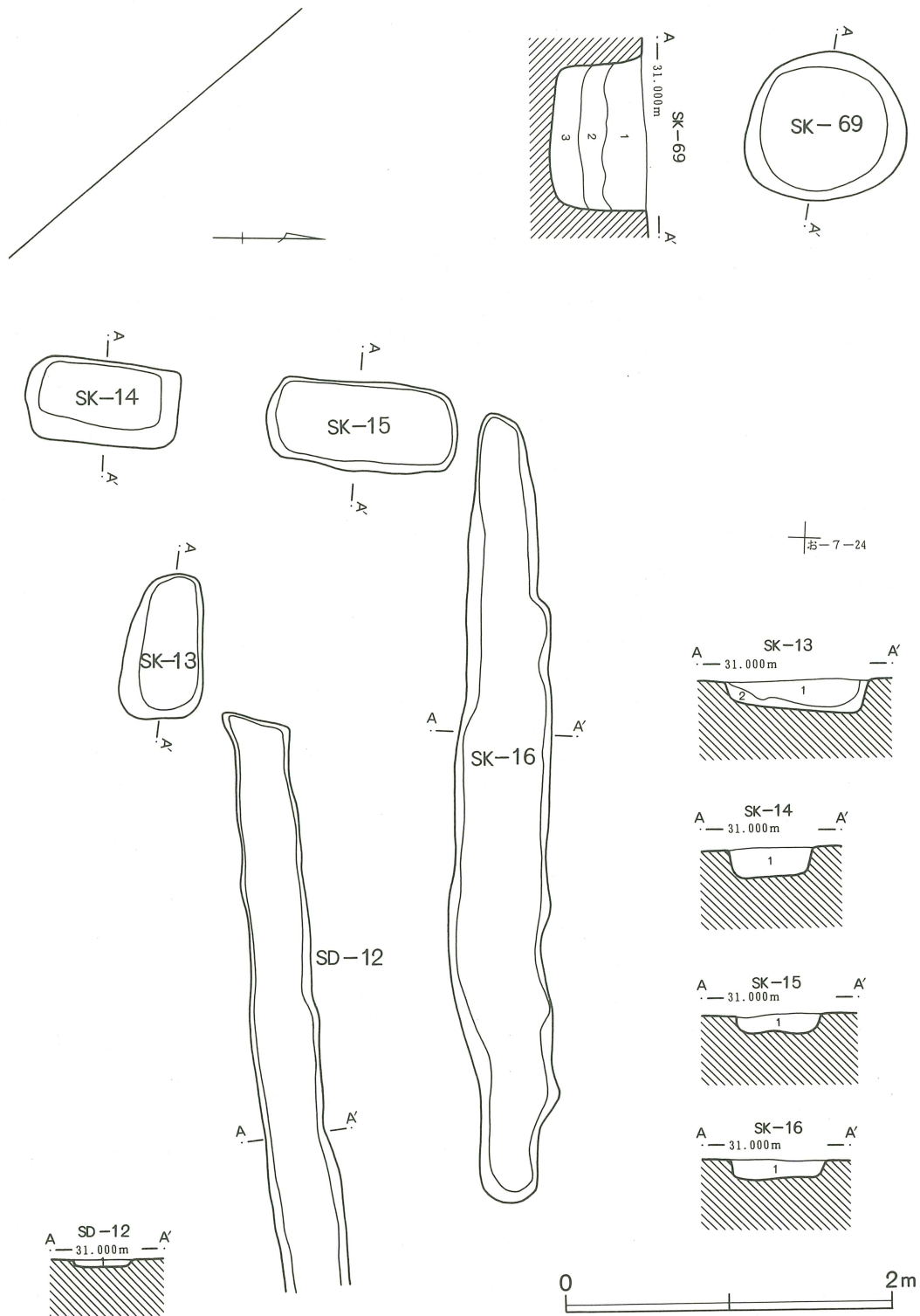
1. 10YR3/3 暗褐色土 白色土・C(炭化物)粒を含む。
2. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。白色土粒多く、Mn・Feを含む。
3. 3.5Y6/2 灰オリーブ 粘質土と粗砂からなる。暗褐色土・白色土粒を少量含む。
4. 10YR5/2 灰黄褐色土 目の細かい砂からなる。
5. 2.5Y6/1 黄灰色土 粘質土からなる。
6. 10YR4/1 灰褐色土 粘土質シルト。目の粗い砂粒を多量に含む。

土坑間の重複は激しく、数基が切り合うことも希ではない。断面観察によれば、切断線はすべて現存する覆土の上端まで達している。このことから、土坑は長く開口していたものではなく、掘削後は時を経ずして埋められ、それが次々と繰り返されたものと推測される。

井戸跡との重複関係を見ると、土坑と溝のほとんどは、井戸の完全埋没後に掘り込まれていることがわかる。土坑と井戸の同時存在を否定するものではないが、土地利用上、井戸と土坑・溝の構築時期は異なるのかもしれない。

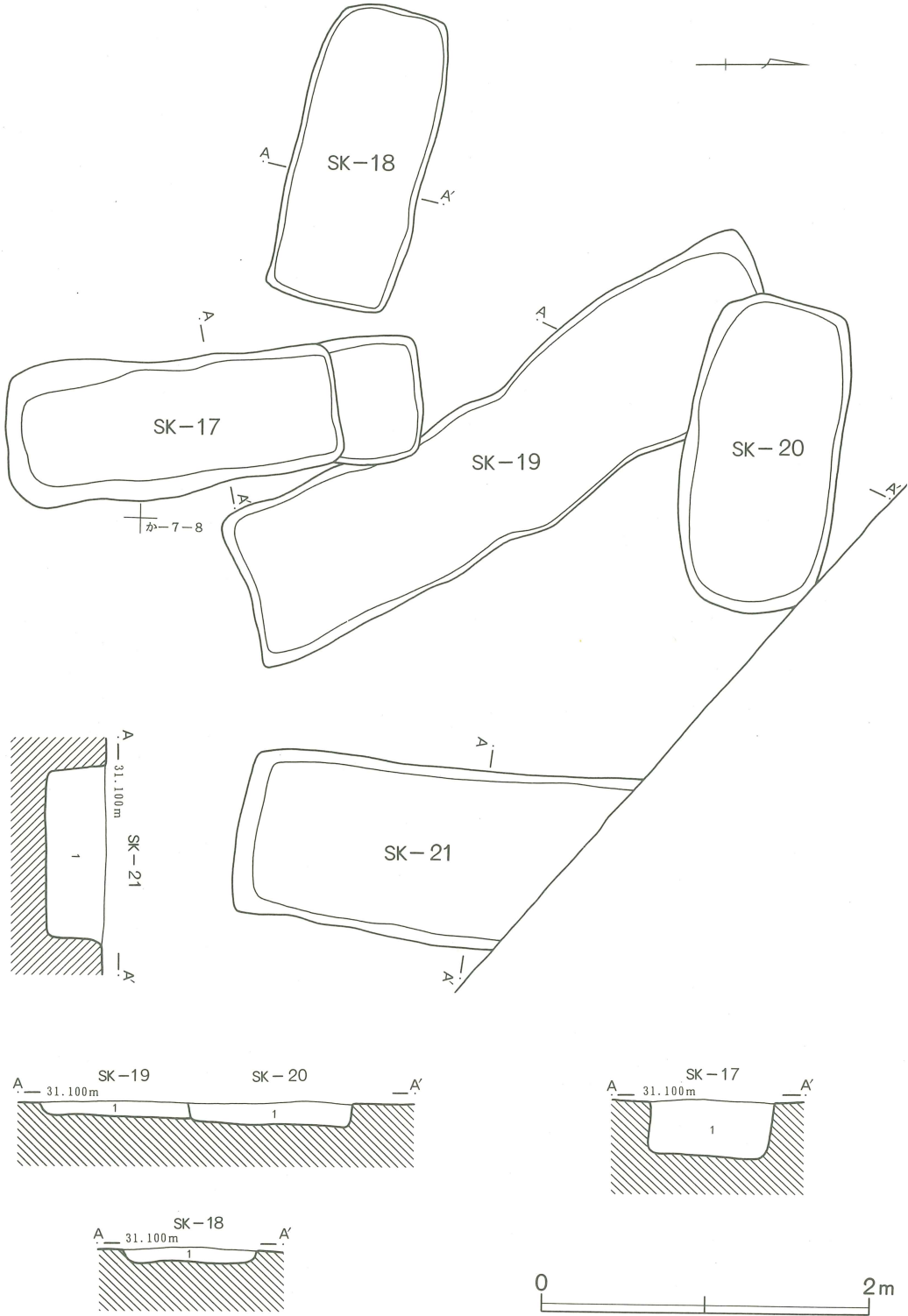


第20図 第12号土坑

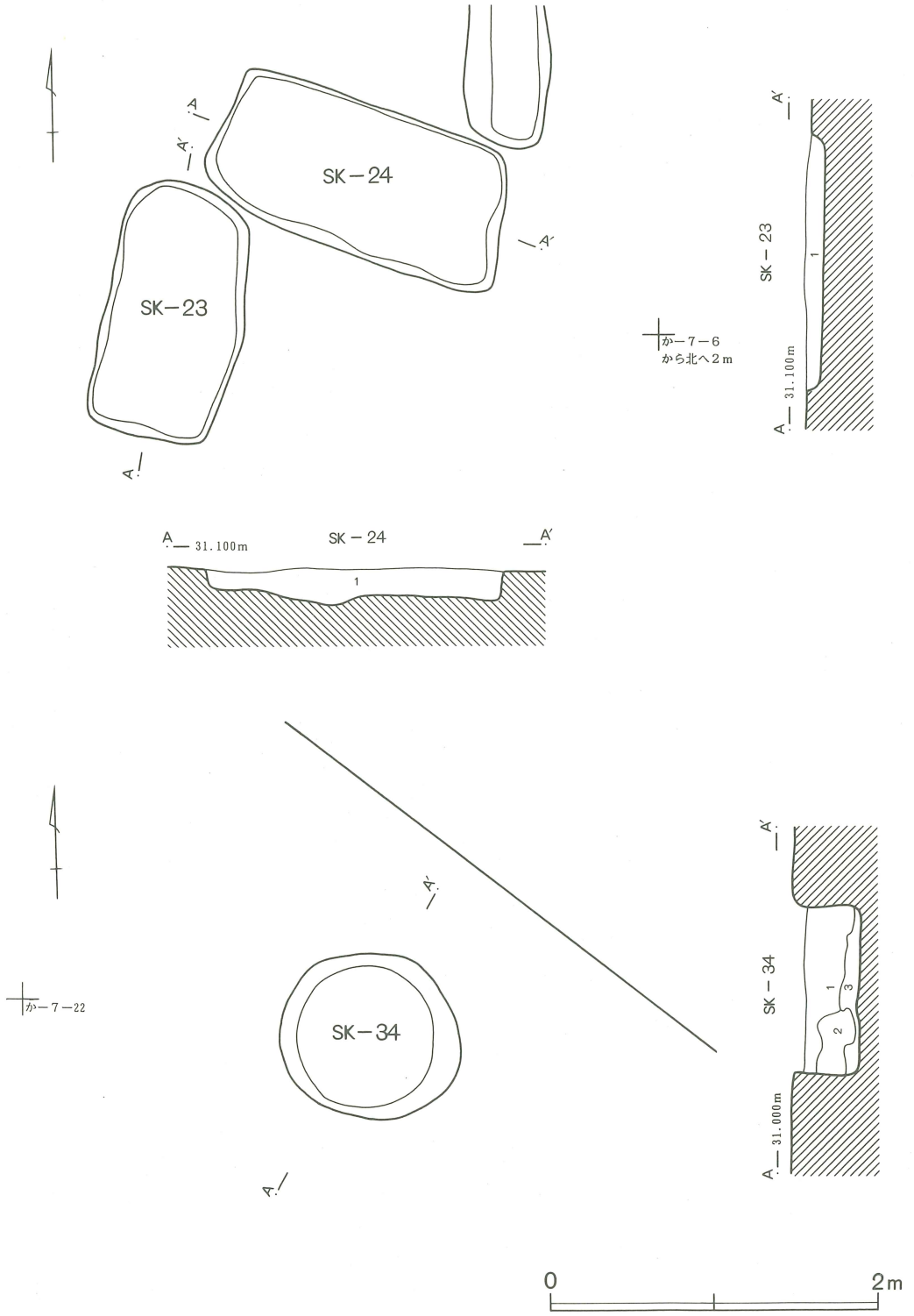


第21図 第13~16・69号土坑



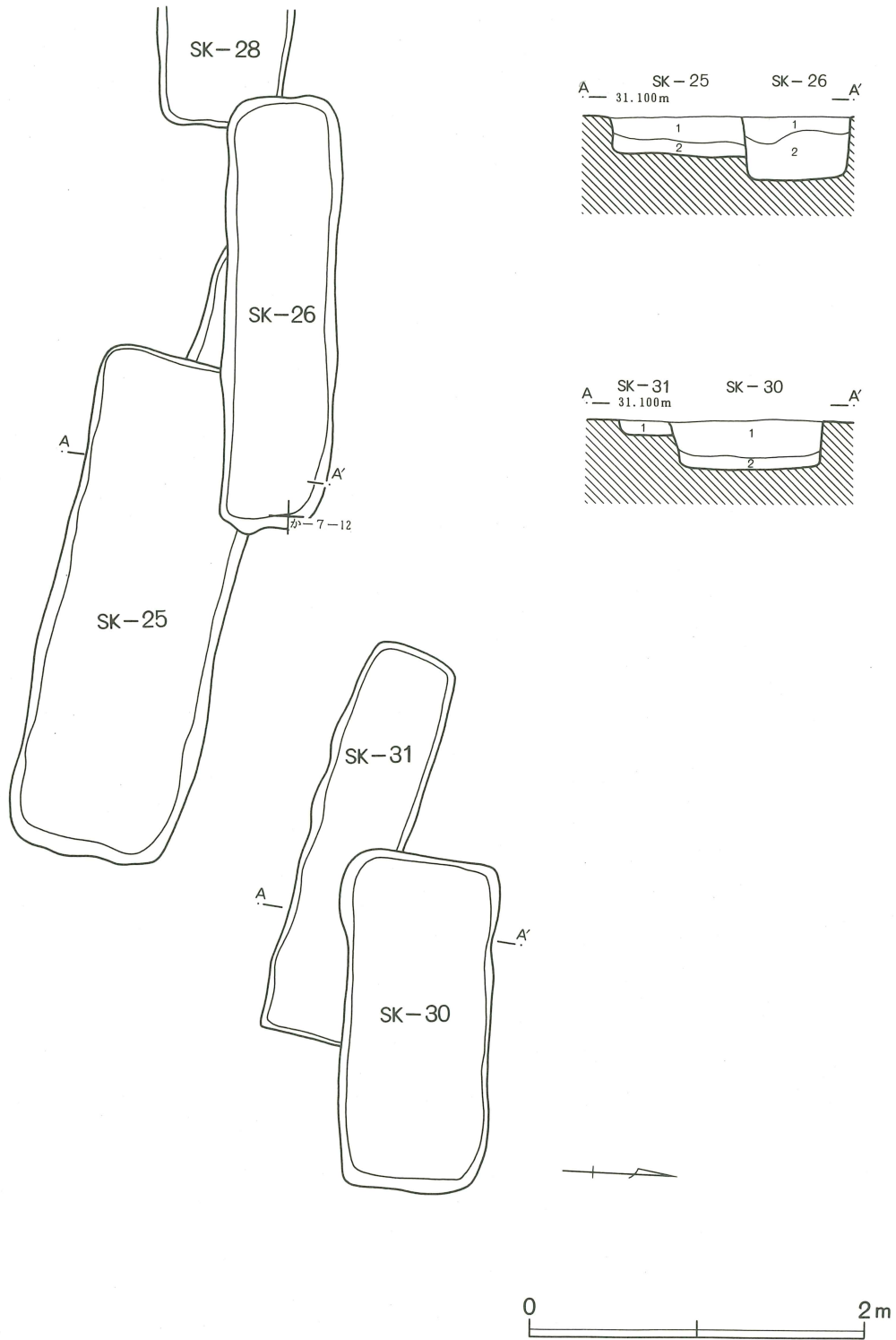


第22図 第17~21号土坑

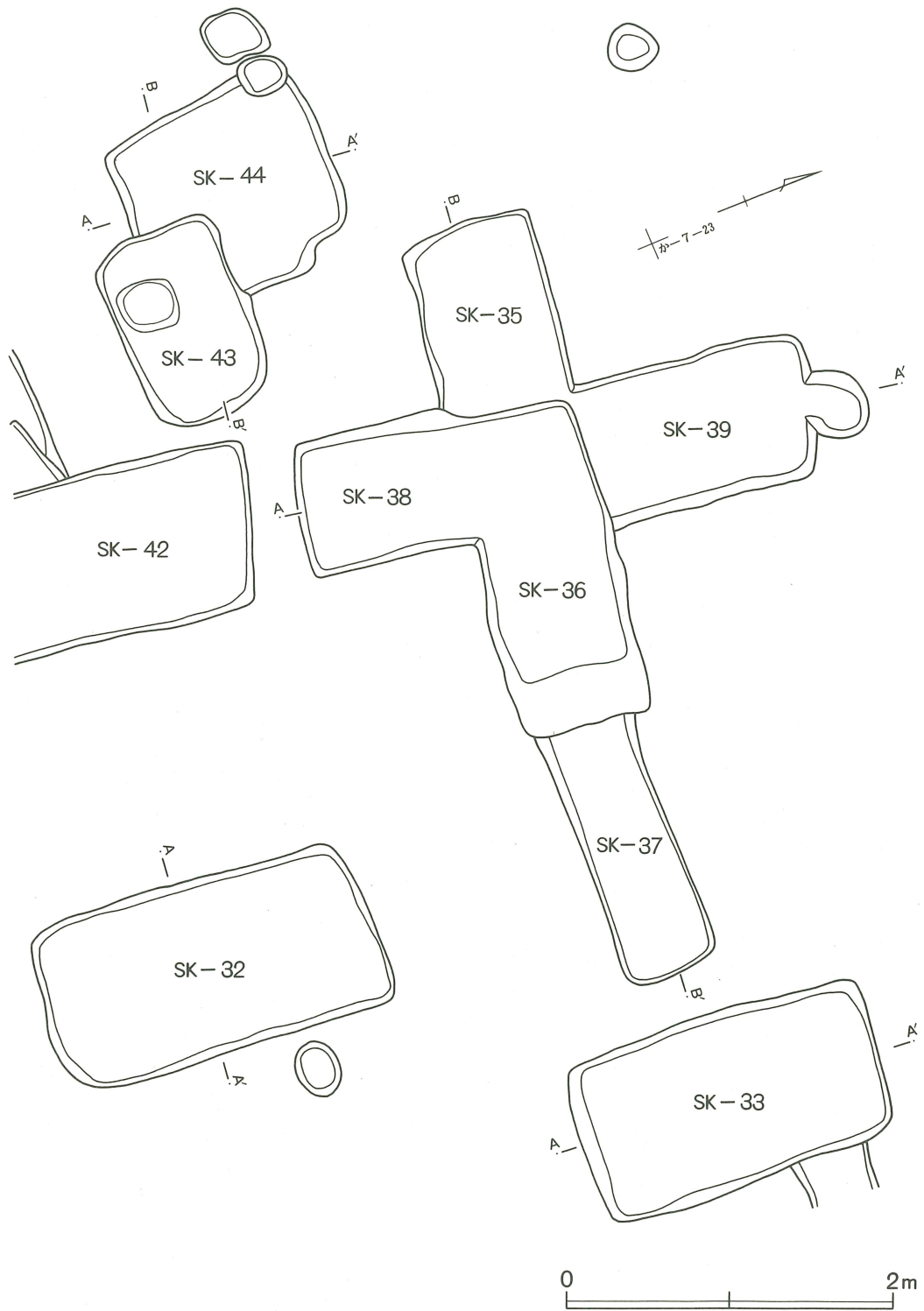


第23図 第23・24・34号土坑





第24図 第25・26・30・31号土坑



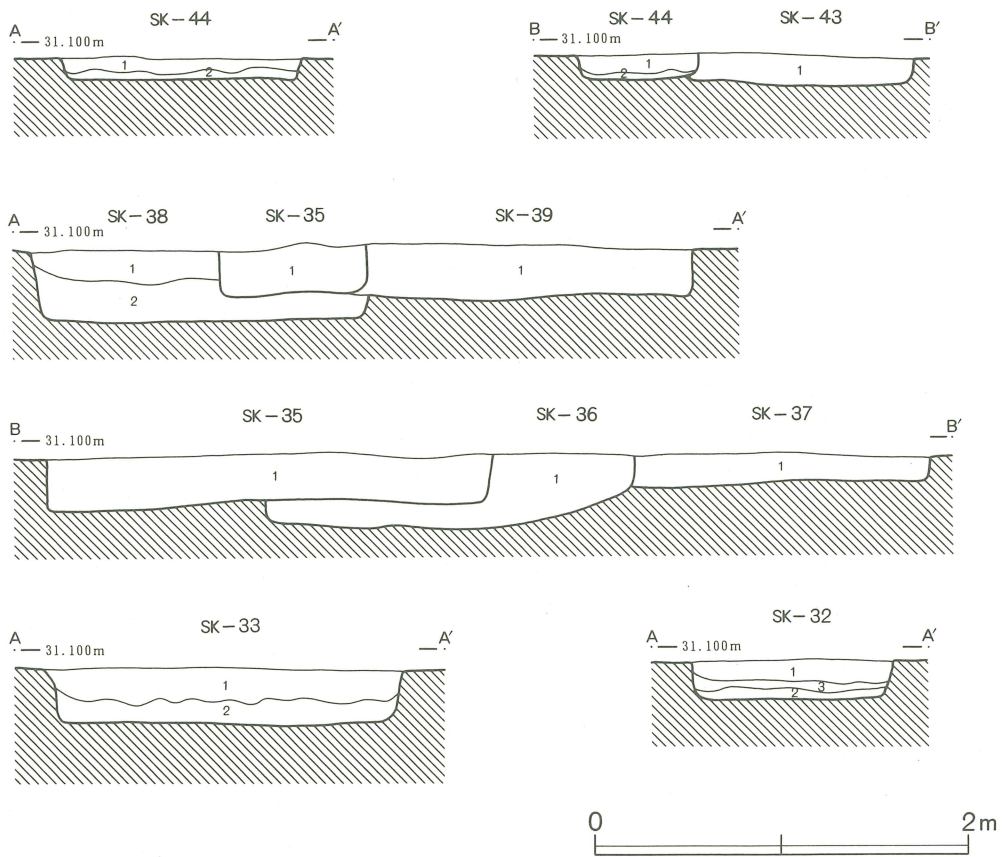
第25図 第32・33・35～39・43・44号土坑(1)

ウツギ内

遺物の出土は極めて少なく、しかも短長方形土坑にはほぼ限られる(第49図)。内訳は第43号土坑より土師質のかわらけ、第111号土坑より播鉢とスタンプ文の押された脚片(器種不明)、第120・121号土坑より北宋銭が3枚(祥符元宝、天禧通宝、1枚は判読不能)、第127号土坑よりかわらけと砥石、第162号土坑より板石塔婆片とかわらけ2、第171号土坑より破片の土鍋と土釜、および五輪塔の水輪である。

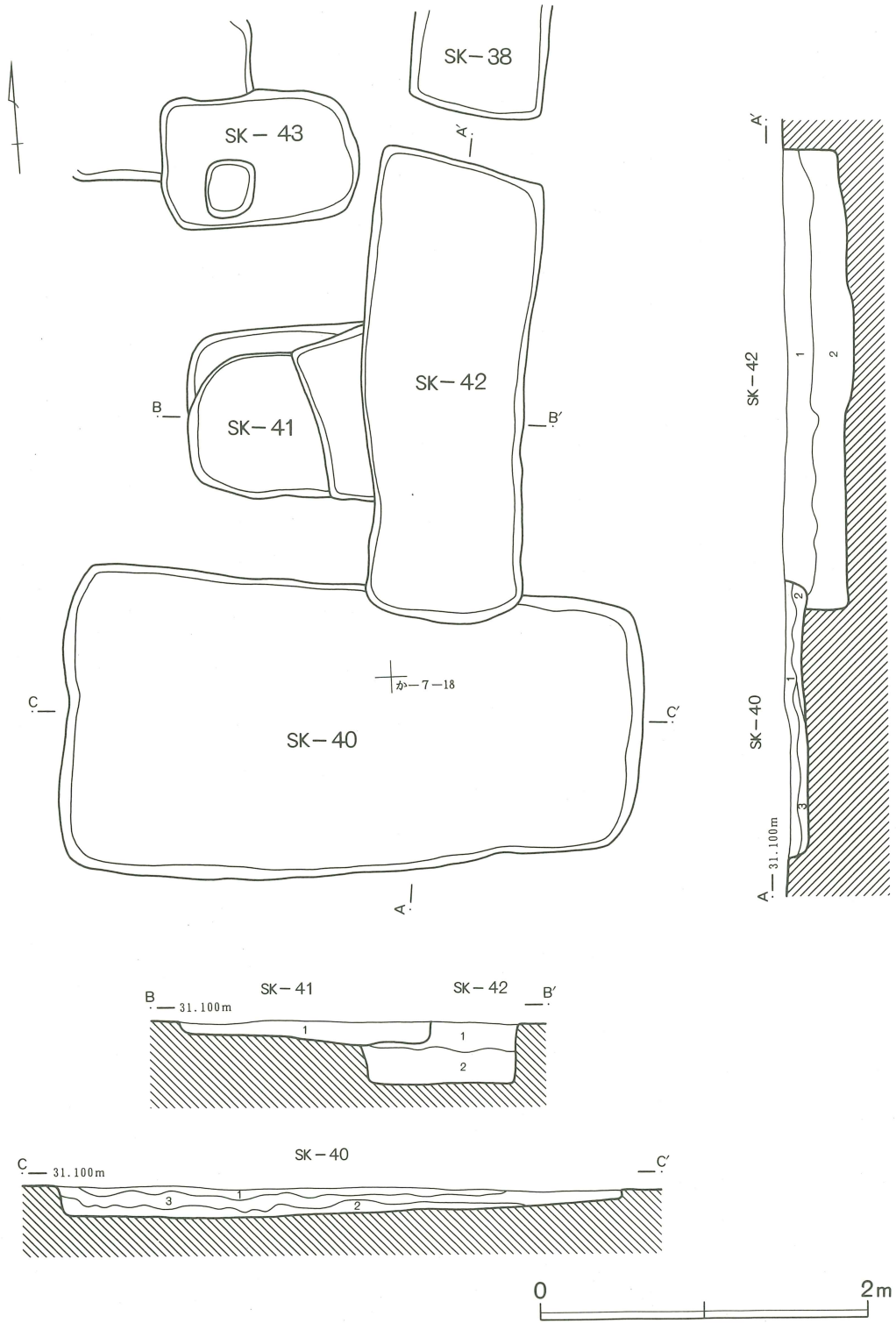
年代的には15世紀の半ば前後が中心であろう。

なお本書では、すべての土坑について遺構図を掲載することができなかった。覆土が単一ということもあり、ここでは主に重複のあるものを取りあげた。

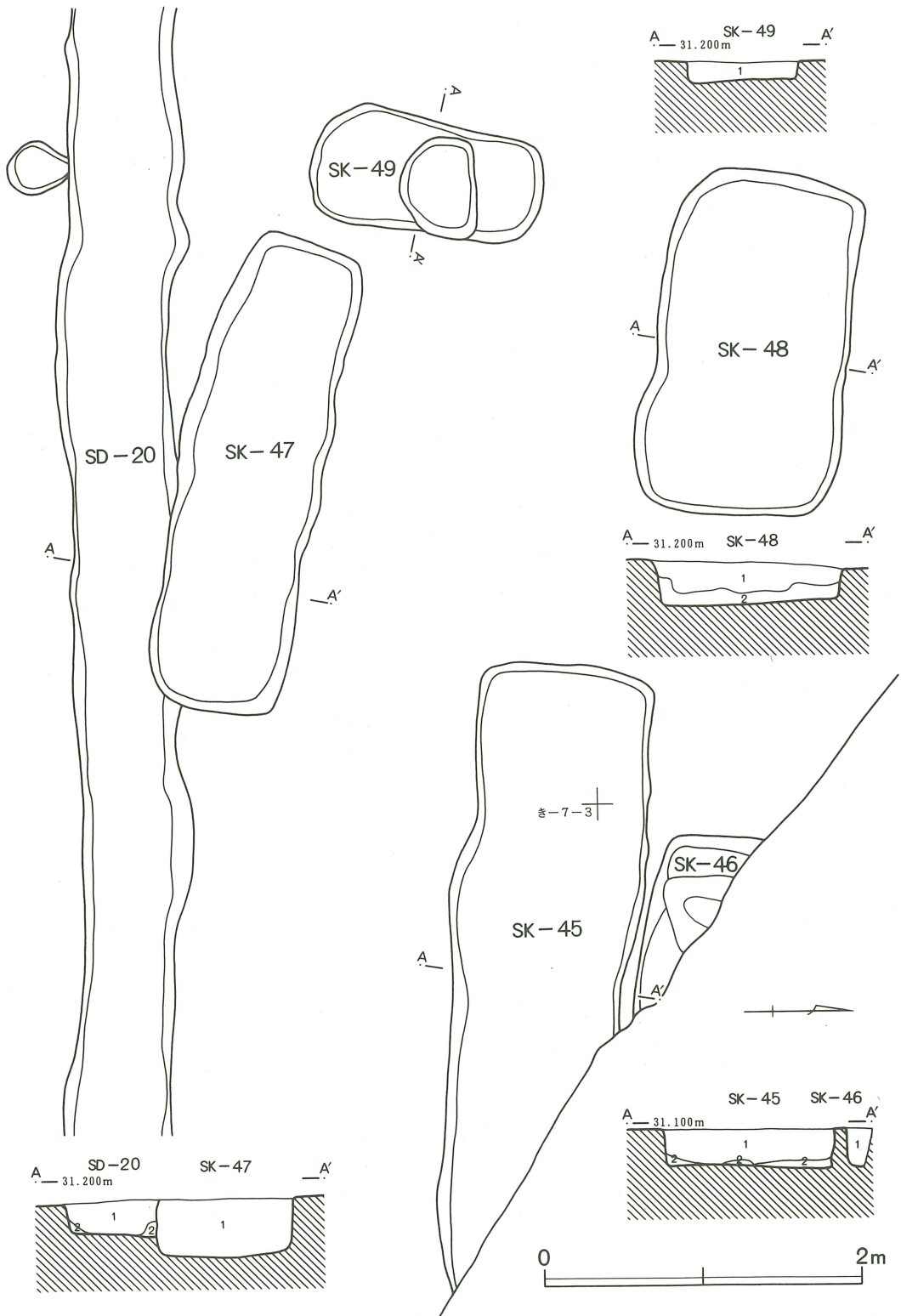


第26図 第32・33・35～39・43・44号土坑(2)

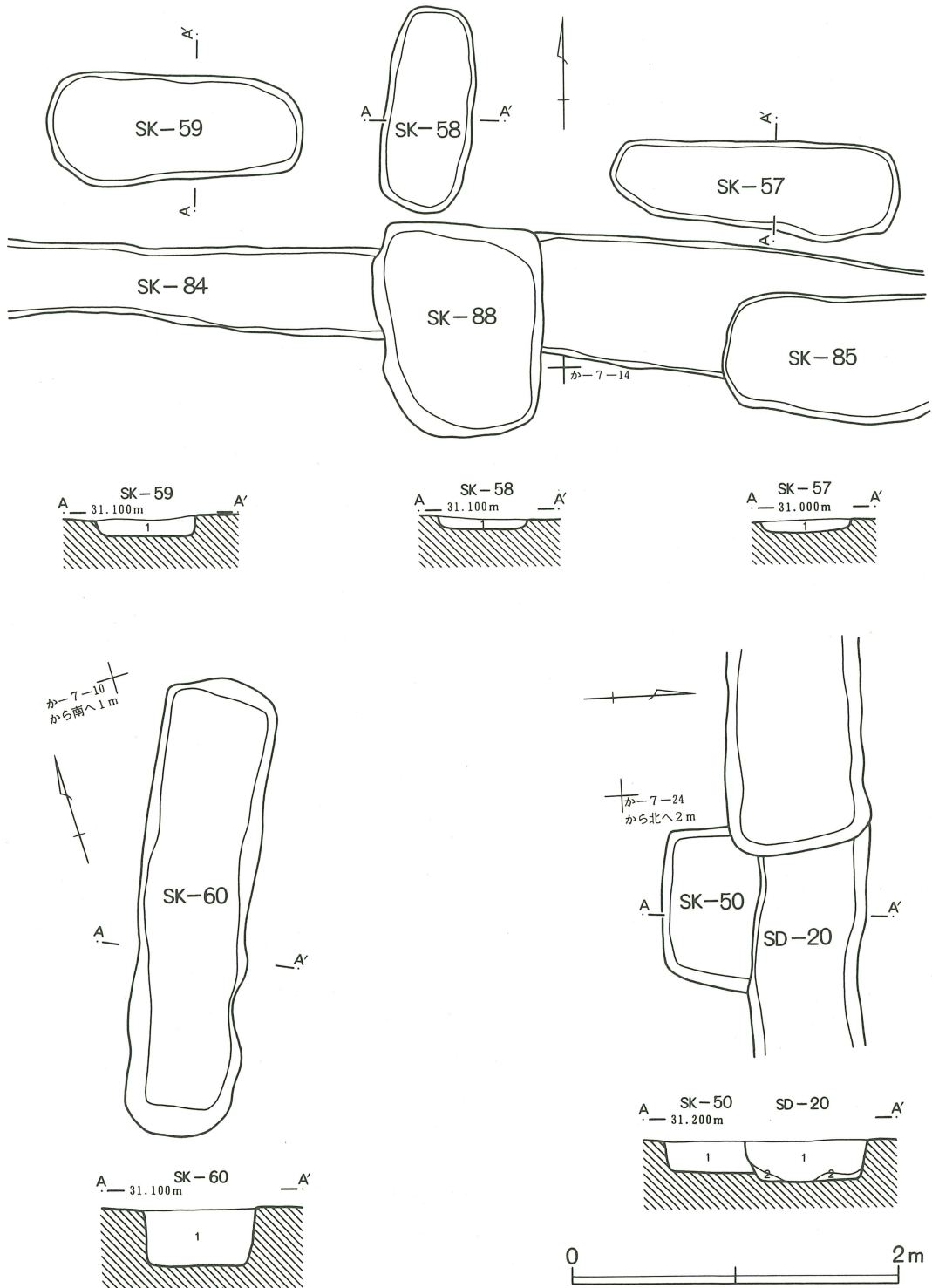




第27図 第40~42号土坑

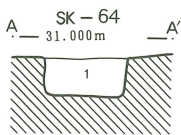
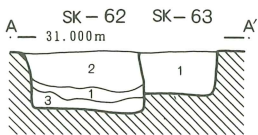
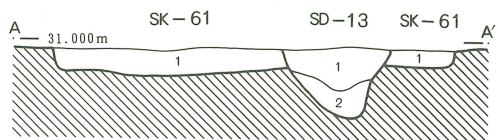
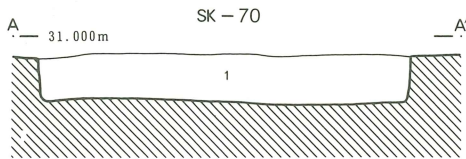
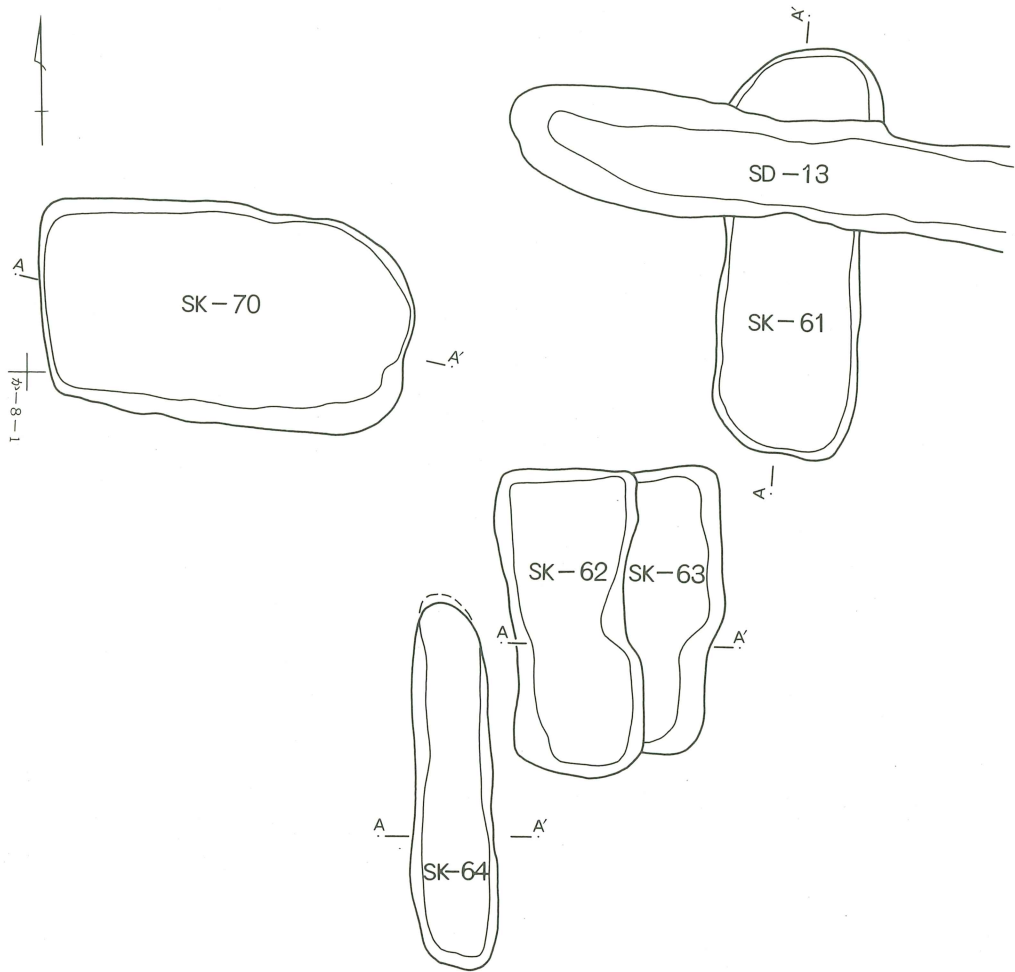


第28図 第45・47~49号土坑



第29図 第50・57~60号土坑



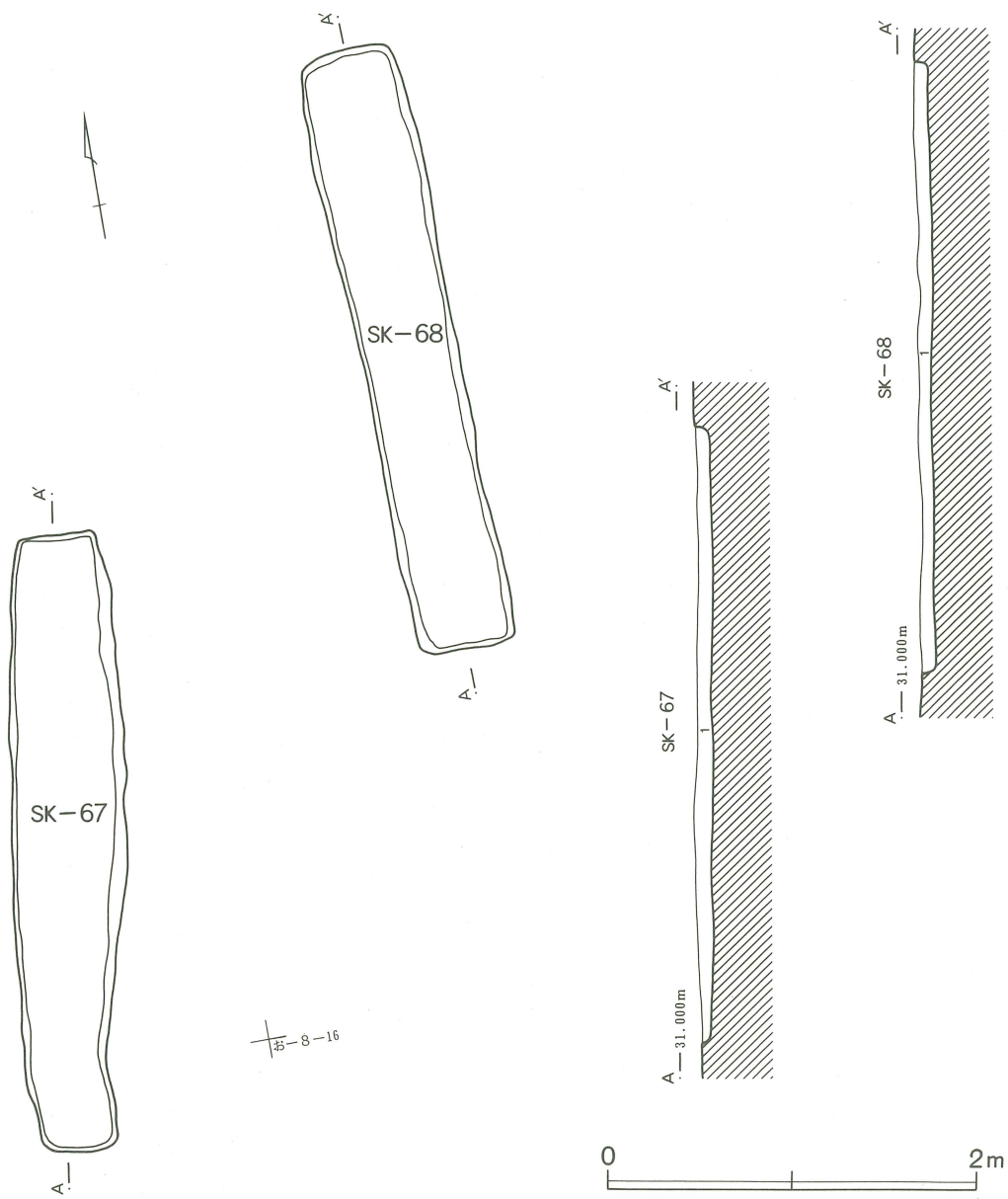


第13号溝土層説明

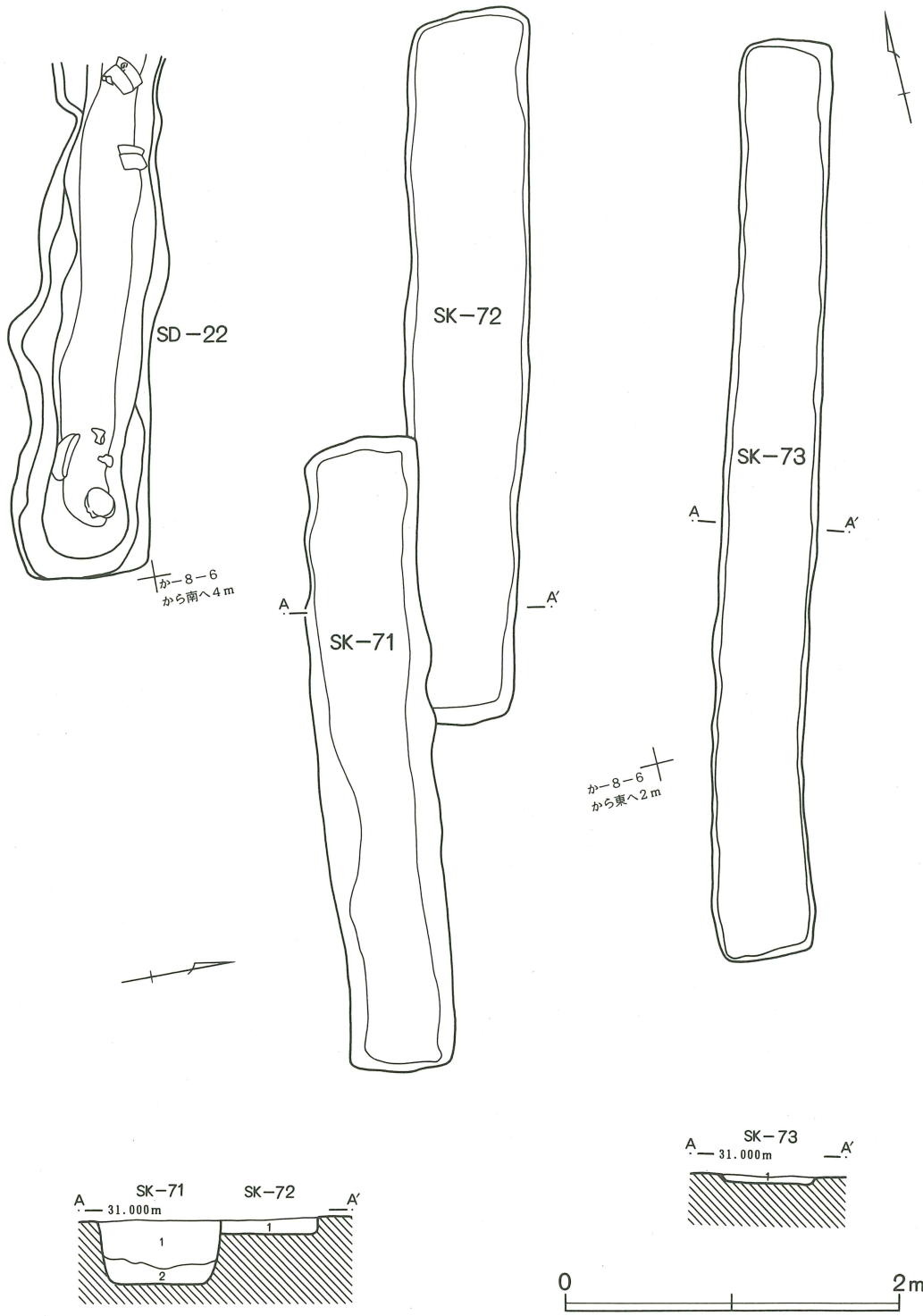
- 1. 10YR3/3 暗褐色土
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色土



第30図 第61～64・70号土坑

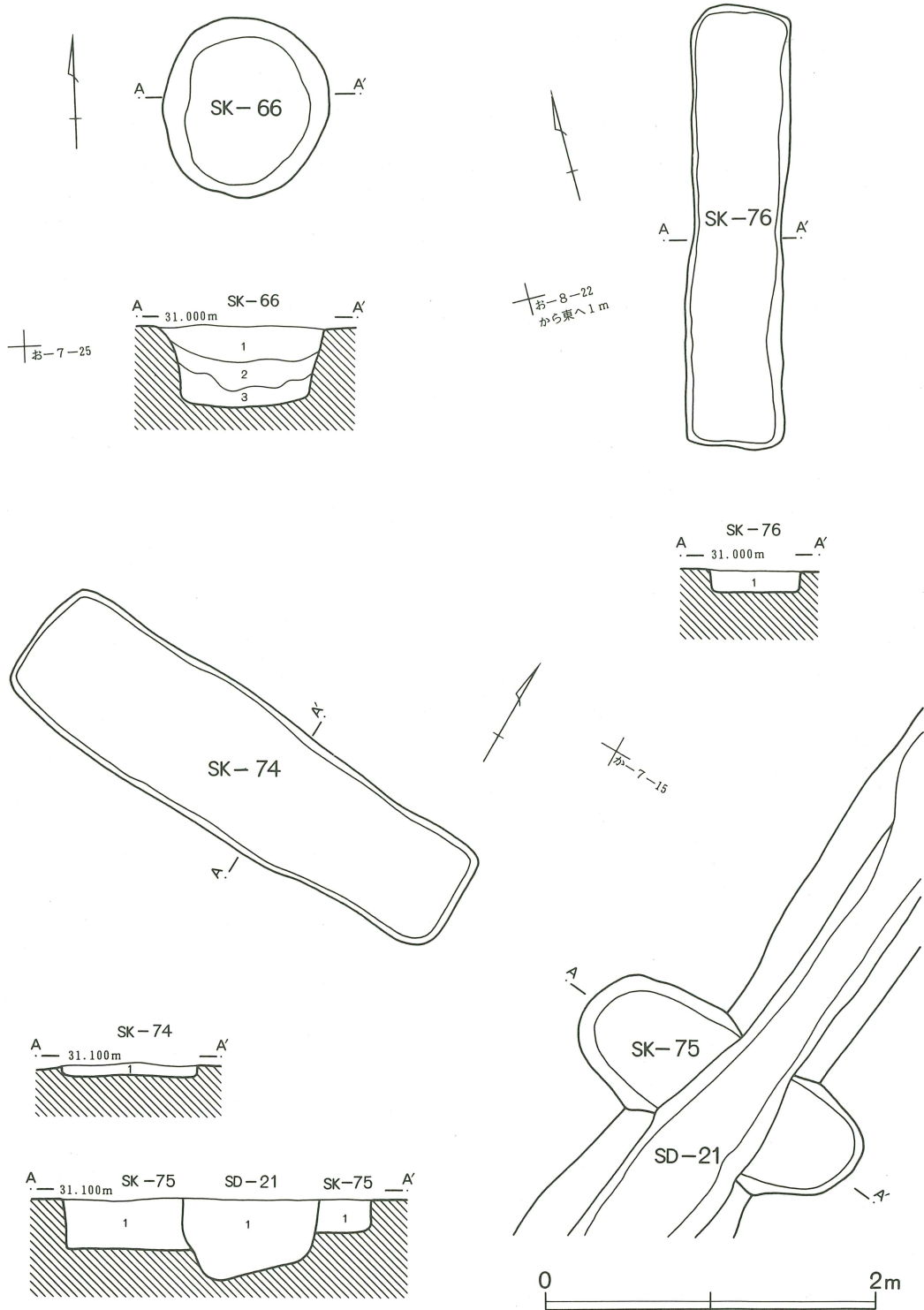


第31図 第67・68号土坑

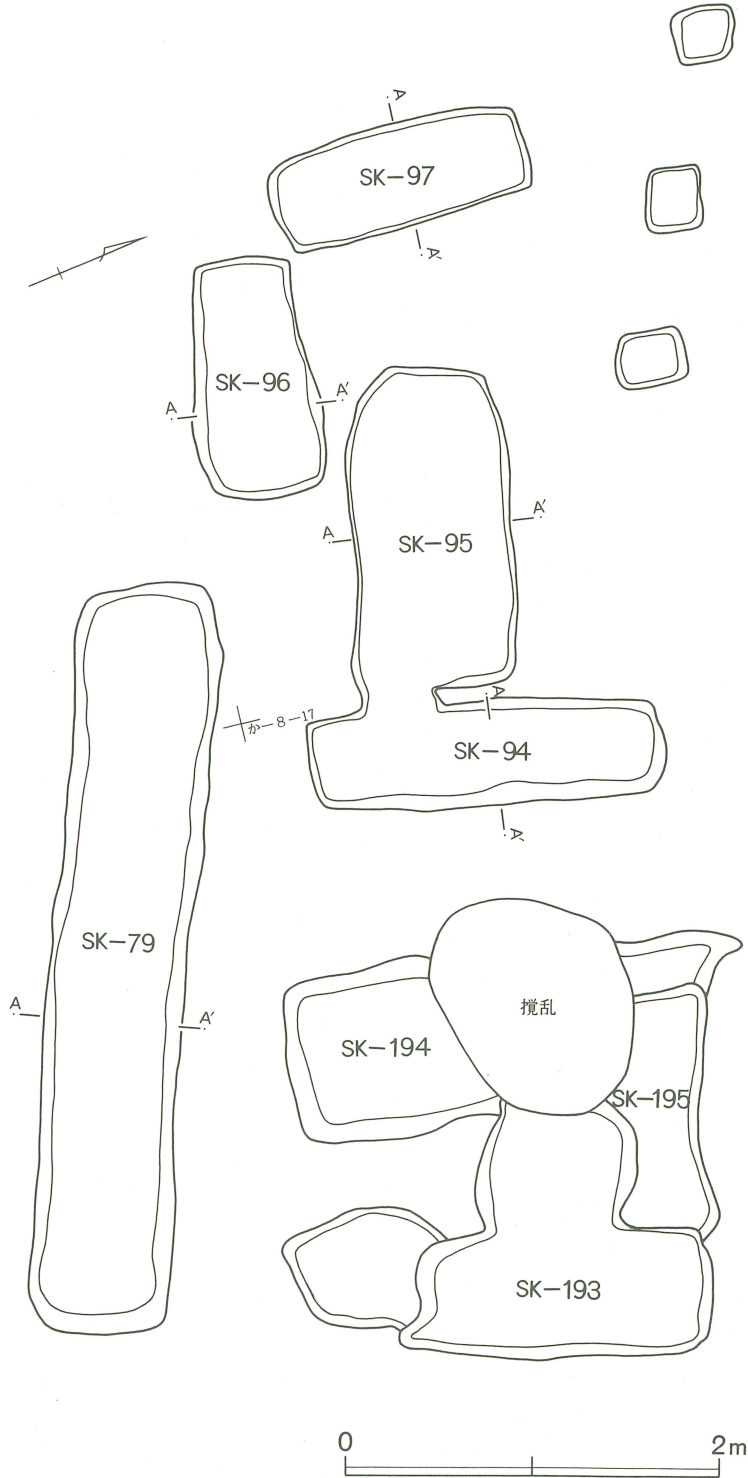
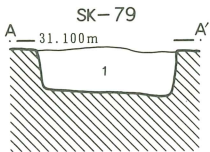
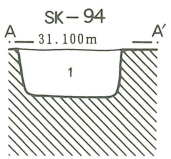
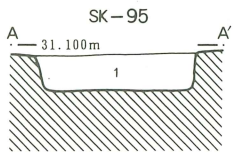
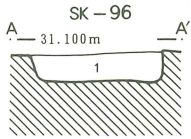
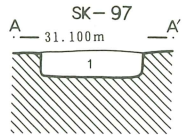


第32図 第71～73号土坑

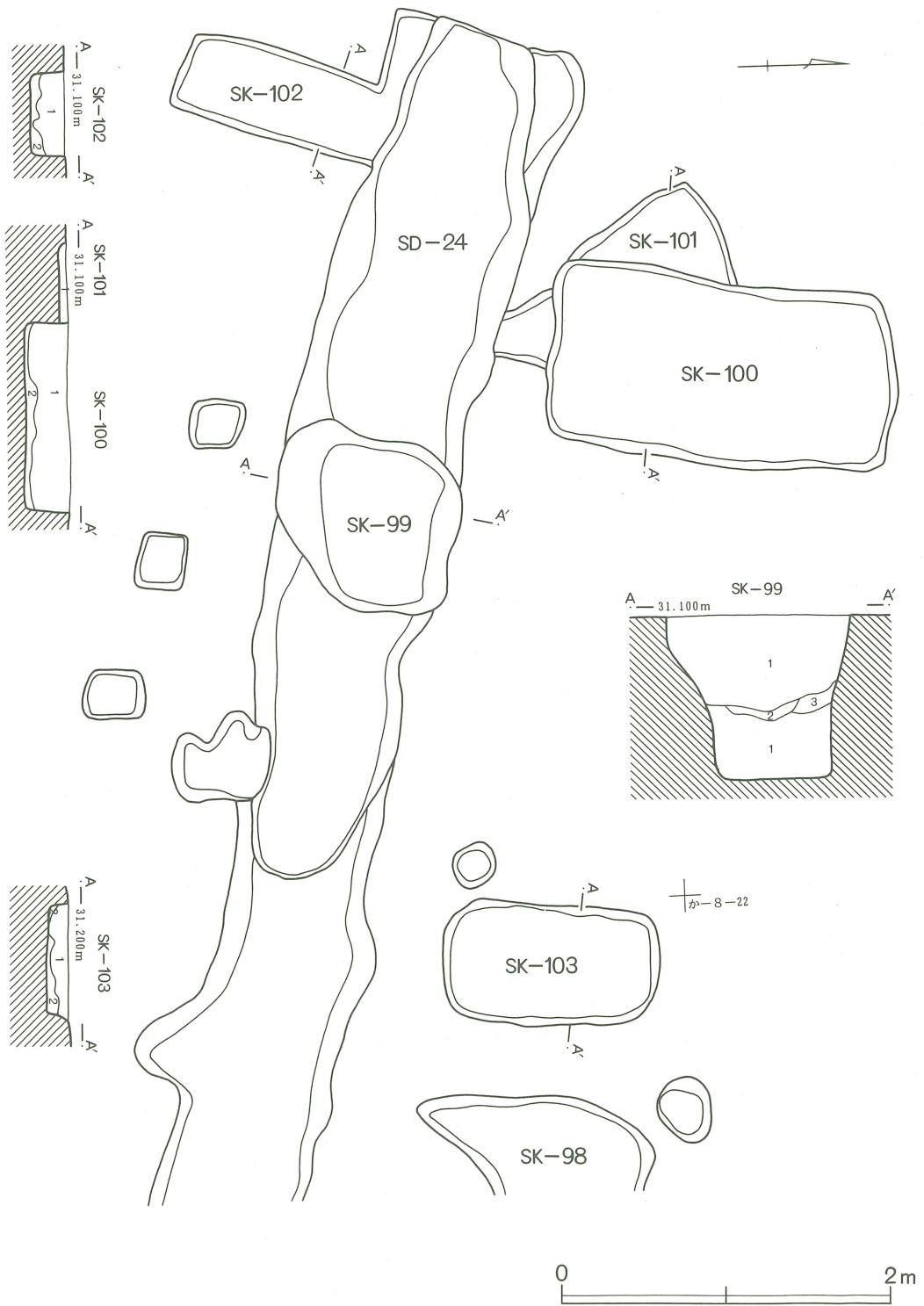




第33図 第66・74~76号土坑

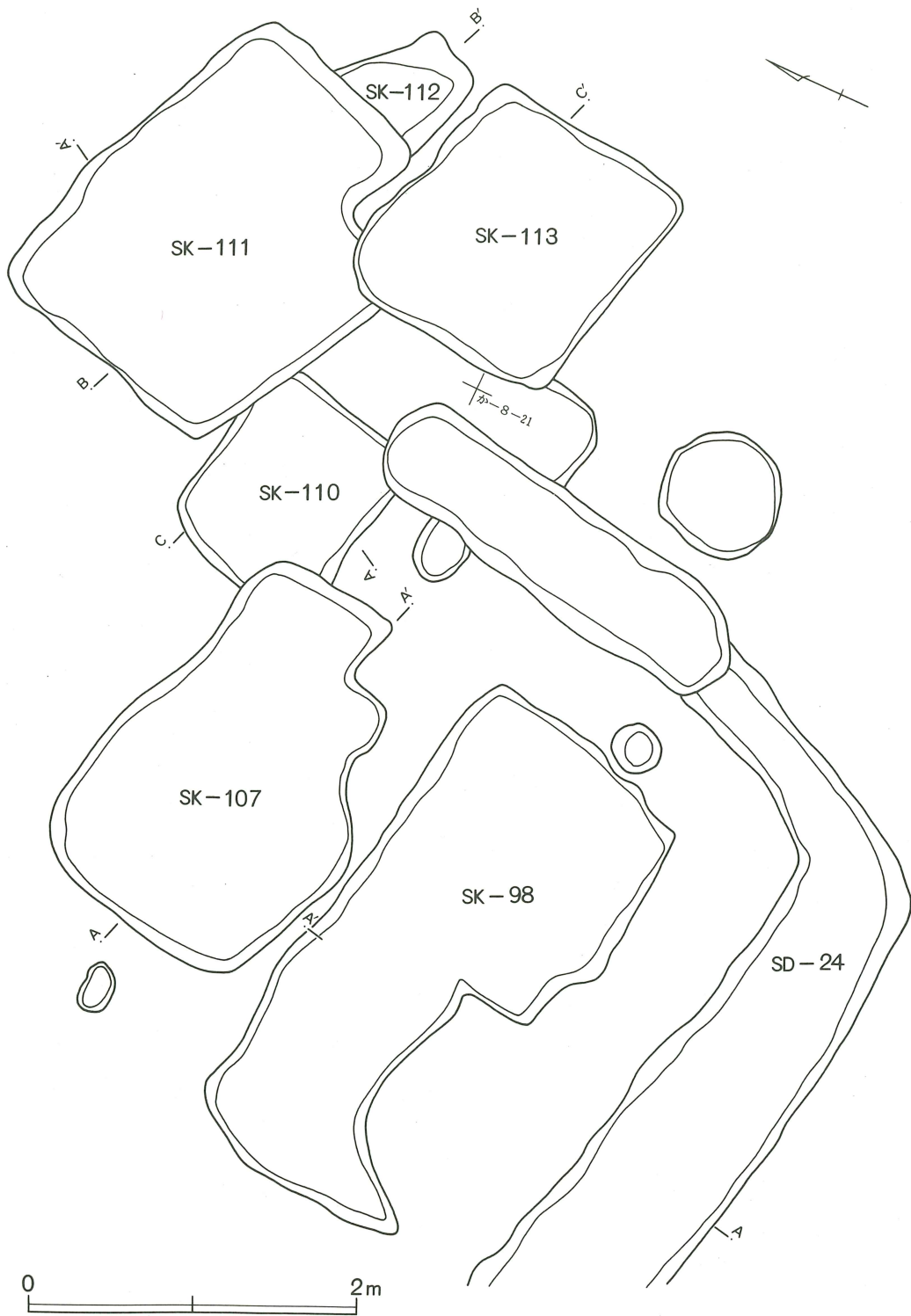


第34図 第79・94~97・193~195号土坑

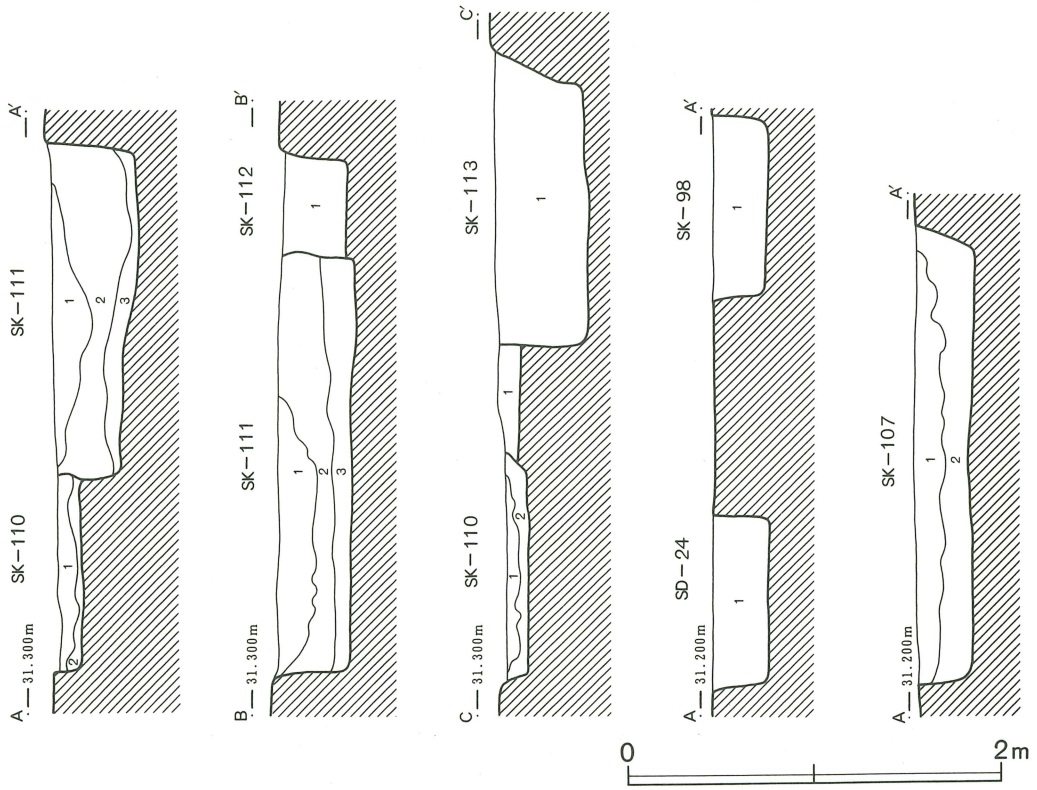


第35図 第99~103号土坑

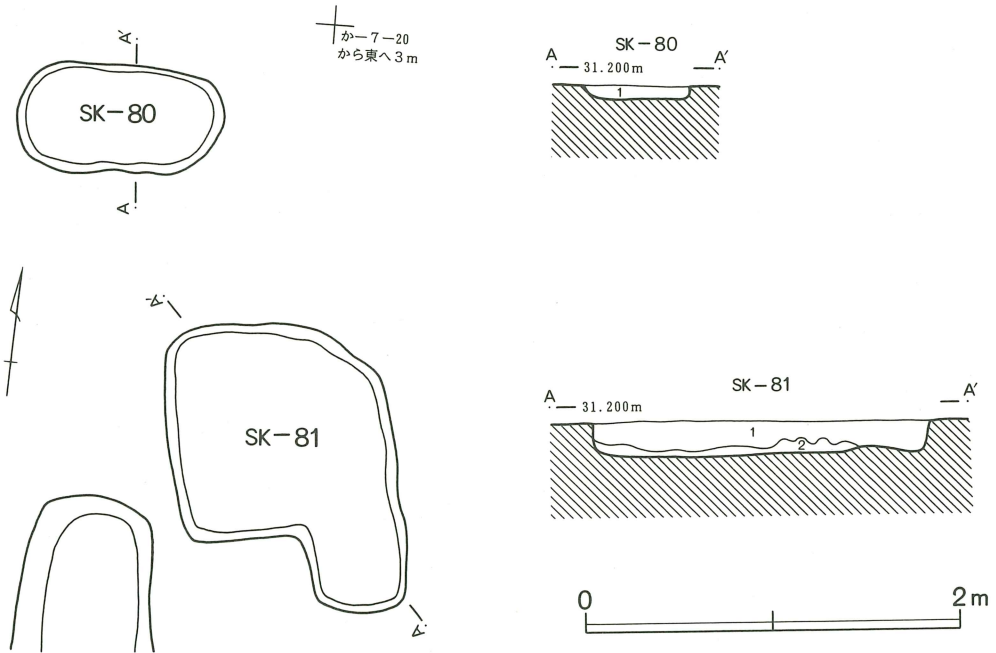




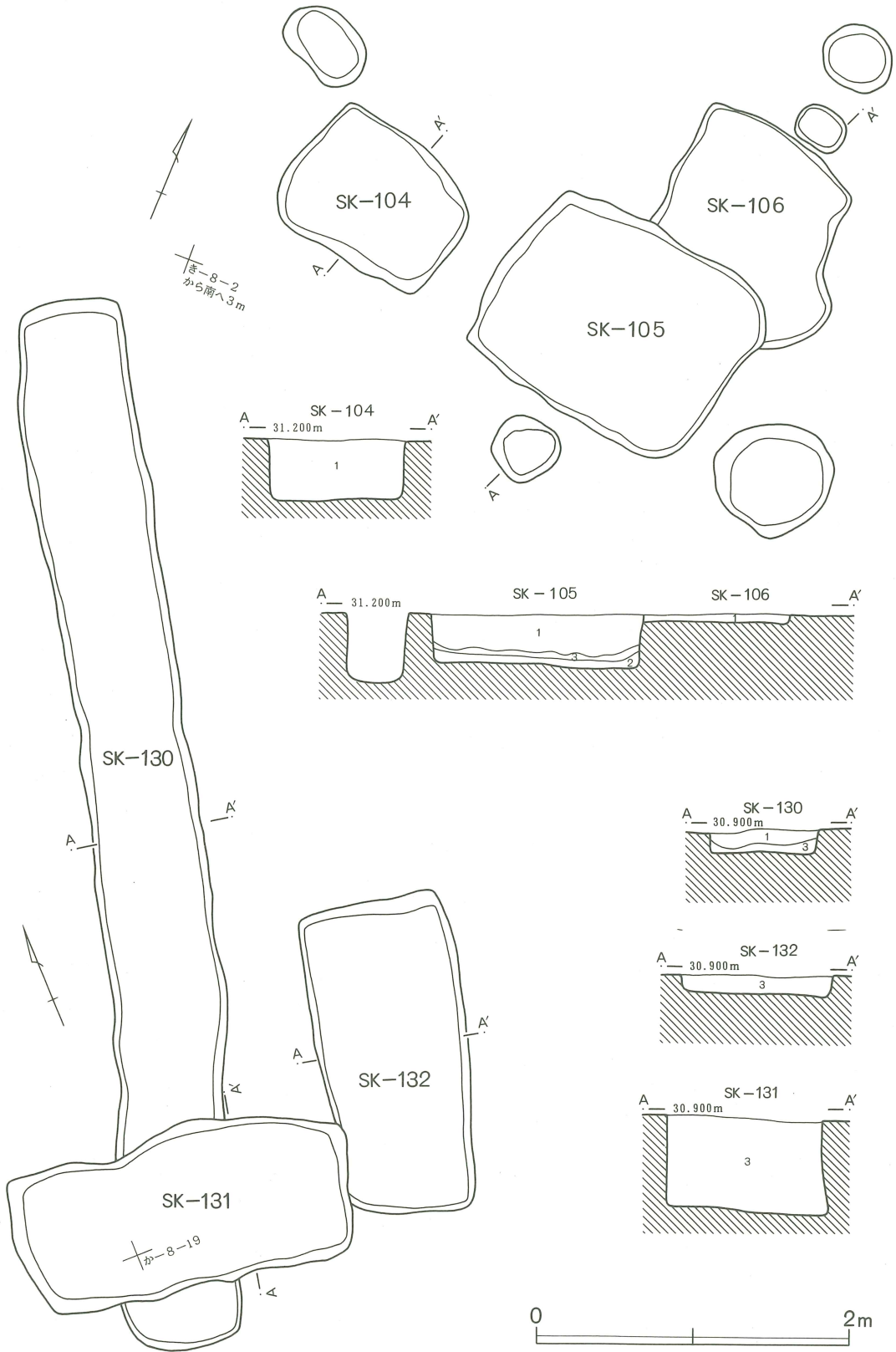
第36図 第98・107・110～113号土坑(1)



第37図 第98・107・110～113号土坑(2)

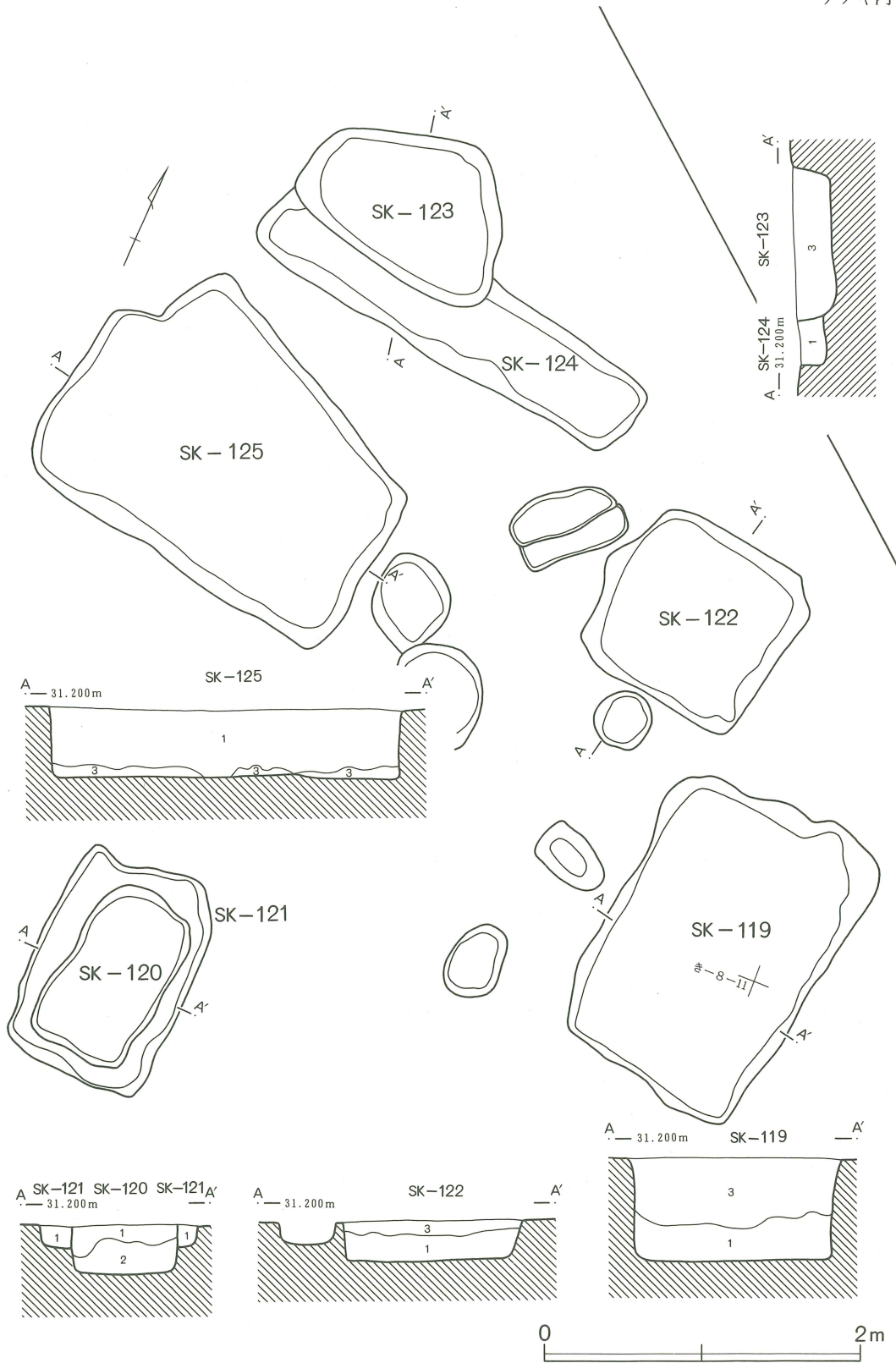


第38図 第80・81号土坑

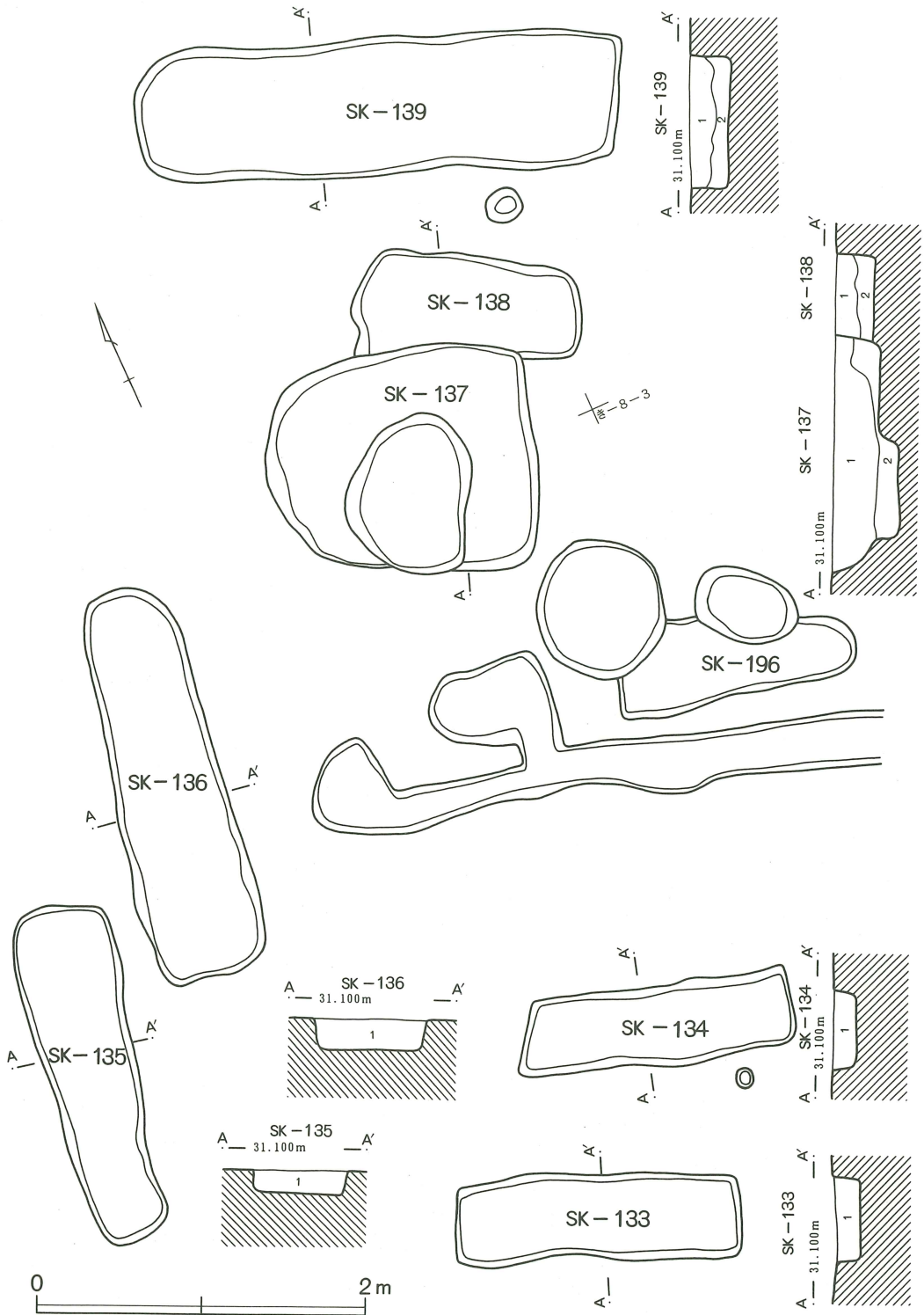


第39図 第104~106・130~132号土坑

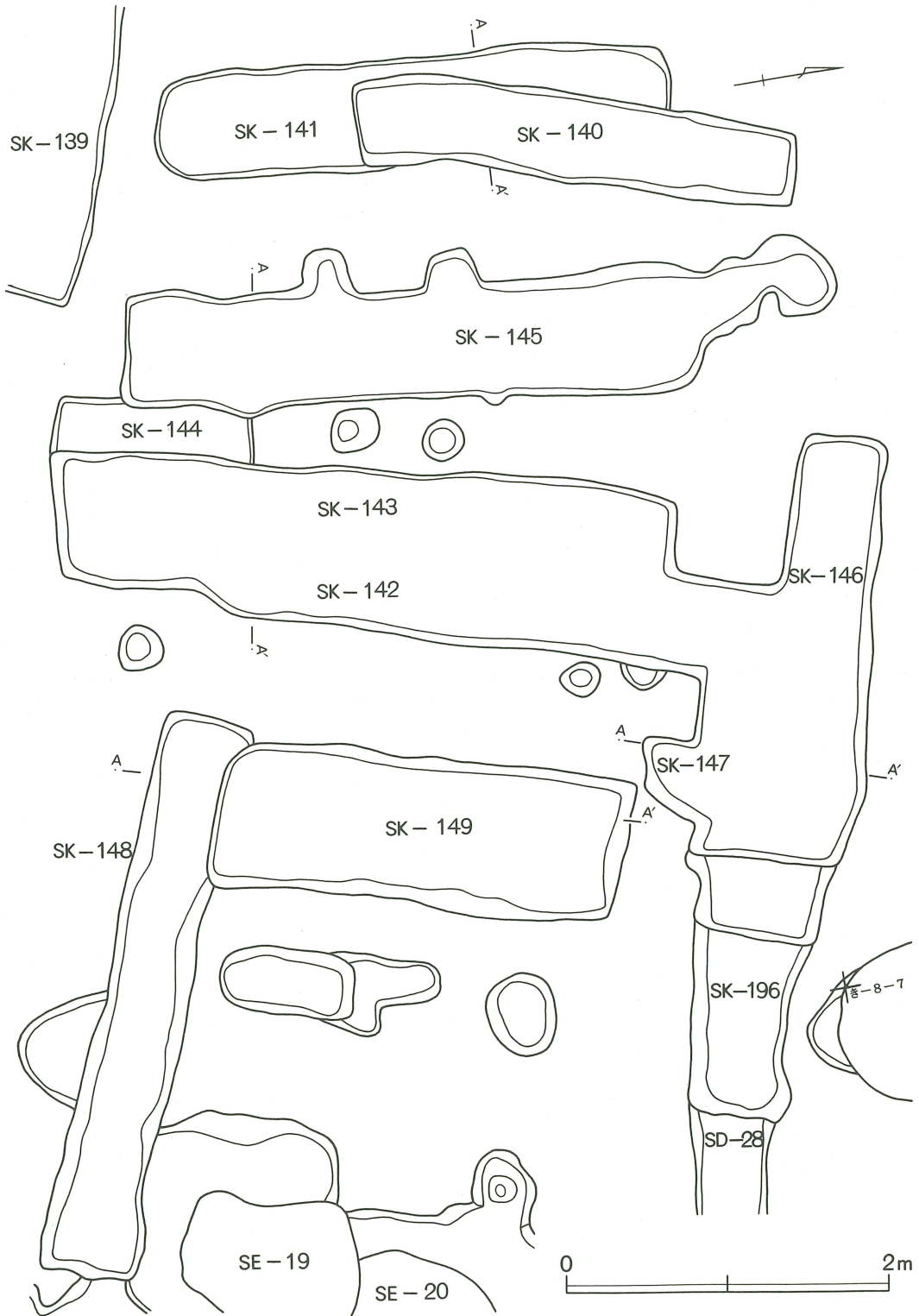




第40図 第119～125号土坑

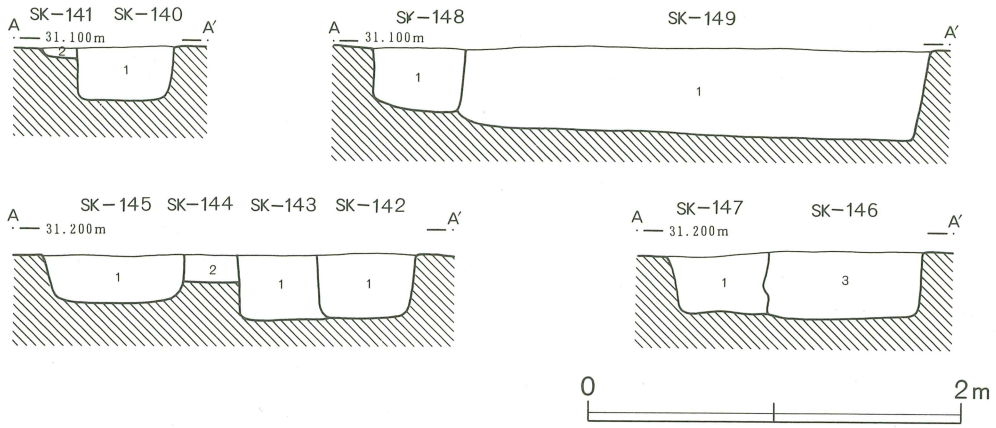


第41図 第133～139号土坑

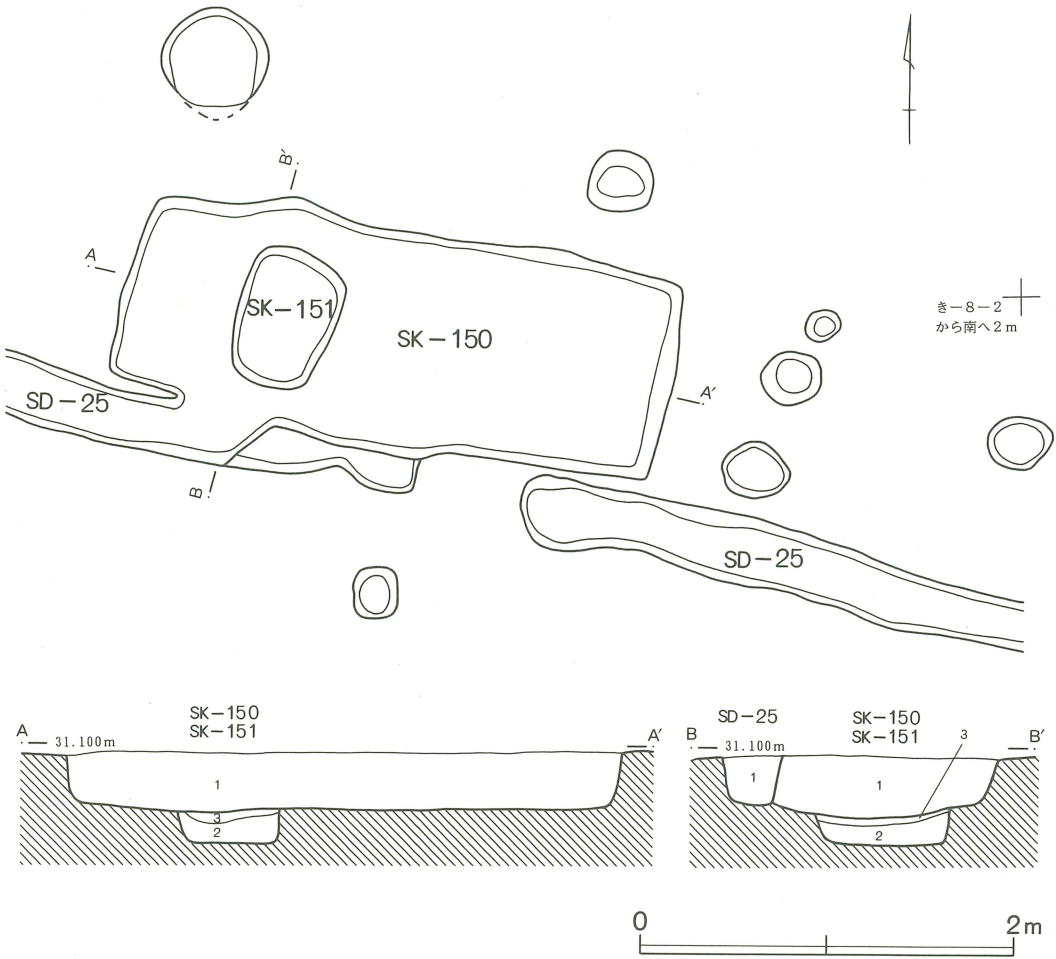


第42図 第140~149号土坑(1)

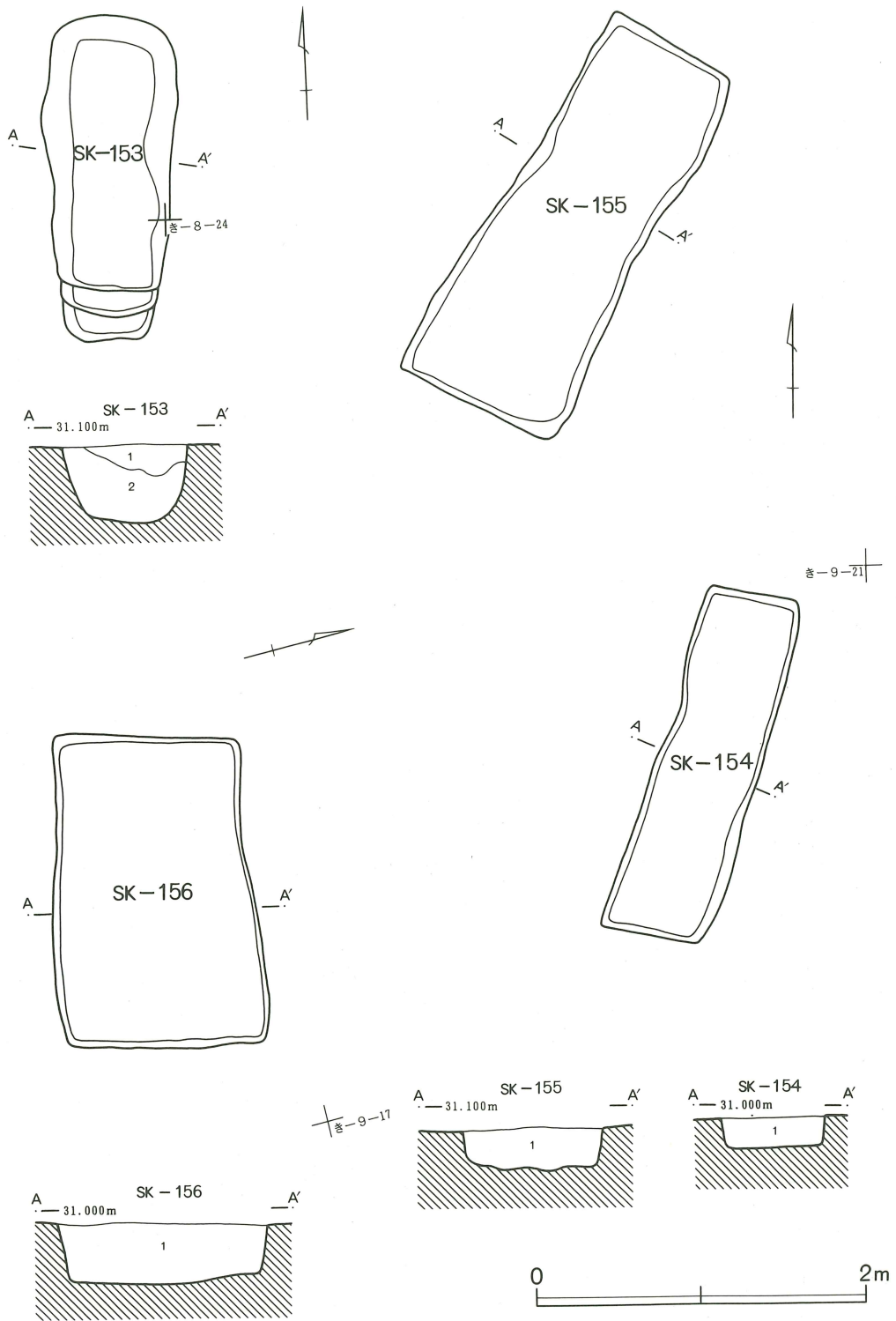




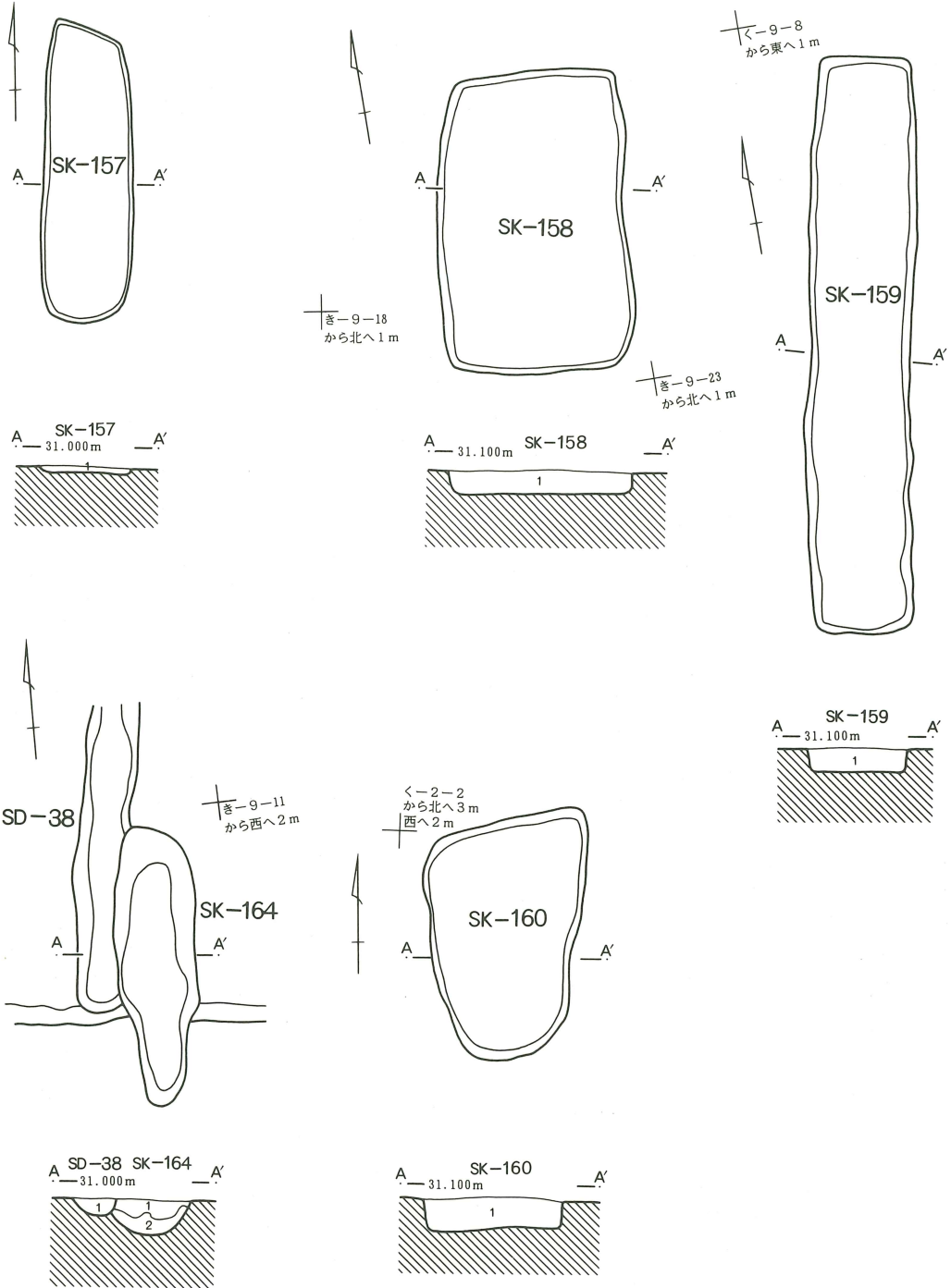
第43図 第140～149号土坑(2)



第44図 第150・151号土坑



第45図 第153~156号土坑

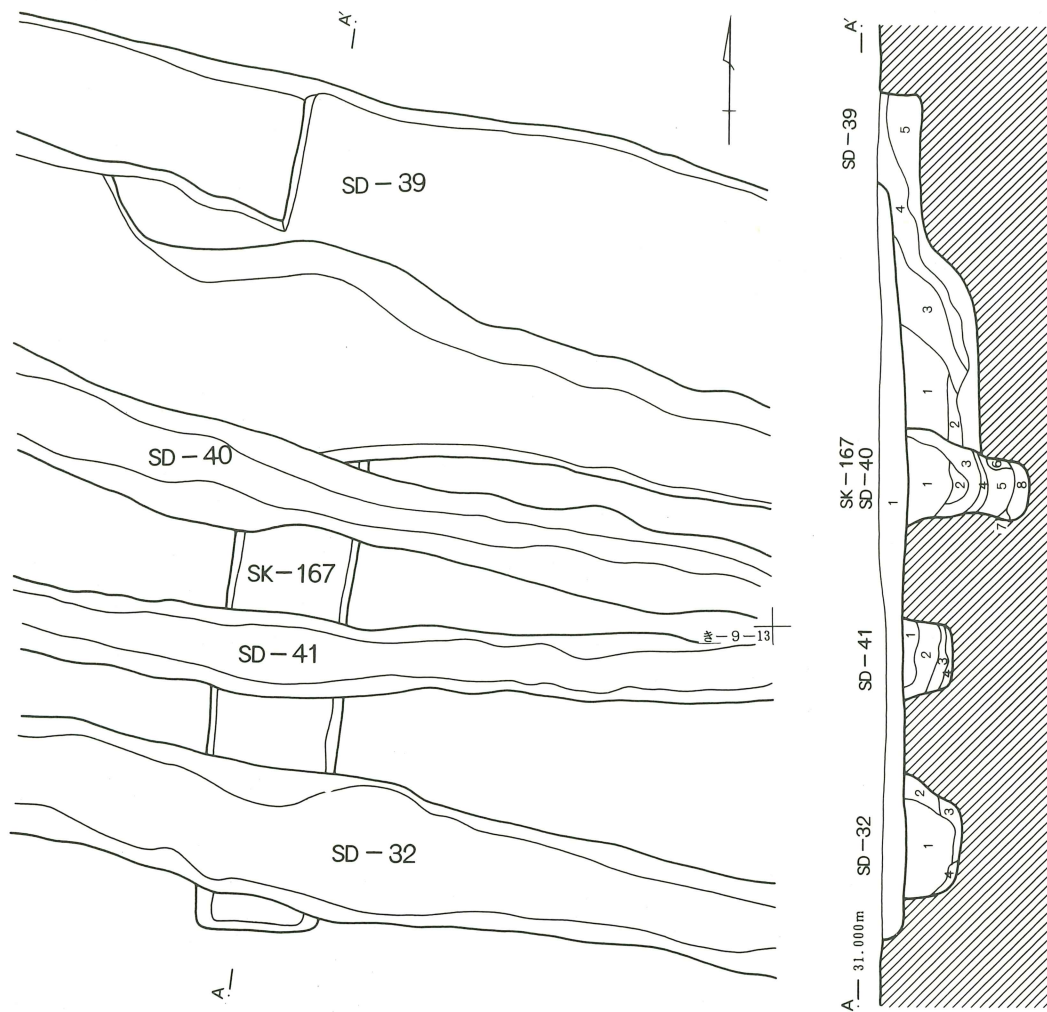


第38号溝土層説明  
 1. 10YR3/4 暗褐色+10YR4/6 褐色粘土質シルトからなる。



第46図 第157~160・164号土坑





第32号溝土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Mn・白色土粒を含む。
2. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Fe・白色土粒を含む。
3. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Fe・Mn粒を含む。
4. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。2に近似。

第39号溝土層説明

1. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn・白色粘土粒多。
2. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Fe・Mn・白色粘土粒微。
3. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe粒多。Mn・白色粘土粒微。
4. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒を含む。
5. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒微。

第41号溝土層説明

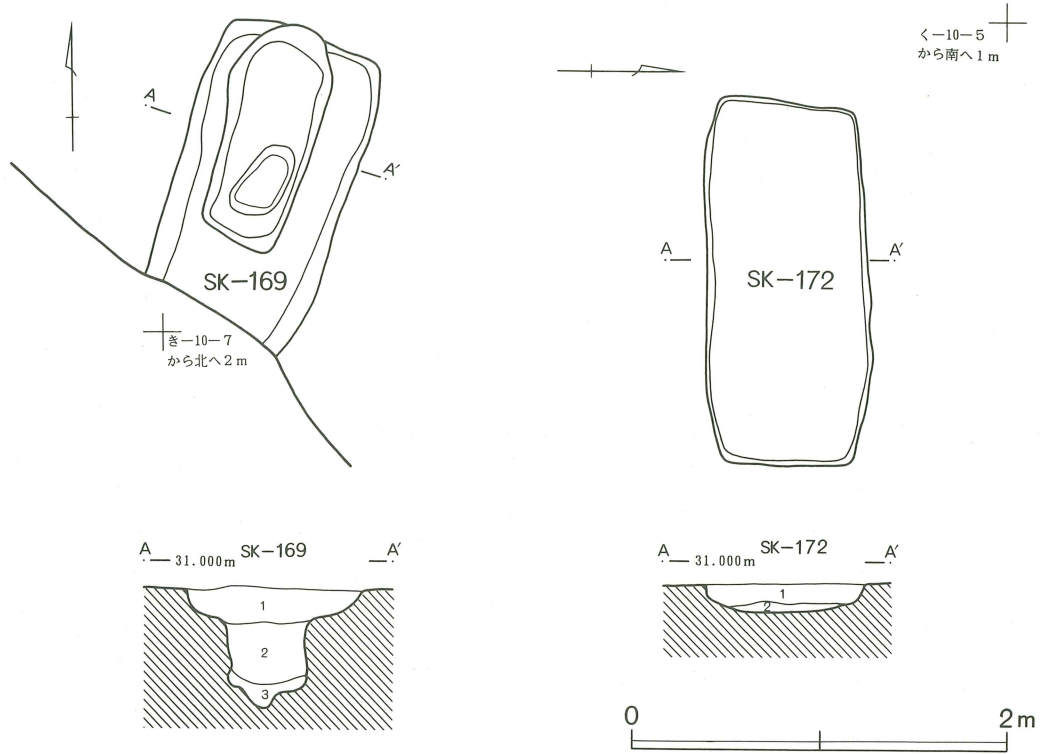
1. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Mn粒微。
2. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒極少。
3. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Fe粒微。
4. 10YR3/4 暗褐色 シルト質砂。

第40号溝土層説明

1. 10YR5/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn・白色粘土粒含む。
2. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒微。砂粒を含む。
3. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒微。
4. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。含有物なし。
5. 10YR4/3 にふい黄褐色土 粘土質シルト。Fe・Mn粒微。
6. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Fe粒微。
7. 10YR4/4 褐色土 粘土質シルト。Fe粒微。
8. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。Fe粒微。



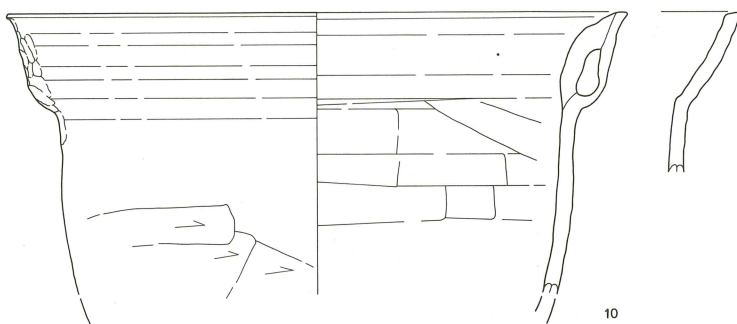
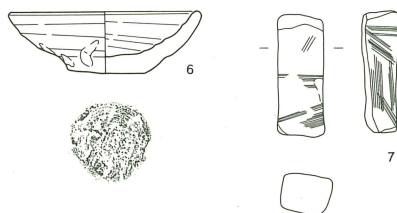
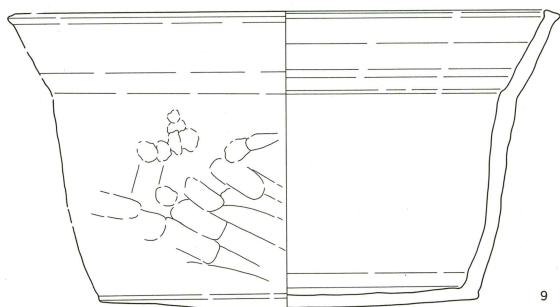
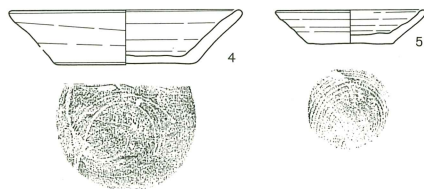
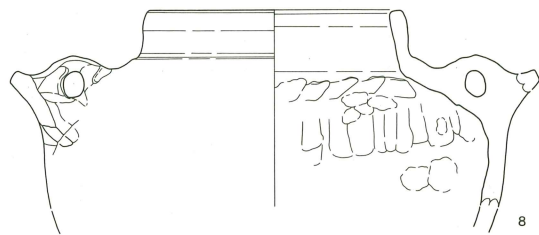
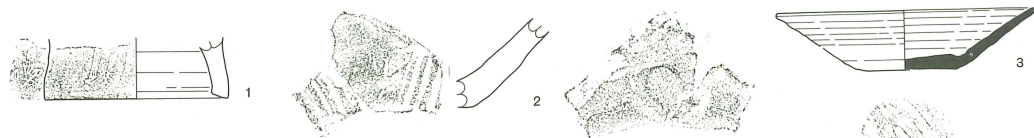
第47図 第167号土坑



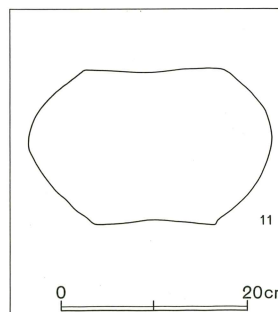
第48図 第169・172号土坑



発掘調査風景



0 10cm



0 20cm



0 5cm

第49図 土坑出土遺物



第3表 ウツギ内遺跡土坑一覽(1)

No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
1	え-6-24	—	円形	0.78	0.70	0.53		41	か-7-18	N-0°	長方形?	(1.08)	(1.03)	(0.09)	SK42より新
2	お-7-11	N-18°-W	長方形	1.45	0.54	0.24		42	か-7-17	N-12°-E	長方形	2.85	1.00	0.34	SK40,41より古
3	お-7-11	N-75°-W	"	1.45	0.85	0.35		43	か-7-18	N-0°	"	1.20	0.77	0.14	SK44より古
4	お-7-12	N-7°-E	"	1.44	0.71	0.25		44	か-7-18	—	正方形	1.27	1.26	0.12	SK43より新
5	お-7-17	N-90°	"	2.70	0.53	0.24		45	か-7-22	N-0°	長方形?	(3.95)	(1.20)	(0.15)	SK46と重複
6	お-7-22	N-2°-E	"	3.46	0.60	0.27		46	き-7-2	—	"	(1.22)	(0.44)	(0.23)	SK45と重複
7	お-7-21	N-10°-E	"	2.18	0.62	0.14	SK8より新	47	か-7-23	N-73°-W	長方形	3.01	0.93	0.37	SD20より新
8	お-7-21	N-10°-E	"	3.57	0.74	0.12	SK7より古	48	き-7-3	N-81°-W	"	2.16	1.20	0.25	
9	か-7-2	N-4°-E	"	2.32	0.87	0.25		49	か-7-23	N-15°-E	"	1.45	0.71	0.10	
10	か-7-1	N-5°-E	"	3.15	0.68	0.14	SD13より新	50	か-7-23	—	長方形?	(1.00)	(0.59)	(0.15)	SD20より古
11	か-7-2	N-87°-W	"	2.01	0.55	0.23		51	か-7-18	N-88°-W	長方形	(1.35)	(0.70)	(0.09)	SK54より新
12	お-7-7	N-2°-E	"	3.23	0.60	0.15	SD67より新	52	か-7-18	N-90°	"	(1.24)	(0.62)	(0.08)	SK53より新
13	お-7-18	N-85°-E	"	0.90	0.46	0.20		53	か-7-18	N-90°	"	(0.72)	(0.60)	(0.13)	SK52より古 SK54より新
14	お-7-19	N-5°-E	"	0.93	0.51	0.30		54	か-7-18	N-90°	楕円形?	(1.15)	(0.68)	(0.11)	SK51,53より古
15	お-7-19	N-2°-E	"	1.15	0.54	0.16		55	か-7-19	N-79°-W	長方形	2.09	0.94	0.41	
16	お-7-18	N-88°-E	"	4.78	0.59	0.14		56	か-7-19	N-79°-W	"	(0.93)	(0.60)	(0.33)	
17	か-7-8	N-8°-W	"	2.52	0.80	0.34	SK19より新	57	か-7-13	N-90°	"	1.76	0.52	0.07	
18	か-7-8	N-79°-W	"	1.85	0.81	0.08		58	か-7-14	N-8°-E	"	1.24	0.54	0.08	
19	か-7-8	N-31°-W	"	3.63	0.93	0.05	SK17,20より新	59	か-7-14	N-90°	"	1.57	0.63	0.07	
20	か-7-8	N-83°-W	"	1.92	0.95	0.20	SK19より新	60	か-7-4	N-25°-E	"	2.78	0.69	0.33	
21	か-7-7	N-5°-E	"	(2.00)	(1.06)	(0.06)	SK29と同一か	61	か-7-5	N-4°-E	"	(2.17)	(0.75)	(0.14)	SD13より古
22	か-7-2	—	長方形?	(0.50)	(0.57)	(0.16)		62	お-7-25	N-0°	"	1.63	0.67	0.29	SK63より新
23	か-7-6	N-13°-E	長方形	1.55	0.86	0.09		63	お-7-25	N-0°	"	(1.53)	(0.50)	(0.26)	SK62より古
24	か-7-6	N-70°-W	"	2.00	0.90	0.19		64	お-8-20	N-0°	"	1.95	0.41	0.18	
25	か-7-6	N-78°-W	"	3.00	1.05	0.18	SK26,27より古	65	お-7-25	N-0°	"	(0.77)	(0.72)	(0.25)	
26	か-7-7	N-90°	"	2.58	0.64	0.42	SK25,27より新 SK28と重複	66	お-7-24	—	円形	1.05	1.00	0.45	
27	か-7-7	—	長方形?	(0.55)	(0.14)	(0.05)	SK25より新 SK26より古	67	お-8-16	N-10°-E	長方形	3.28	0.62	0.08	
28	か-7-7	N-90°	長方形	(2.10)	(0.80)	(0.13)	SK29より新 SK26と重複	68	お-8-15	N-0°	"	3.26	0.53	0.07	
29	か-7-7	N-0°	"	(0.78)	(0.83)	(0.21)	SK28より古 SK21と同一か	69	お-7-19	—	円形	1.00	0.92	0.59	
30	か-7-11	N-90°	"	1.98	0.86	0.37	SK31より新	70	か-7-5	N-90°	長方形	1.98	1.19	0.37	
31	か-7-11	N-72°-W	"	2.40	0.58	0.10	SK30より古	71	か-7-5	N-85°-W	"	3.75	0.68	0.39	SK72より新
32	か-7-17	N-55°-E	"	2.10	1.05	0.19		72	か-8-1	N-80°-W	"	4.22	0.74	0.08	SK71より古
33	か-7-17	N-2°-E	"	1.88	1.05	0.29	SD18より新	73	か-8-5	N-17°-E	"	5.44	0.57	0.04	
34	か-7-16	—	円形	0.96	1.10	0.54		74	か-7-10	N-86°-W	"	3.00	0.84	0.03	
35	か-7-17	N-82°-W	長方形	(3.12)	(0.82)	(0.28)	SK36,38,39より新	75	か-7-9	N-90°	楕円形	(1.88)	(0.75)	(0.33)	SD21より古
36	か-7-17	N-82°-W	"	2.00	0.84	0.11	SK35より古 SK37より新	76	お-8-16	N-14°-E	長方形	3.81	0.60	0.13	
37	か-7-17	N-90°	"	(1.43)	(0.45)	(0.14)	SK36より古	77	か-8-11	N-90°	"	2.00	1.01	0.36	
38	か-7-17	N-10°-E	"	(1.05)	(0.84)	(0.26)	SK35より古	78	か-8-11	—	正方形	1.10	0.75	0.16	
39	か-7-17	N-10°-E	"	(3.21)	(0.90)	(0.29)	SK35より古	79	か-8-11	N-74°-W	長方形	3.99	0.72	0.23	
40	か-7-13	N-90°	"	3.55	1.77	0.16	SK42より新	80	か-7-14	N-90°	楕円形	1.10	0.57	0.09	

第4表 ウツギ内遺跡土坑一覧(2)

No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
81	か-7-14	N-15°-W	長方形?	1.81	1.22	0.16	二基の切合か	121	き-8-6	N-55°-E	長方形	1.40	1.00	0.05	SK120より古
82	か-7-8	N-14°-E	長方形	(2.11)	(0.73)	(0.44)	SK83,86と重複	122	き-8-11	—	正方形	1.14	1.14	0.15	
83	か-7-13	N-90°	"	(1.45)	(0.63)	(0.36)	SK82,86,87と重複	123	き-8-11	N-79°-W	長方形	(1.30)	(0.70)	(0.49)	SK124より新
84	か-7-14	N-90°	"	2.56	0.47	0.03	SK88,SD21と重複	124	き-8-11	N-79°-W	"	(2.67)	(0.60)	(0.47)	SK123より古
85	か-7-13	N-90°	"	1.53	0.75	0.11	SK86,87と重複	125	き-8-11	N-60°-W	"	2.24	1.50	0.44	
86	か-7-8	N-90°	"	(2.00)	(0.54)	(0.06)	SK82,83,85,87と重複	126	き-8-11	N-20°-E	"	3.16	0.50	0.42	
87	か-7-13	N-85°-W	"	2.63	0.74	0.08	SK83,85,86と重複	127	き-8-12	N-24°-E	"	5.15	0.95	0.88	SE15と重複 SK128より新
88	か-7-14	N-0°	"	1.30	1.00	0.41	SK84,87と重複	128	き-8-12	N-24°-E	"	5.05	0.50	0.44	SE15と重複 SK127より古
89	き-8-1	N-70°-W	"	(1.50)	(1.20)	(0.23)	SE19,SK90より古 SK148と重複	129	き-8-12	N-12°-E	"	4.23	0.82	0.10	
90	き-8-1	—	楕円形	(1.13)	(1.01)	(0.45)	SK89,91より新	130	か-8-18	N-13°-E	"	6.02	0.72	0.13	SK131と重複
91	き-8-1	N-69°-W	長方形	(1.06)	(0.68)	(0.27)	SE19,20,21,SK92より新, SK90より古	131	か-8-18	N-85°-W	"	2.20	0.89	0.63	SK130,132と重複
92	き-8-1	—	楕円形	1.60	1.19	(0.70)	SK91より古 SK93より新	132	か-8-18	N-13°-E	"	1.98	1.00	0.14	SK131と重複
93	き-8-1	N-69°-W	長方形	(3.39)	(0.58)	(0.16)	SK92より古	133	か-8-23	N-74°-W	"	1.74	0.50	0.15	
94	か-8-16	N-13°-E	"	1.88	0.55	0.23	SK95と重複	134	か-8-23	N-74°-W	"	1.34	0.47	0.13	
95	か-8-17	N-78°-W	"	1.65	0.84	0.20	SK94と重複	135	か-8-23	N-12°-E	"	2.06	0.55	0.14	
96	か-8-17	N-88°-W	"	1.29	0.63	0.15		136	か-8-23	N-12°-E	"	2.41	0.66	0.21	
97	か-8-17	N-0°	"	1.40	0.55	0.14		137	き-8-3	—	正方形	1.64	1.53	0.41	SK138より新
98	か-8-16	—	長方形?	1.49	1.32	0.11	SD24と重複	138	き-8-3	N-68°-W	長方形	1.80	0.57	0.21	SK137より古
99	か-8-17	—	正方形	1.05	0.88	0.55	SD24より新	139	き-8-3	N-68°-W	"	2.93	0.83	0.23	
100	か-8-22	N-6°-E	長方形	2.19	1.09	0.25	SK101より新	140	き-8-2	N-19°-E	"	2.73	0.55	0.18	SK141より新
101	か-8-22	—	?	(0.73)	(0.59)	(0.07)	SK100より古	141	き-8-2	N-7°-E	"	3.16	0.66	0.10	SK140より古
102	か-8-17	N-22°-E	長方形	(1.34)	(0.54)	(0.20)	SD24と重複	142	き-8-2	N-18°-E	"	3.20	0.62	0.35	SK143より新 SK147と重複
103	か-8-16	N-4°-E	"	1.32	0.72	0.10		143	き-8-2	N-18°-E	"	3.86	0.83	0.33	SK142より古 SK144より新
104	か-8-21	N-80°-W	"	1.14	0.87	0.28		144	き-8-2	N-18°-E	"	1.21	0.38	0.15	SK143,145より古
105	か-8-21	N-80°-W	"	(1.63)	(1.32)	(0.40)	SK106より新	145	き-8-2	N-7°-E	"	3.57	0.66	0.36	SK144より新
106	か-8-21	—	正方形?	(1.60)	(1.18)	(0.06)	SK105より古	146	き-8-7	N-80°-W	"	2.60	0.55	0.30	SK147より古 SD28と重複
107	か-8-21	N-77°-W	長方形	2.41	1.71	0.19	SK110と重複	147	き-8-2	N-18°-E	"	0.70	0.40	0.14	SK146より新 SK142と重複
108	か-8-2	—	円形	0.75	0.75	0.28		148	き-8-2	N-65°-W	"	3.53	0.50	0.30	SK89,149と重複
109	か-8-16	N-10°-E	長方形	2.45	0.65	0.22		149	き-8-2	N-18°-E	"	2.35	0.84	0.46	SK148と重複
110	か-8-21	N-74°-W	"	(1.22)	(0.95)	(0.14)	SK111より古 SK107と重複	150	か-8-22	N-80°-W	"	2.96	1.12	0.28	SK151より新 SD25より古
111	か-8-20	N-74°-W	"	(3.02)	(1.93)	(0.46)	SK110より新 SK113と重複	151	か-8-22	N-80°-W	"	0.87	0.65	0.20	SK150より古
112	か-8-20	N-74°-W	"	(1.06)	(0.71)	(0.32)	SK111より古 SK110より新	152	き-8-8	N-13°-E	"	1.95	0.77	0.23	
113	か-8-20	—	正方形	1.95	1.37	0.38	SK111と重複	153	き-8-24	N-12°-E	"	1.93	0.79	0.53	
114	か-8-21	N-70°-W	長方形	1.55	1.10	0.36		154	き-9-16	N-18°-E	"	2.14	0.64	0.21	
115	き-7-4	N-15°-E	"	2.41	0.70	0.45	SK116と重複	155	き-9-21	N-36°-E	"	2.48	0.78	0.31	
116	き-7-5	N-16°-E	"	(3.90)	(1.90)	(0.30)	SE33,34,SK115, SD28と重複	156	き-9-12	N-75°-W	"	1.86	1.20	0.37	
117	き-7-10	N-9°-E	"	1.47	0.76	0.30		157	き-9-18	N-0°	"	1.71	0.53	0.03	
118	き-7-10	N-9°-E	"	1.67	0.73	0.25		158	き-9-23	N-9°-E	"	1.73	1.10	0.15	
119	き-8-11	N-17°-E	"	1.93	1.35	0.64		159	く-9-2	N-11°-E	"	3.30	0.59	0.11	
120	き-8-6	N-10°-E	"	1.11	0.63	0.19	SK121より新	160	く-9-2	N-0°	"	1.36	0.79	0.18	

第5表 ウツギ内遺跡土坑一覧(3)

No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
161	く-9-2	—	正方形	1.04	0.90	0.44		192	か-8-20	N-3°-E	長方形	(2.05)	(0.80)	(0.32)	SE12より新、SE13、SK191と重複
162	く-9-3	N-90°	長方形	1.79	1.02	0.26	SE55より新	193	か-8-16	N-12°-E	長方形?	1.58	0.68	0.14	SK194、195と重複
163	き-9-1	N-6°-E	"	(0.99)	(0.53)	(0.24)	SD34と重複	194	か-8-16	N-3°-E	"	(0.92)	(0.92)	(0.28)	SK193、195と重複
164	き-9-6	N-4°-E	"	1.55	0.45	0.18	SD38より古	195	か-8-16	N-75°-W	"	(1.59)	(0.42)	(0.31)	SK193、194と重複
165	欠番	—	—	—	—	—	—	196	か-8-22	N-76°-W	長方形	1.45	0.53	0.07	
166	き-9-3	N-8°-E	長方形	3.05	0.50	0.08	SD36と重複	197	か-8-23	N-76°-W	"	0.75	0.45	0.20	SD25と重複
167	き-9-13	N-5°-E	"	2.92	0.67	0.17	SD32、39、40、41より新	198	欠番	—	—	—	—	—	—
168	き-10-12	—	楕円形	(2.05)	(1.45)	(0.44)		199	"	—	—	—	—	—	—
169	き-10-6	N-18°-E	長方形	(1.70)	(0.90)	(0.61)		200	き-8-17	N-80°-W	長方形	(2.42)	(1.03)	(0.58)	SK201と重複
170	き-10-12	N-63°-W	"	2.03	0.59	0.49	SD43と重複	201	き-8-17	N-10°-E	"	1.03	0.52	0.03	SK200と重複
171	く-10-1	N-90°	"	3.04	0.52	0.19		202	き-8-22	N-8°-E	楕円形	1.28	0.90	0.04	
172	き-10-24	N-90°	"	1.41	0.86	0.19		203	き-8-22	N-81°-W	長方形	1.05	0.75	0.21	
173	け-12-17	N-90°	"	0.75	0.65	0.21	SJ3のカマド	204	き-8-18	N-90°	"	(0.90)	(0.66)	(0.19)	SD30と重複
174	け-12-17	N-90°	"	1.67	1.03	0.09		205	か-9-23	N-17°-E	"	3.27	0.48	0.12	
175	欠番	—	—	—	—	—	—	206	く-9-5	—	不整形正方形	1.70	1.50	0.26	
176	け-11-9	N-90°	長方形	1.13	0.39	0.06		207	き-10-17	N-88°-W	長方形	(2.40)	(0.70)	(0.58)	SD43と重複
177	え-7-22	N-77°-E	"	2.80	0.39	0.22	SD5と重複	208	く-11-13	N-15°-W	"	(0.97)	(0.56)	(0.13)	SK209と重複
178	欠番	—	—	—	—	—	—	209	く-11-13	—	正方形	(1.08)	(1.08)	(0.13)	SK208と重複
179	"	—	—	—	—	—	—	210	く-11-13	N-0°	長方形	2.33	0.93	0.11	
180	"	—	—	—	—	—	—	211	き-10-18	N-15°-E	"	1.18	0.45	0.47	SD44と重複
181	"	—	—	—	—	—	—	212	う-2-13	N-42°-E	長楕円形	(2.30)	(1.30)	(0.55)	SD75と重複
182	"	—	—	—	—	—	—	213	う-2-2	N-90°	楕円形	(1.70)	(1.15)	(0.77)	SD75と重複
183	"	—	—	—	—	—	—	214	う-2-2	N-78°-W	"	1.45	0.95	0.37	SD80と重複
184	"	—	—	—	—	—	—	215	い-2-18	N-78°-W	"	(1.30)	(1.14)	(0.47)	
185	"	—	—	—	—	—	—	216	く-9-14	N-74°-W	"	(1.46)	(0.80)	(0.53)	SD59と重複
186	"	—	—	—	—	—	—	217	け-11-1	N-67°-W	長方形	1.50	1.12	0.23	
187	"	—	—	—	—	—	—	218	け-11-1	—	円形	0.61	0.50	0.67	
188	"	—	—	—	—	—	—	219	け-11-2	N-0°	長方形	1.92	0.34	0.16	
189	"	—	—	—	—	—	—	220	け-11-2	—	正方形	0.78	0.65	0.04	
190	か-8-14	N-26°-E	長方形	1.32	0.50	0.11	SE151と重複	221	け-12-16	N-0°	長方形	0.94	0.47	0.13	
191	か-8-20	N-80°-W	"	(1.84)	(0.48)	(0.20)	SE12より新、SE13、SK192と重複								

(3) 井戸跡

検出された151基の井戸跡の分布は、調査区の北半部、グリッドラインでいえば [か] から [こ] の間にほぼ限られる。また、[7] から [10] までは比較的まばらといえるのに対し、以西では極度に密集した状態となっている。細かく見ると東西・南北それぞれの方向に並ぶような傾向があり、第30号溝の両側ではこれと並行して設営されたような状況も窺える。溝や土坑のような区画性に従っているとも考えられるが、一見無秩序でもあり判然としない。

調査では周囲を拡張するなど極力掘り下げることとしたが、覆土はいうにおよばず、地山自体も





ウツギ内

不安定であるため、頻繁な崩落に見舞われた。さらに梅雨期になると崩落は一段と増し、湧水も激しくなってきた。ことここに至り、これ以上の調査続行は危険かつ困難と判断し、平面の確認を主体に、出水面まで(約20cm)の掘り下げにとどめることとした。以後はボーリング棒を用い、必要に応じて可能な範囲で調査を実施した。

ゆえに、151基のうち底面まで確認したものはわずか8基、土層断面を観察できたものも30基にすぎない。以下では、この38基を中心に述べていくこととする。

平面形はすべて円形で、直径0.8m～6m近いものまでさまざまである。ただし、この数値は掘り方を含めたもので、機能していた部分としては最大でも3m弱である。構造は石組みのものが1基(第40号)、充填土によって壁の補強されたものが4基(第6・7・11・102号)で、他はのこらず素掘りである。

石組みと壁の補強されたものの遺存状態は良いが、素掘りのものは既に壁が崩落しており、断面形はかなり乱れている。覆土も下位では自然堆積を示すものの、中位以上では大型の地山ブロックが主体となる。これは、機能時に壁が崩落した場合も補修は行なわれず、新しい井戸が掘られたことを示すものと思われる。なぜなら、崩れてしまった井戸の上部には、人為的に投げ込まれた可能性の高い土が覆っており、これが新規に掘削された井戸の排土と考えられるからである。

底面まで確認できた井戸跡8基の掘削は、いずれも砂礫層を少し掘り込んだ深さまで達している。確認面からは2m弱である。冬季調査時にはこの深さでの湧水はなく、地下水位は現在よりも高かったことがわかる。

遺物の出土は土坑同様に少ない。瓦質の片口鉢・かわらけ・手焙り・常滑甕などの小破片のほか、板石塔婆・石臼・棹秤の石製分銅がある。このうち、板石塔婆は第11号と第50号井戸跡に集中し、ともに覆土の上位からまとまって検出されている。また、石臼の大半は第40号井戸跡からの出土であり、しかもすべて石組みに用いられていたものである。出土土器の年代は土坑よりもやや古く、14世紀後半から15世紀前半が中心であろう。

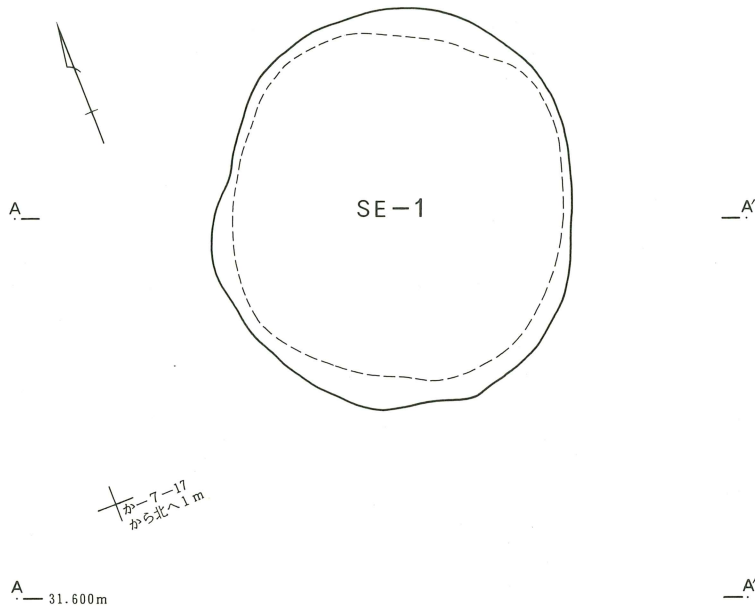
#### 第1号井戸跡(第51図)

かー7ー16グリッドに位置する。直径およそ2.1mの素掘りの井戸で、深さは1.8m以上である。壁は本来垂直で、断面形は筒形であったものと思われる。現状では中程が崩壊し、大きく抉れている。

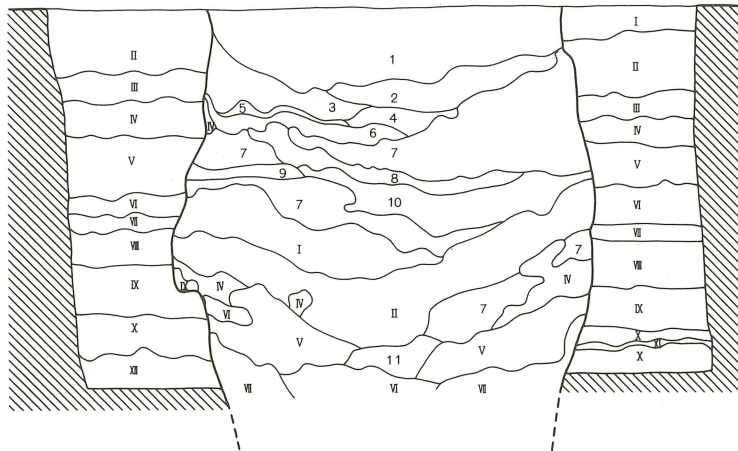
覆土は中位以下が崩落土で、地山の大型ブロックからなっている。最上部の1～3層は埋め戻し土である。このことから、本跡は壁崩壊後も掘り直されずに放置され、まもなく埋め戻されたものと考えられる。

#### 第3号井戸跡(第52・53図)

かー7ー24グリッドに位置する。平面はほぼ円形で、最大径1.95mを測る素掘りの井戸である。断面形は乱れるが、西側の壁の遺存状態から見て、漏斗状を呈していたものと思われる。覆土は崩落土あるいは埋め戻し土を主体とし、上位には人頭大の礫を多く含む。これより押印された常滑の甕破片が出土している(第76図1)。



SE-1



第1号井戸跡土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 白色ないし灰色の粘質土ブロックと褐色土からなる。
2. 10YR3/4 暗褐色土 基本は1だが、粘質土ブロック少ない。
3. 10YR3/4 暗褐色土 基本は1だが、粘質土ブロック極少。
4. 10YR3/4 暗褐色土 黄色砂ブロック・黒灰色土ブロック多。
5. 10YR3/4 暗褐色土 地山Iの流入土層。軽石粒多。
6. 10YR3/4 暗褐色土 軽石粒をわずかに含むが、概ね単一的。
7. 10YR3/4 暗褐色土 主に黒灰色土ブロックからなり、ボソつく。
8. 10YR3/4 暗褐色土 地山IVの崩落土層。
9. 10YR3/4 暗褐色土 黄色土・灰色土粒を多く含む。
10. 10YR4/2 灰黄褐色土 暗灰色粘質土ブロックからなる。
11. 10YR4/3 地山Vブロックを含み、やや砂質だが粘性強い。

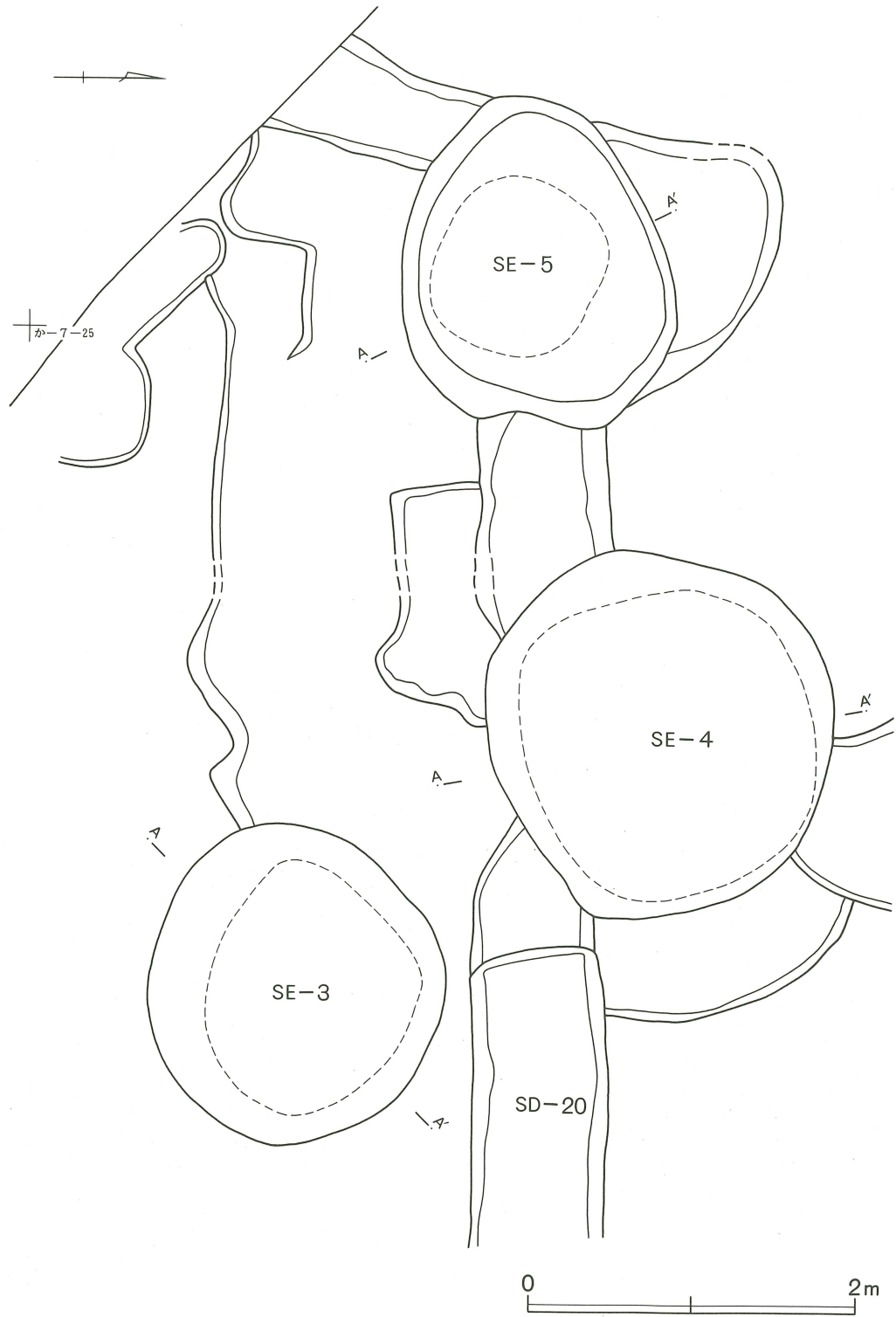
地山土層説明

- I. 10YR3/4 暗褐色土 多量の軽石粒、少量のC粒を含み、ザラつく。
- II. 10YR4/4 褐色土 主に砂質黄色土ブロックからなる。
- III. 10YR3/4 暗褐色土 多量の軽石粒、少量のC粒・IIブロックを含む。
- IV. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 暗灰色粘質土ブロック・Fe化砂粒からなる。
- V. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 IVの漸移変化層。しまり弱く全体に砂質化。
- VI. 10YR4/2 灰黄褐色土 IVの漸移変化層。しまり強く粘土化。
- VII. 10YR4/2 灰黄褐色土 IVの漸移変化層。Fe粒多。C薄層3〜4枚はさむ。
- VIII. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 基本はVII。Fe少なく、粘土化進行。
- IX. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 白色・黄色の粘土層が互層となる。
- X. 10YR3/1 黒褐色土 単一的な粘質土層。Fe少。
- XI. 10YR4/2 灰黄褐色土 VII・IXがブロック状に混じる。黒色帯となる。
- XII. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 単一的な粘質土層。

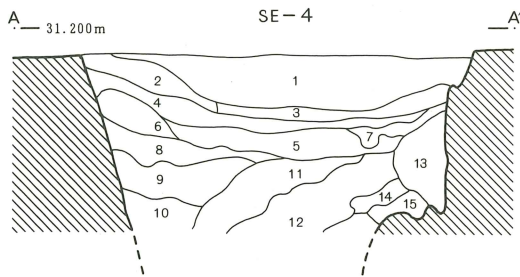
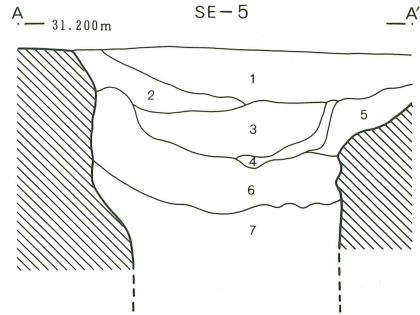
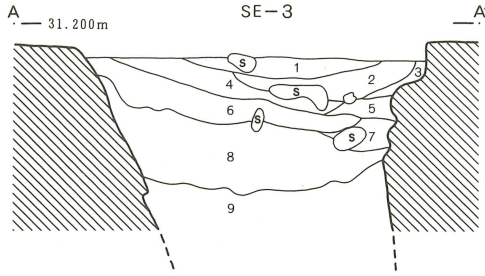


第51図 第1号井戸跡





第52図 第3～5号井戸跡(1)



第4号井戸跡土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土・暗灰色土からなる。灰・スコリア多。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 灰黄色の砂質粘性土。Fe化する。
3. 10YR3/4 暗褐色土 1に準ずるが、色調暗く混有物不含。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 2に近似するが、黄色味弱く非砂質。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 4を基本とするが、褐色土・砂が多い。
6. 10YR3/4 暗褐色土 地山と灰色土の溶混化したもの。
7. 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色地山からなる。灰色土粒少。
8. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土・灰色土・砂からなる。ボソボソ。
9. 10YR3/3 暗褐色土 ほとんど地山I。
10. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど地山I。単一的。
11. 10YR3/4 暗褐色土 7・9・灰色土からなる。しまり弱くボソつく。
12. 10YR4/2 灰黄褐色土 ほぼ暗褐色土ブロック単一でなる。
13. 10YR3/4 暗褐色土 9・灰色土ブロックからなる。
14. 10YR3/3 暗褐色土 9を基本とするが、微量の灰色土を含む。
15. 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色地山からなる。

第3号井戸跡土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 灰色土ブロック多。B・C粒少。
2. 10YR3/4 暗褐色土 少量のB・C粒を含むが、概ね単一的。
3. 10YR4/4 褐色土 壁の崩落土層。しまり弱い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 1に近似するが、ブロック小型化、C粒多。
5. 10YR3/4 暗褐色土 2に準ずるが、C・Fe粒多。
6. 10YR3/4 暗褐色土 4に準ずるが、色調暗く、粘性強い。
7. 10YR4/4 褐色土 微量のC・灰色土粒を含むが、概ね単一的。
8. 10YR3/4 暗褐色土 全体的に灰色味を帯び、粘性強い。
9. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど地山I。B・Fe・灰色土微。

第5号井戸跡土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 灰色土ブロック多。B・C粒微。
2. 10YR3/4 暗褐色土 暗灰色土ブロックからなる。C粒微。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 暗灰色土・暗褐色土ブロックからなる。B・C粒多。
4. 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土地山からなる。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山と灰色土の溶混化したもの。B・C粒微。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 3に準ずるが、灰色土粘土化。ブロック大型。
7. 10YR3/4 暗褐色土 3に準ずるが、灰色土粘土化。ブロック大型。



第53図 第3～5号井戸跡(2)

第4号井戸跡(第52・53図)

かー7-24グリッドに位置する。直径約2mの素掘りの井戸で、旧状での断面形は漏斗状であったと思われる。覆土上位は自然堆積土、以下は崩落した地山ブロックからなっている。片口鉢の口縁部破片(第76図2)が1点出土している。

第5号井戸跡(第52・53図)

かー7-25グリッドに位置する。平面は楕円形で、最大径は2.1mを測る。壁上位の崩落は激しいが、本来は筒形の断面であったことが推定される。覆土はほぼ埋め戻された土で構成され、ブロック状でしまりは悪い。

第6号井戸跡(第54図)

きー7-5グリッドに位置し、掘り方は2.3m×1.8mほどの楕円形を呈している。その東半部には粘質土が半円形に貼られていることから、本来の開口部は径1.1mほどであったと考えられる。充填された粘質土は厚さ40cmほどで、上部が崩落しているものの全体によくしまっている。断面は掘り方、機能部ともに円筒形で、比較的遺存状態は良く、垂直な壁が保たれている。覆土は9層以下

ウツギ内

が崩落土ないしは埋め戻し土、上位は自然堆積土である。覆土中からは鉢の口縁部破片が1点出土している。

第76図3は片口鉢で、外面には櫛歯状工具による沈線が横走する。

#### 第7号井戸跡(第56図)

きー7-5グリッドに位置する。掘り方は4.6m×5.5mの不整な円形で、開口部は1.5m程度となる。充填土は幅1.5mがドーナツ状に詰められたもので、地山のブロックで構成されている。覆土中に井戸枠と思しき腐植土層が認められたが、開口部の大きさを考えるとやや疑問である。また、南東部分には別の充填土が見られる。平面的に見るとこの部分はかなり突出しているなど、既に埋没していた別の井戸跡の覆土であるかもしれない。開口部の断面は筒形で、その覆土は埋め戻されたものである。

これより押印された常滑の甕破片(第76図4)が出土している。

#### 第8号井戸跡(第57・58図)

かー7-19グリッドに位置する。素掘りの井戸で、平面は直径約1.8mの円形である。上端が崩壊するものの、断面はほぼ筒形となる。覆土は埋め戻し土で、灰色土・黒色土などのブロックからなり、東側より投げ入れられている。

#### 第9号井戸跡(第57・58図)

かー7-19グリッドに位置する。径1.5m×1.9mの楕円形を呈する素掘りの井戸である。崩落のため、西側の壁はオーバー・ハングしている。本来の断面形は筒状であろう。覆土は崩落土(下位)と埋め戻し土(上位)からなっている。

#### 第10号井戸跡(第59図)

おー8-18グリッドに位置する。上部はやや崩壊するものの、旧状をよくとどめている素掘りの井戸である。平面は直径約1.1mの不整円形で、断面は漏斗状を呈する。確認面から底面までの深さは1.25mを測る。底面は概ね平坦であり、径は0.5mほどを測る。覆土は自然堆積を示し、埋め戻された様子は窺えない。本遺跡の井戸跡では小型の部類に属する。

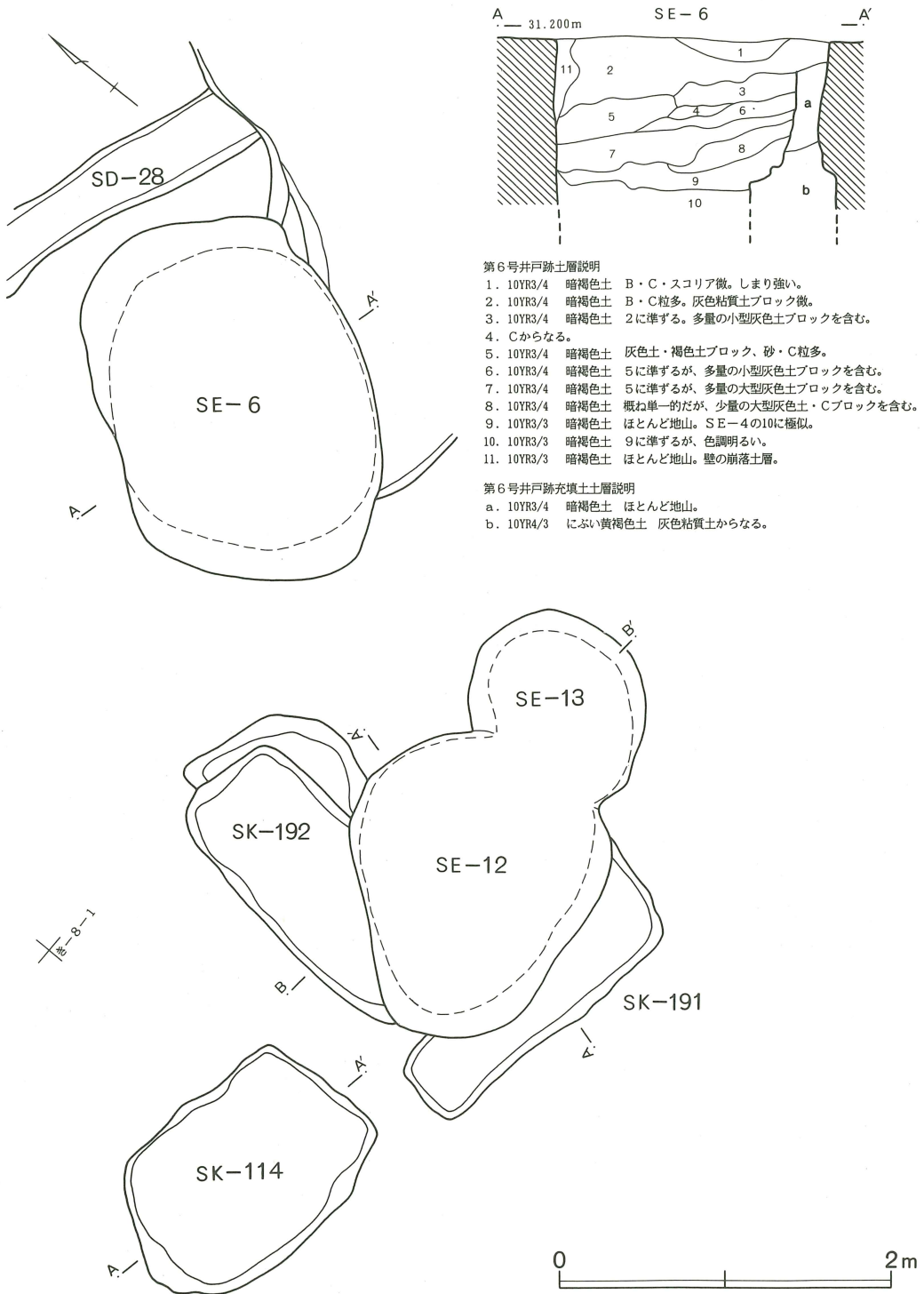
#### 第11号井戸跡(第59図)

かー8-11グリッドに位置する。掘り方は径2.8mほどの不整円形で、これに幅0.4mから0.8mにわたり、円筒状に粘質土が詰められている。開口部の径は約1.4mになる。断面形は掘り方・機能壁ともに漏斗状になると思われる。本井戸跡には遺構確認時より、その中央部に拳から人頭大の礫や板石塔婆が密集していたため、これを崩壊した石組みの一部と推測した。しかし、含まれていたのは覆土上位のみであり、掘り下げても石組みは検出されなかった。このことから、礫や板石塔婆は井戸の埋没途中、一括して投棄されたものと判断される。

なお、覆土および充填土はほぼ単一であるが、作図後の十分な観察を怠ったため、ここに示すことができなかった。

遺物は上述の集石部から出土したもので、石臼2、板石塔婆4である。第78図1は安山岩製の上臼で半分に分かれている。復元径21cm、高さ14cm、芯棒受けの孔径1.9cmを測る。挽き木の装着孔は径2cm、深さ3cmで、指し込み口部分の器表面は丸みを有している。利歯の副線は7～8本を1単位





第54図 第6・12・13号井戸跡 第114・191・192号土坑(1)

とし、全体では矢羽状に7分画されるものと思われる。2は安山岩製の下白で、現存高8.3cm、芯棒孔の径1.7cm、使用面の復元径は約17cmである。利歯の副線は5単位になると推定される。

板石塔婆はすべて緑泥片岩製である。第77図1は残存長27.5cm、残存幅21cm、厚さ3cmで、二条線と主尊種子を残す。阿弥陀(キリーク)一尊であろう。2は残存長26cm、残存幅12.5cm、厚さ2.7cmで、二条線と右側の枠線を残す。わずかに認められる主尊種子は阿弥陀(キリーク)であろうか。3は残存長26.9cm、幅14.9cmを測る。阿弥陀(キリーク)一尊で、光背と蓮座を備える。紀年銘は文明十六(1484年)と判読される。4は頭部の一部を欠きながらも、ほぼ全体の知れる小型の板石塔婆である。残存長36.1cm、幅11.6cm、厚さ2.3cmを測る。表面には阿弥陀種子(キリーク)、蓮座、紀年銘らしき刻字が見られる。紀年銘は剥離や風化が激しいため、判読不能である。

第12号井戸跡(第54・55図)

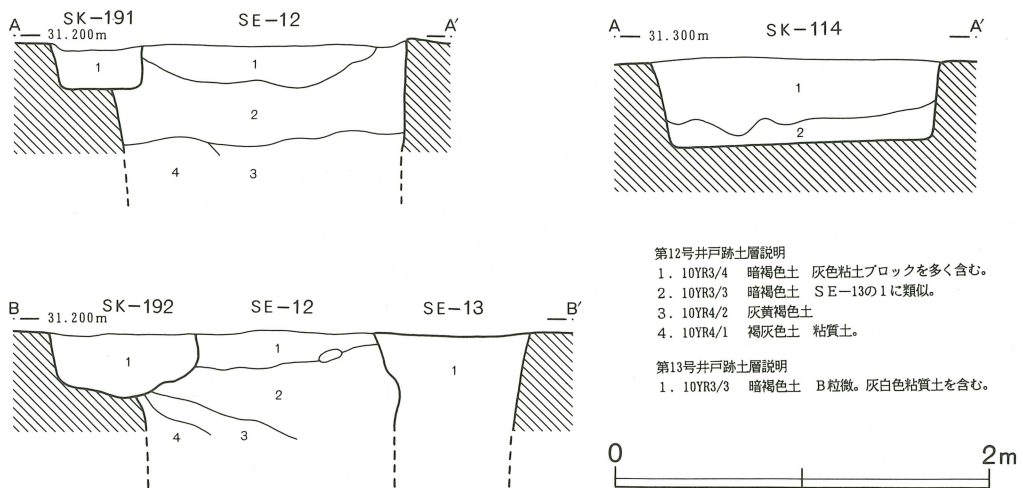
かー8ー20グリッドに位置する。第13号井戸跡と第191・192号土坑の3基に切られる。これらの設営は、第12号井戸跡が完全に埋没した後に行なわれている。平面はいびつな鶏卵形で、径は1.8m×1.5mを測る。南西部分は崩落しているようである。おおよそ断面は筒形となり、壁は垂直である。覆土は灰色の粘質土ブロックを主体としており、人為的に埋め戻されたものである。

第13号井戸跡(第54・55図)

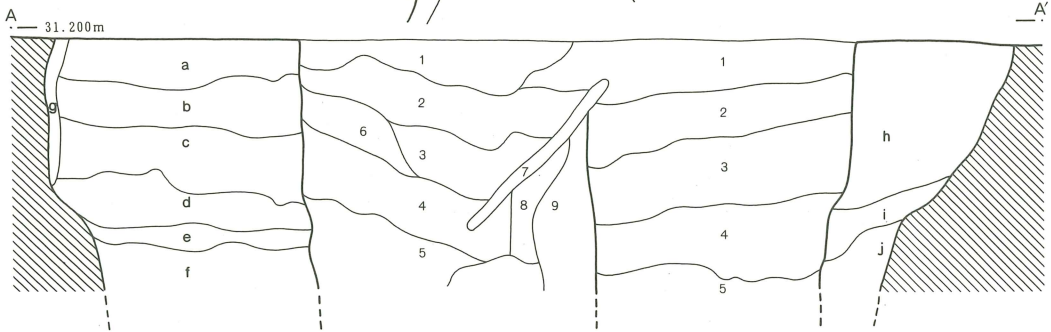
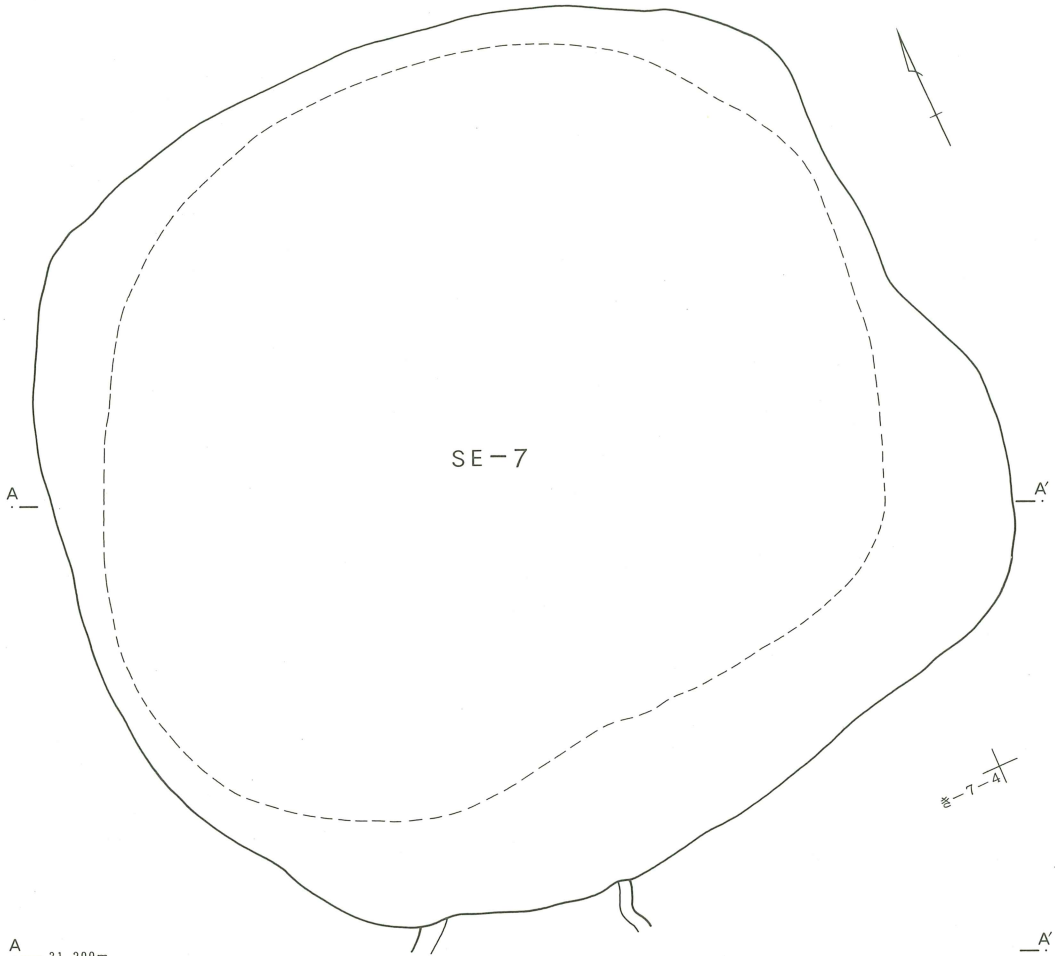
かー8ー20グリッドに位置する。第12号井戸跡を切断して構築されている。0.8m×1.2mの楕円形で、断面は筒形ないし漏斗状になると思われる。覆土は単一で、埋め戻し土である。

第14号井戸跡(第60図)

きー7ー10グリッドに位置する。平面は最大径1.5mほどの不整な楕円形で、断面が筒状あるいは漏斗状となる素掘りの井戸である。覆土は単一で、埋め戻し土である。



第55図 第6・12・13号井戸跡 第114・191・192号土坑(2)



第7号井戸跡充填土土層説明

a~f. 大型暗灰色粘質土ブロック+黄褐色土ブロックからなる。いずれも軽石を多く含むが、分層はブロックの混有程度と大きさによった。  
 ブロックはa (多) → f (少)。  
 ブロックの大きさはa (小) → f (大)。  
 色調はa (暗) → f (明)。軽石はa (多) → f (少)。  
 しまりはa (強) → f (弱)。粘性はa (弱) → f (強)。  
 g. 地山の溶化混入層。  
 h. ほとんど褐色土地山。少量の粘質土ブロックを含む。  
 i. hに準ずるが、灰色土を全体に溶化混入。  
 j. iに準ずるが、灰色土を多く含む。

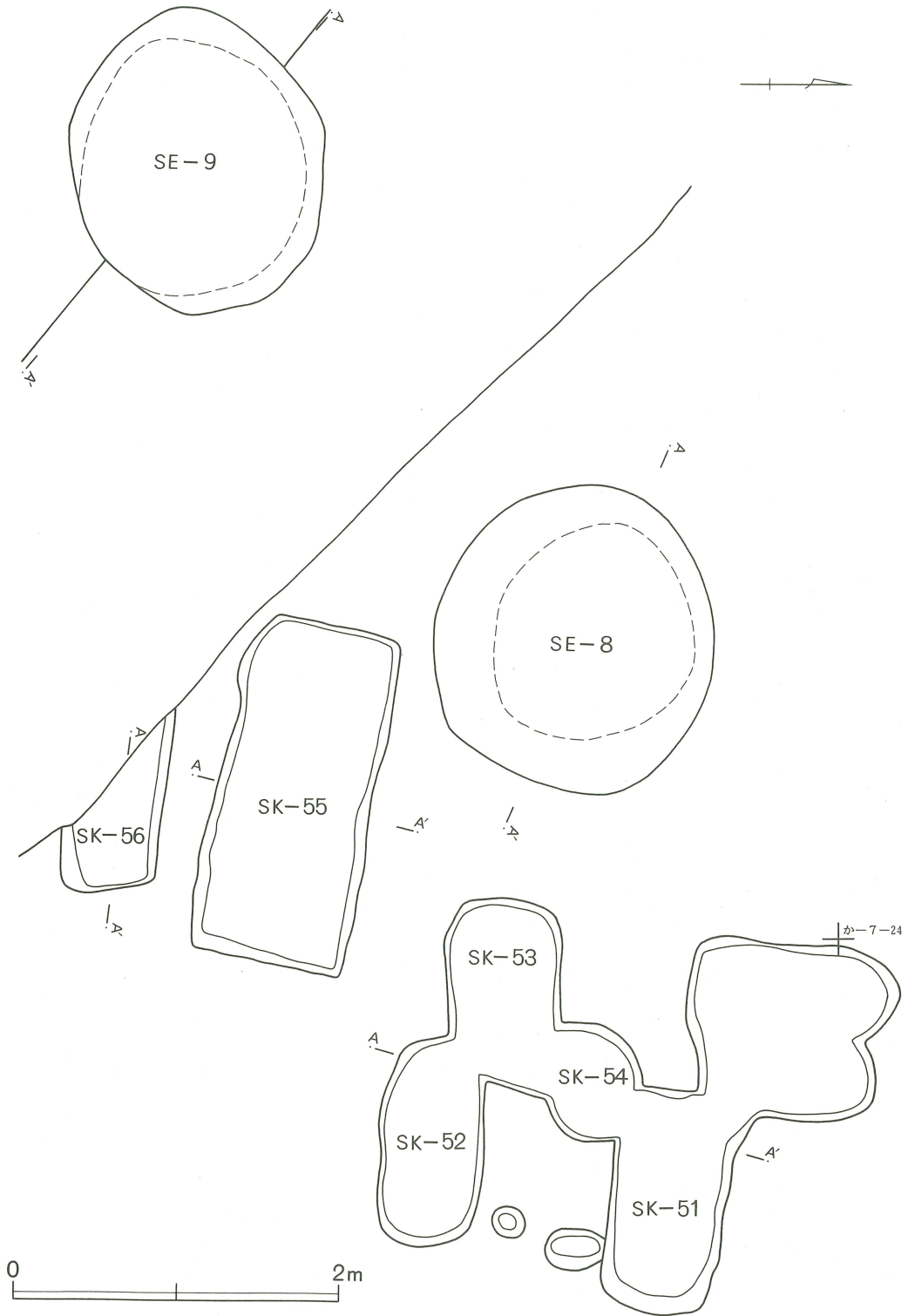
第7号井戸跡土層説明

1~6. 暗茶褐色土+小型灰色粘質土ブロックからなる。人為的な埋め戻し土。分層はブロックの混有程度によったが、上層ほど軽石を多く含み、下層ほどブロックが大型となる。  
 7. 木質が腐食、粘質土化したもの。井戸枠か。  
 8・9. 7の倒壊により、充填土b~eが崩落したもの。



第56図 第7号井戸跡





第57図 第8・9号井戸跡 第51~56号土坑(1)